

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1983年度

1984年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

豊かな自然に恵まれた柏原市は、その豊かな土地ゆえに古来多くの人々が営みをはぐくんできました。私たちの祖先は、野山では石斧を手に駆けめぐり、水辺では魚介を追うことから始まった日々の生活の糧をえるために続けた自然との戦いの足跡を数多く残しています。

全国一の分布量を誇る平尾山古墳群や、アルプル・スカンジナビア・シベリアなどの岩壁画とも共通するといわれる線刻壁画を有する高井田横穴群。国分寺や日本最古の墓誌が発表された松岳山古墳群。これらの文化財はそれをはぐくんできた自然との調和の中で、保護、保存をはかり、後世に伝えてゆくことが現代に生きる私たちのつとめです。

ここに記載する資料は、昭和58年度の柏原市内における住宅建設等の土木工事に伴う緊急事前発掘調査でえられた貴重なものです。この貴重な資料をえるにあたり、関係各位から郷土柏原の地に対する深いご理解のもとに、いろいろとご協力を賜わりました。記して深謝の意を表します。

柏原市では、昭和55年度からの発掘調査資料や市民の方々から寄贈いただいた資料を教育センターの一階『歴史資料館』において公開すべく準備をすすめています。

昭和59年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、国庫補助事業（総額 7,000,000 円、国補助率 50%、府補助率 25%、市負担率 25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、北野 重、桑野一幸、花田勝広、安村 俊史を担当者とし、昭和 58 年 4 月 1 日に着手し、昭和 59 年 3 月 31 日をもって終了した。
3. 本書には、文化財保護法第 57 条の 2 に基づく、届け出があった 190 件のうち、昭和 58 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに着手した、個人住宅建設に伴う事前発掘調査の概要を記載している。
4. 調査の実施と整理にあたっては、以下の諸氏の協力をえた。

広岡 勉	山内 都	大塚淳子	松田光代	苅野絹子	石田成年
佐藤 尚	山中 茂	井宮好彦	上條裕典	山下裕司	藤沼敏則
丸本周牛	坂井利和	石井敏裕	竹下彰了	藤岡弘子	峰谷直子
奥野 清	道旗甚蔵	井上岩次郎	森口喜信	谷口鉄治	麻栄三郎
川端長三郎	朝田行雄	山田真一	分才春信	西岡武重	玉野正一
岸本重夫	山本芳一	村口ゆき子	飯村邦子	坂本道子	乃一敏恵
松成早苗	横関勢津子	吉居豊子		(順不同、敬称略)	

5. 本書の監修は竹下賢が担当した。また巻末に、本年度の調査を踏まえた市内遺跡群の時期、性格、広がり等について調査担当者によって討議した結果を「まとめ」として付載した。
6. 発掘調査により出土したものではないが、柏原市内の遺跡を知る上で重要なと思われる遺物については、「附章」として掲載した。
7. 本文中の各遺跡の調査附近地図中、黒塗りの調査地区は国庫補助事業による発掘を、網点は原図者負担及び公共事業に伴う事前発掘調査の範囲を示すものである。
8. 本調査にあたっては、写真、実測図などを記録として残すと共に、カラースライドを作成した。広く利用されることを願うものである。また、出土した遺物は、写真、実測図と共に当市教育委員会、歴史資料館にて保管、展示等を行なっている。

目 次

は し が き

例 言

1983年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧	1
大槻遺跡	
• 83-3次調査	3
• 83-5次調査	8
大槻南遺跡	
• 83-4次調査	20
• 83-5次調査	24
大平寺古墳群	
• 83-1次調査	59
高井田横穴群・鳥坂寺跡	
• 83-1次調査	70
玉手山遺跡	
• 83-2次調査	72
国分尼寺跡	
• 83-1次調査	75
五十村庵寺	
• 83-1次調査	79
• 83-2次調査	98

附章

・船橋遺跡 1	104
・船橋遺跡 2	105
・玉手山古墳群 1	107
・玉手山古墳群 2	109
まとめ	110

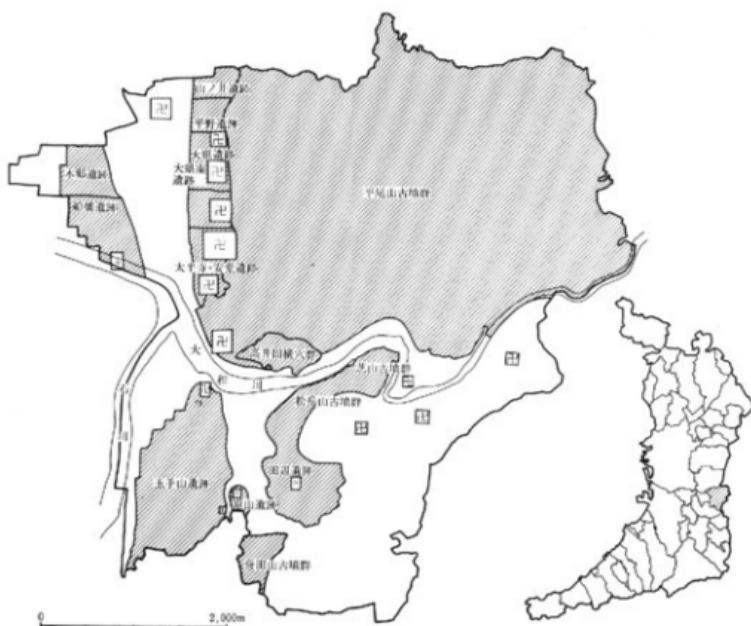


図-1 柏原市内遺跡地図

1983年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧

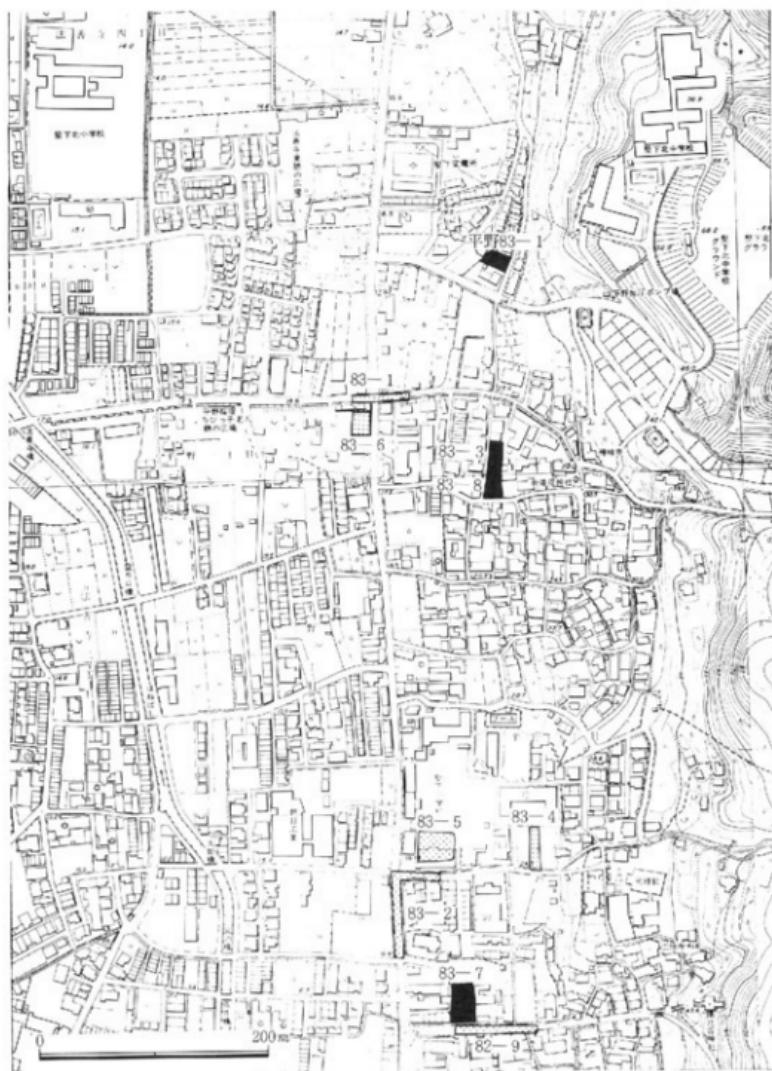
(国庫補助事業)

遺跡名	所 在 地	面積m ²	申 請 者	用 途	担当	調査期日	備 考
船堀 83-1	大正2丁目330 -5	651.0	平田 幸生	個人住宅増築	北野	5.7	2.0×2.7mのトレンチを設定し、G.L.-2.6mまで削削。G.L.-1.6mの地点で地盤に走る中世の柱を検出。下層から土器類、須恵器片が少量出土。
平野 83-1	平野2丁目18 -28	384.61	中村 康一		〃	10.17	1×1mのトレンチを2ヶ所設定。南側トレンチはG.L.-15cmで地山となる。北側トレンチではG.L.-10cmで厚さ30cmの弥生時代遺物但食器を検出し、土器が少額出土。
大森 83-3	平野2丁目388 -9	70.0	小原 孝一	個人住宅建設	桑野	5.13-20	2.5×2mのトレンチを設定し、G.L.-2.6mまで削削。绳文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶瓦等が出土。
〃 83-5	平野2丁目210 -1	1,000.0	柏原市教育委員会		〃	7.21-8.8	15×3m、10×3mの2本のトレンチを設定し、G.L.-4mまで削削。サスカイトの集積するビットのほか、土器類、須恵器が出土。
〃 83-7	大森4丁目91 -1	1,008.73	杉本 重治	個人住宅増築	〃	11.16-17	2×2mのトレンチを設定し、G.L.-1.3mまで削削。5C後半の土器、鉄鏃等を含む遺物但食器を検出。遺構の存在は認められなかった。
〃 83-8	平野2丁目368 -9	82.71	友田 吾秀	個人住宅建設	北野	12.5-6	1.8×1.1mのトレンチを設定し、G.L.-1.1mで弥生・歴史時代の、さらに0.5m下から绳文時代の遺物但食器を検出。
大黒南 83-3	大森4丁目160 -220	220.47	山下 康明	〃	花田	5.4	1×2mのトレンチを設定し、G.L.-1.8mまで削削。最下層から7C代の土器が少量出土。遺構の存在は認められなかった。
〃 83-4	大森4丁目520 -2×3	332.0	古村 正義	〃	北野	10.18-19	2×3mのトレンチを設定し、G.L.-4.0mまで削削。6-8世紀の土器・中世の土器が出土。土器・ビットを検出。
太平寺 83-3	安堂町612-1	158.16	安田 正義	〃	花田	10.17	1×2mのトレンチを設定し削削。G.L.-0.6mで床土を検出した。遺構、遺物の存在はなかった。
太平寺 83-1	大字安堂493 -103、495-1	3,300.0	徳丸 浩子	近隣同根木 仮設場	桑野	5.23-6.20	約40mを調査。権式石室を主体とする古墳1基を確認。6世紀後半-7世紀前半の土器等が出土。
高井田塚 83-1	高井田H617-8 +9	249.0	大里 稔	個人住宅建設	花田	4.27-28	2×2mのトレンチを設定し、G.L.-2.9mまで削削。7世紀の須恵器、12-13世紀の瓦器類が出土。
田辺 83-2	国分木町6丁 上1503	120.66	後藤 一雄	〃	〃	5.12-19	6×8mのトレンチを設定。G.L.-0.6mで地山を検出。遺構は認められなかった。土器、土器、須恵器が少量出土。
国分寺 83-1	国分東町 2580, 1,2	514.6	乾 信雄	〃	桑野	4.7-8	1.5×3mのトレンチを設定。蓮瓣形瓦はほか、瓦器・土器が出土。
五村 83-2	猪ケ丘2丁目 369-36	106.0	大山 道相	〃	北野	11.14-21	5×5mのトレンチを設定。基礎の痕跡を確認。瓦器・土器が出土。
太平寺 83-1	太平寺2丁目 369-12		阪本 正夫	個人住宅建設	竹下	1.24	知禮寺の寺域に当たるため、2×1.5mのトレンチを設定し、G.L.-1.5mまで削削。溝水が著しく、遺構、遺物の存在は認められなかった。
〃 83-2	安堂町924-23	64.51	東郷 正巳	〃	花田	3.19	1×1mのトレンチを設定し、G.L.-1mまで削削したが、盛土・耕土であり、遺構、遺物は認められなかった。
田辺 83-1	田辺2丁目 1231-23	134.24	庵川 光永	〃	北野	1.10	2×3.5mのトレンチを設定。G.L.-0.2mで地山を検出。遺構、遺物は認められなかった。
五村 83-1	猪ケ丘2丁目 369-36	247.0	竹井 葉	〃	〃	12.5-21	1×10m、1×1mのトレンチを設定。瓦器基壇の一剖を検定。瓦器・瓦器等が出土。
源山寺 83-2	猪ケ丘3丁目 1705-3	170.66	阿曾 五三	〃	〃	2.7	1×1mのトレンチを設定しG.L.-0.5mまで削削したが盛土であった。

1983年度柏原市内遺跡群立会調査一覧

遺跡名	所 在 地	面積	申 請 者	用 途	担当	調 査 日	備 考
本 郷	本郷3丁目828	286.50	間下 公三	事務所建設	北野	6.2.9	柏教文1-72 遺物・遺構なし
"	本郷3丁目745地	134.01	柏原市長 山西 敏	倉庫建設	"	11.1.2	柏教文1-122 遺物・遺構なし
船 橋	古町2丁目528-6	125.00	古内 鳩二	個人住宅建設	"	6.2.2	柏教文1-59 遺物・遺構なし
"	古町2丁目514-1	306.25	竹下 正介	"	"	6. 6	柏教文1-69 遺物・遺構なし
"	大庄3丁目274-16	145.41	安田 優	"	"	7.2.9	柏教文1-99 遺物・遺構なし
法善寺廻寺	法善寺3丁目869-1	204	長峰 騎作	店舗・事務所増築	"	9. 5	柏教文1-55 遺物・遺構なし
山ノ井	山ノ井町550-3	80.00	山田 住 宅 株式会社	個人住宅建設	花田	12.2.7	柏教文1-96 遺物・遺構なし
"	山ノ井町551-7	80.27	"	"	"	"	柏教文1-142 遺物・遺構なし
"	山ノ井町550-2	80.00	"	"	"	"	柏教文1-145 遺物・遺構なし
大 蘆	芋野2丁目388-2	26	関西電力	電柱新設	"	"	柏教文1-289 遺物・遺構なし
"	芋野2丁目388-9の一部	114.00	田上 信男	個人住宅建設	"	9.1.3	柏教文1-109 遺物・遺構なし
玉 丁 山	川明町850-3	441.52	日本3Mペーパー 株式会社	倉庫建設	北野	7. 4	柏教文1-75 遺物・遺構なし
"	旭ヶ丘1丁目390-22	375.25	酒井 義夫	個人住宅建設	"	6.3.0	柏教文1-77 遺物・遺構なし
"	片山町2-15	323.00	松永仙太郎	"	安村	6.2.2	柏教文1-83 遺物・遺構なし
"	玉手町595-1	81.26	玉手基 墓 貯金会	樋壁工事	奥野	9. 9	柏教文1-85 遺物・遺構なし
"	旭ヶ丘2丁目371-11	256.00	浅尾 康伸	個人住宅建設	北野	11.3.0	柏教文1-92 遺物・遺構なし
"	旭ヶ丘2丁目871-6	1.09	畠本 郁子	"	塙野	8.2.6	柏教文1-95 遺物・遺構なし
"	玉手町115-48	271.85	二和建設 株式会社	"	"	9.1.7	柏教文1-107 円筒埴輪出土
"	片山町14-18他	52	関西電力	電柱新設	"	9. 9	柏教文1-112 遺物・遺構なし
"	玉手町25-17	306.54	梅野 透	個人住宅建設	花田	11.1.8	柏教文1-119 土器陶、須恵器出土
"	旭ヶ丘2丁目240-35	162.75	加藤八太郎	"	"	10.2.7	柏教文1-126 遺物・遺構なし
"	内明町838-1	35.64	山川 覚輝	倉庫・事務所 増築	北野	11.3.0	柏教文1-139 遺物・遺構なし
"	片山町31-1-2	374.54	東野 利子	個人住宅建設	花田	12.2.7	柏教文1-146 遺物・遺構なし
葛山廻寺	旭ヶ丘3丁目5-2	26.7	赤沢 達善	"	北野	6.2.5	柏教文1-78 遺物・遺構なし
田 道	田道1丁目16-21	26	関西電力	支線新設	安村	5.2.0	柏教文57.1-287 遺物・遺構なし
"	西道1丁目1309-2047	79.6	大阪ガス	ガス管埋設	花田	10. 5	柏教文1-71 遺物・遺構なし
"	国分市場1570 1862-3-5	208.16	高杉開発 株式会社	個人住宅建設	"	10.1.7	柏教文1-132 遺物・遺構なし

おお がた 遺 跡



図一2 調査地区附近地区

83—3次調査

- ・調査地区所在地 柏原市平野2丁目388-9の一部
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1983年5月13日～5月20日
- ・調査面積 17.5m²/70m²

調査概要

今回の調査は個人住宅建設に伴なう事前調査として行なった。縄文早期、後期、晩期の土器が出土した当遺跡82-4次調査地点から北に約50m離れた位置にあたる。2.5m×7mのトレーナーを調査対象地北側に設定し、トレーナー東側では地表下約2.6mまで掘り下げた。その結果褐色

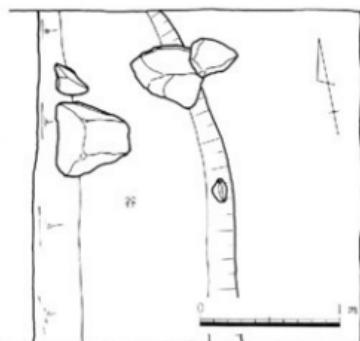


図-3 調査区東側平面図

砂礫土層から6世紀代の土師器高杯、甕、羽釜、須恵器蓋杯、布目痕をとどめる屋瓦類、弥生土器などの小破片が、暗茶褐色砂礫土層、明褐色砂礫土層から繩文土器片、石器が出土した。

褐色砂礫土層は、調査時点で搅乱層と判断した落ち込みの埋土で、出土した遺物が本来存在した包含層の有無、層序としての位置づけは、今回のトレーナー内では明確にできなかった。縄文土器の包含層より下位には砂層が厚く堆積しており、一部固くしまって西に落ちる谷状の地形を形成している(図-3)。そこに花崗岩の自

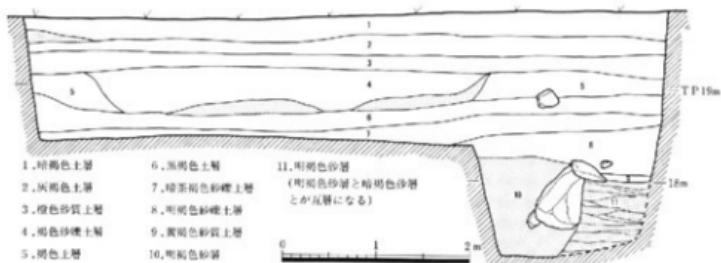


図-4 北壁土層図



図一5 7・8層出土の縄文土器（1）

然石が転落した状況を呈していた。遺跡が生駒西麓に営まれているという自然環境も考慮すると、相当量の上砂の動きがあったものと思われ、縄文土器の包含層自体も砂質で礫塊を多く含むことから、こうした環境に支配されて堆積したものであったろう。ただし器面の磨耗度がそれ程著しくないことからすると、縄文集落は今回の調査地点からそれ程遠くに隔たるものではなかろう（図一4）。

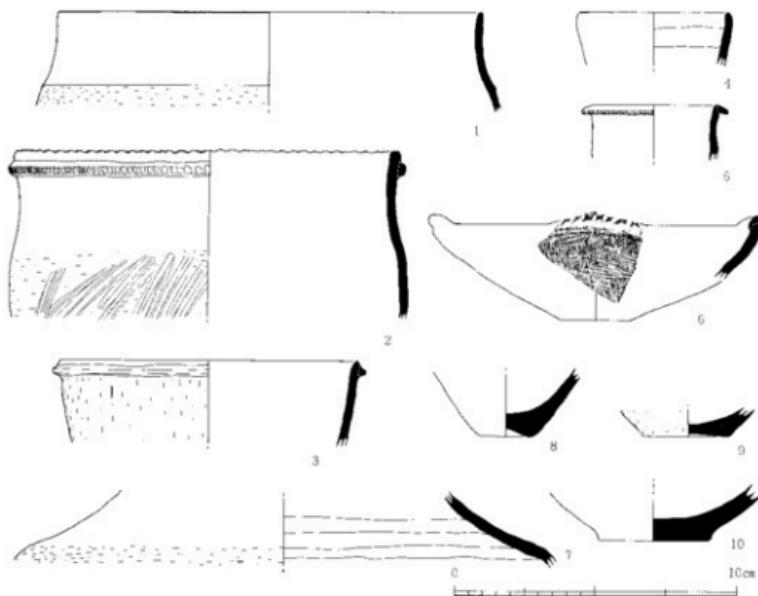
出土遺物

わずかに出土した布目痕のつく屋瓦類は、その確実な包含層を明確にしえなかったが、今回の調査地点が三宅寺推定地に近いことから、今後とも注意しておく必要があろう。ここでは500点以上の破片の出土をみた縄文土器について図示し、概要を記しておく。

縄文土器（図一5、6）

組成としては粗製深鉢、浅鉢（図一5 18, 19 図一6 6）、壺（図一6 4, 5, 7）があり、時期は晩期中葉～後葉（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式が中心）のものが主体を占めている。出土状態からすると、7、8層を時期的に区分することはできなかった。土器片の大半は深鉢の頸部、胴部破片であるが、そこに認められる器面調整はナデ、削りが主体となり、巻貝条痕、あるいは織維束による調整がわずかにみられる。また肩部の屈曲は著しくない。

深鉢を口縁部の特徴から検討すると、①「く」字形に外反しナデ調整による口縁部をもつもの（図一5 17）、②同じく二枚貝条痕によるもの（同 15, 16）、③口縁部をナデ、胴部を



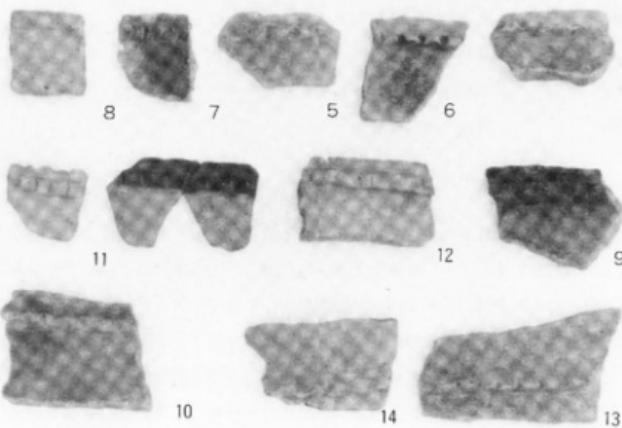
図一 6 7・8層出土の縄文土器(2)

削り調整によるもの(図一 6 1)、④同じく口唇部に刻目をもつもの(図一 5 1)、⑤同じく波状口縁を呈するもの(同 2)、⑥口縁部に刻目突帯をもつもの(同 3~8)、⑦同じく口唇部にも刻目をもつもの(同 9~12、図一 6 2)、⑧口縁部に突帯をめぐらすもの(図一 6 3)に区分されよう。また刻目突帯を口縁部、肩部に2条めぐらすものも明らかに存在する(図一 5 13、14)。ここでは82~9次調査地点が晩期前葉の土器群を主体とするに対し、わずかな距離を隔ててそれ以降の上器が主体を占めている点が注目される。

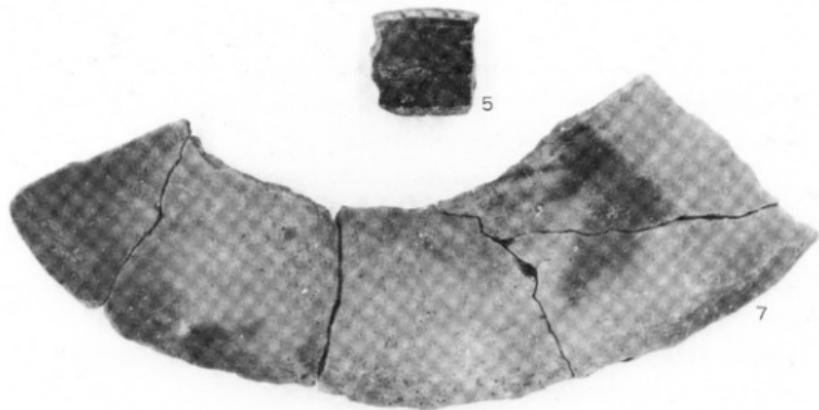
浅鉢には、①黒色磨研で赤色顔料が一部残存しているもの(図一 5 18)、②屈曲部に淡線が施されるもの(同 19)、③口唇部に刻目をもち4単位の波状口縁になるもの(図一 6 6)、などが存在するが数量的には極めて少ない。

壺も出土量は少ないがいくつかの種類が存在する。①直立気味の頸部で口縁部に小さな刻目突帯をもつもの(図一 6 5)と、②刻目突帯をもたないもの(同 4)とがあり、③(同 7)は全体的な器形は明らかにしえないが、肩部が張り、削り調整の肩部をもつ大形の壺であろう。

他に石器として砂岩、凝灰岩製の磨製石斧頭部、サスカイト製打製石鎌、スクレイバーなどが出土している。サスカイト片の出土量も多い。



刻目突帯をもつ土器



壺形土器

83-5次調査

- ・調査地区所在地 柏原市平野2丁目1-5（堅下小学校校庭内）
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1983年7月21日～8月8日
- ・調査面積 75m²/1000m²

調査に至る経過

柏原市立堅下小学校の校庭から出土したといわれる遺物が同校に多数保管されていることはよく知られていることです。この中に弥生土器が数点あり、大県遺跡の上限を示すものと考えられていました。しかし遺構の有無や遺跡の範囲については全く明らかにされていない遺跡でした。昭和57年度に下水管渠埋設工事に伴う事前発掘調査が堅下小学校の校庭に南接する道路敷内において実施され、現地表下約3mにおいて弥生土器を伴う遺構（柱穴と溝）の存在が確認されました。今回の調査は道路敷内で確認された遺構と校庭内の遺跡との関連を把握し、また、遺跡の範囲を確認するために実施した調査である。調査の実施に際し、調査地が校庭にあるため、安全を期して調査期間中のグランド使用を控えていただけたり、その他色々と学校当局のみならず、地域の各位からはご理解とご協力をいただきました。ここに記すことにより、感謝の意のあるところをおくみとりいただきたい。

堅下小学校校庭出土と伝えられる弥生土器については、弥生時代中期の大県遺跡を代表する資料として、あるいは生駒山地西南麓部の弥生中期の標準的な資料として論議の俎上にしばしば上りながら、唯一昭和30年刊行の『柏原町史』に写真が掲載された程度で、これまで詳しく紹介されること少なかった。『柏原町史』は現在では入手困難で利用しやすい資料ではない。今回発掘調査を行なうにあたって、学校側の御好意により資料を実見、調査させていただく機会を得たのでここに紹介し、貢務の一端をはたしたいと思います。

1は高さ42cm、口径19.2cm、胴部径29cmを測る壺形土器。口縁部に2条、頸部から胴上半部に10条の櫛描横線文がめぐらされている。胎土は生駒西麓産のもの。胴下半部から底部にかかる位置に長径2cm、短径1.5cmの長円孔が焼成後穿たれている。

2は高さ20.5cm、口径9.5cm、胴部径20cmを測る短頸壺。頸部から胴上半部に櫛描横線文が密接して14条施されている。胎土は生駒西麓産のもの。

3は高さ9.5cm、口径12.3cmを測るコップ形七器。上半部に3条の櫛描横線文がめぐらされている。胎土は生駒西麓産のもの。

4は高さ15.8cm、口径8.3cm、胴部径13cmを測る壺形土器。文様はなく縦方向のヘラミガキが器面全体をおおっている。胎土は生駒西麓産のもの。

1～3は中期、4も中期に相当する。特に1は円孔の存在から供獻土器ではないかと思われる。



1



2



3



4

堅下小学校校庭出土土器（堅下小学校所藏）

調査経過、層序

講堂の北側に $15 \times 3\text{ m}$ (A)、 $10 \times 3\text{ m}$ (B) のトレンチを東西に 20 m の間隔で2本設定し、調査を実施した(図-7)。

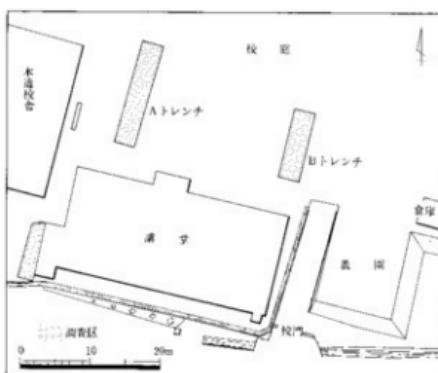


図-7 調査区位置図

Aトレンチは地表下約 4 m まで掘り下げた。図-8に示すような堆積状況を呈しており、②・③層において土師器、須恵器等の小破片を含む包含層を、⑤・⑥層では若干の弥生時代中期の土器片とサスカイト製石器を含む包含層を確認した。また、④層上面から掘り込まれたピット、⑦層上面から掘り込まれた溝、⑧層上面から掘り込まれたサスカイト製石器、石核、剥片を多量に含む土壤等の遺構が検出された(図-9)。

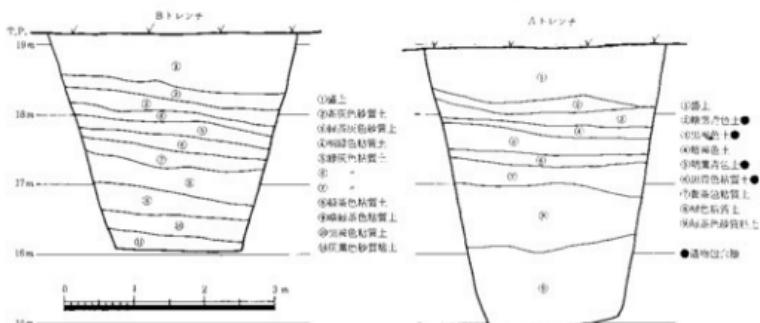
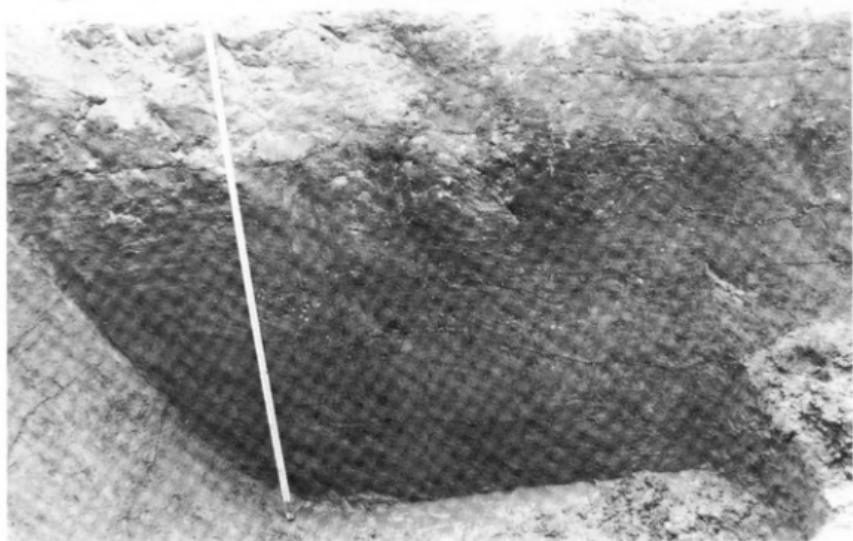


図-8 A・Bトレンチ南壁土層断面図

Bトレンチは地表下約 3 m まで掘り下げたが、遺物、遺構は全く確認されなかった。

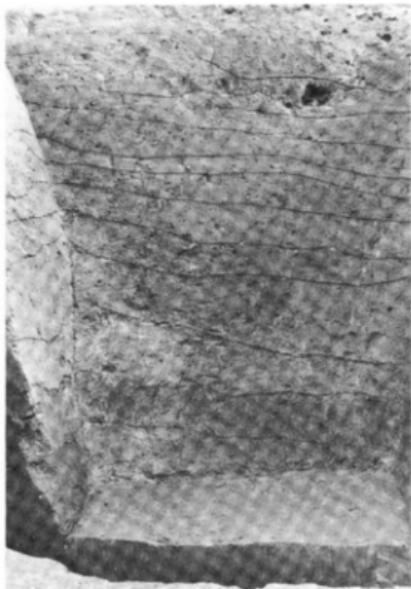
A、Bトレンチの層序を比較すると、Aトレンチ⑧層以下とBトレンチ④～⑨層とでは、遺物を含まない緑色を帯びた粘質土層という点で共通した特徴をもつ。また、Bトレンチ⑩層以下の黒色を帯びる地層はAトレンチでは確認されていない。こうしてみると、調査地点の旧地形はBトレンチからAトレンチにかけて、すなわち東から西に向いて下がる斜面地であったと



A トレンチ西壁上層



B トレンチ全景（北から）

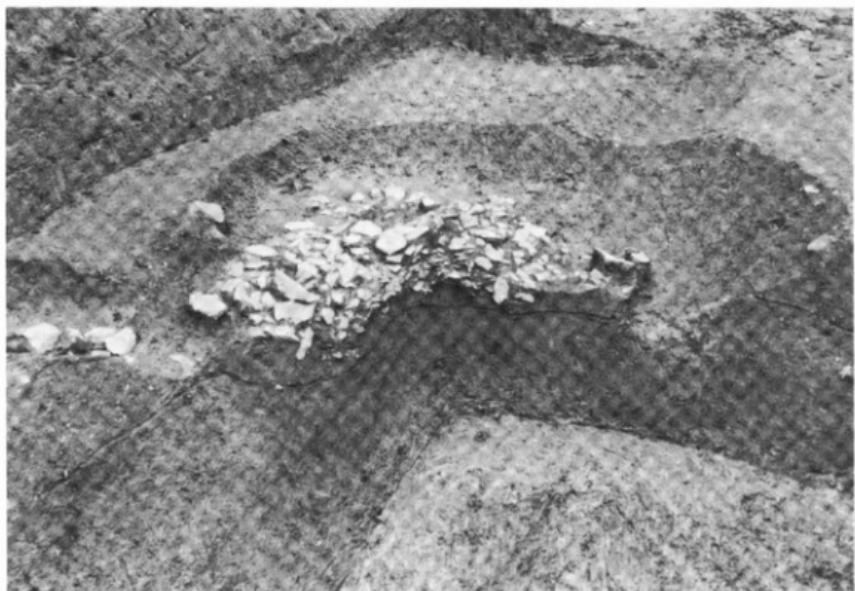


B トレンチ南壁土層

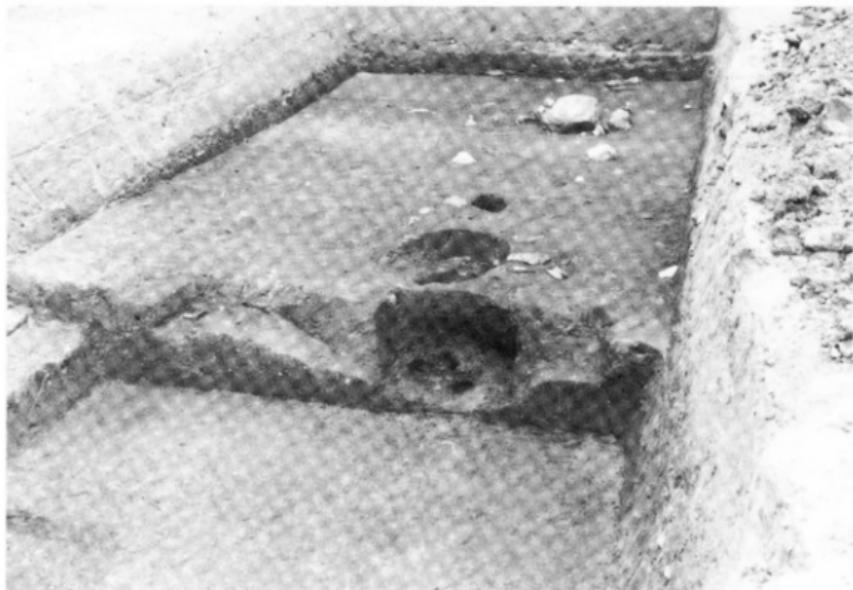
大縣 遺 跡



馬の下顎出土状態



弥生時代の土壤とサヌカイト石片出土状態



③層上面の遺物出土状態（南から）



④層上面、⑤層上面の遺構（東から）

大県遺跡

考えられる。このことは大県遺跡が生駒山地の西麓に位置するという地形環境ともよく一致する。一方南北方向では、ほとんど比高差は認められなかった。

また、Bトレンチで遺物が出土しなかったという状況も、こうした斜面地であったために、Aトレンチで認められた遺物包含層が、東側に設定したBトレンチの位置では校庭の整地の際に削られてしまったのではないかという予測から説明することができよう。

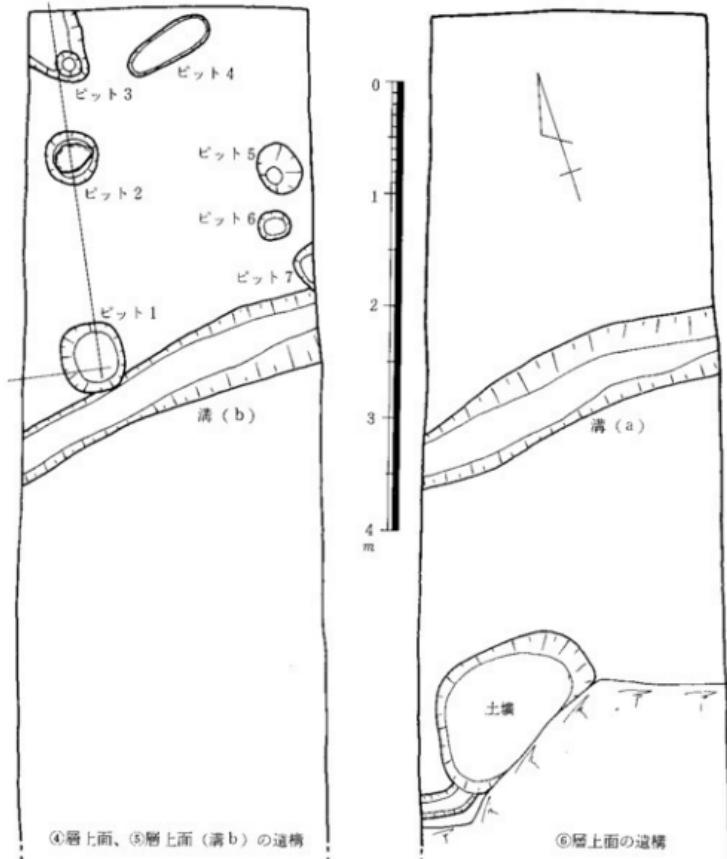


図-9 Aトレンチ遺構図

遺 構

Aトレンチ北側で3つの遺構面を確認した(図-9)。

④層上面では7つのピットが検出された。このうちピット1、2は掘建柱建物の東南部分の柱穴であろう。ピット1は径60cm、深さ38cm。ピット2は径50cm、深さ33cm。柱間はピット1、2間で1.8m。建物、ピットの時期は不明。

⑤層上面からは東西にはしる溝(b)が検出された。幅50cm、深さ35cm。この溝は⑥層上面から掘り込まれた弥生中期の溝(a)と重複しており、やや幅が狭い。おそらく溝(a)の埋没、⑥層の堆積の後、溝(a)の機能を果たすべく再び掘り込まれたものであり、時期も、溝(a)から遠く隔たらないものであろう。

⑥層上面からは溝(a)、土壤が検出された。溝(a)は幅70cm、深さ45cmを測る。弥生第Ⅲ様式の土器片が出土しており、時期は弥生中期頃であろう。土壤は長径1.4m、短径約1m、深さ25cm。約22000点、重量約24kgのサヌカイト製石器、石片が充填されていた(図版)。打製石槍、石剣、スクレイバー等の未製品、破損品、これら打製石器の製作過程を示す石核、剥片、碎片などが含まれていて、石器製作の後土壤中に一括して廃棄されたものであろう。さらに土壤西側の一端に溝が付されており、ここからもサヌカイトの石片が出土している。土壤の一端から溝が出て何らかの機能を果たしていたとすると、この土壤が不用な石片を廃棄するためのみ作られたものではないかと予想される。時期は弥生中期頃であろう。

遺 物

Aトレンチ②・③層出土の遺物(図-10、図版)

土師器、須恵器、平瓦、鉄滓、鶴羽口、馬の下顎骨、人・小白歯などが出上している。土器類は小破片が多く器形を復原できるものは少ない。

1～3は②層出土の須恵器蓋杯。1の杯蓋は天井部と口縁部の間の稜がなく、丸くゆるやかにカーブする。2、3の杯身はたちあがりが短く、内傾するもので、口縁部、受部端部は丸く仕上げられている。これらは6世紀中頃から7世紀前半のものであろう。

4～7は③層出土の須恵器、8～11は土師器。4の杯身はたちあがりが高く、底部は丸味をもつ。口縁端部は丸く仕上げられている。5は底部が平らで、口縁部は直立気味にたちあがる。底部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。6は高台のつくものである。7は無蓋高杯の脚部。杯部と接する基部は太く、八の字形にひらく。8、9は土師器の杯。8は浅く、内外面ともナデ調整。9は深く、外面上半部へラ磨き、下半部ナデ調整。内面には斜放射状の暗文がみられる。10は小型の甕。口縁部は外側に大きくひらき、胴部はそれほどふくらまない。口縁部から内面にかけてナデ調整。11は羽釜。内外面ともナデ調整である。10、11の胎土には角閃石、石英などを含み、いわゆる生駒西麓の土を用いている。これらの土器は6世紀前半、末、7世紀前半、後半のものである。

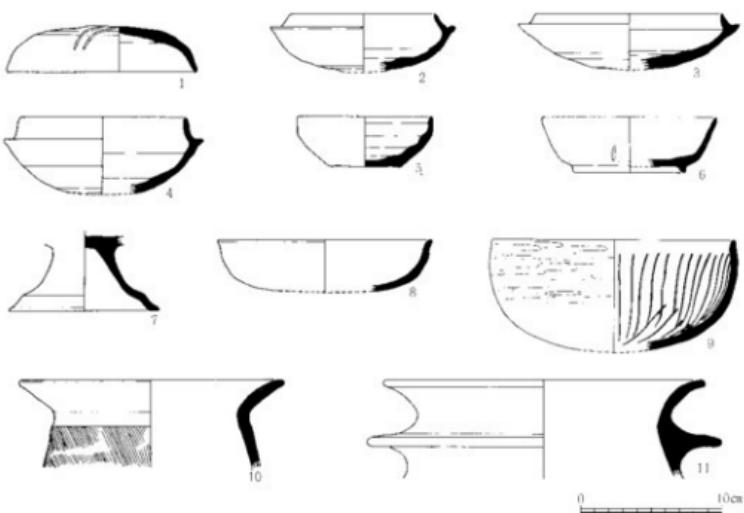


図-10 Aトレンチ②・③層出土の土器実測図

他に製鉄関係の遺物として鉄滓、鞴羽口が出土している。鉄滓の総重量は15.07kgを測る。平瓦は縄叩き目が施され奈良時代のものである。

このように②、③層は時期的に前後するものではなく、6世紀前半から7世紀後半、8世紀代の遺物の包含層として、一つにまとめられるものであろう。

Aトレンチ土壤出土の石器（図-11、図版）

土壤内のサヌカイト石片を取り上げるに際し、今回は2mmメッシュのフリイを用い、土壤内の土もあわせて水洗選別するという方法をとった。その結果、得られた資料中には長さ1mm前後の微細な碎片が混じっていて、水洗の際に2mm以下の碎片の大半は失なわれることになったが、それでも2万点以上の剥片、碎片を得ることができた。

現在これらの資料については整理中であり、若干の気づいた点について報告しておきたい。

器種組成において注意されるのは、両面調整加工石器の打製石槍、石劍などの武器類の占める割合が多いことである。これらは半分に折れていたり、調整が粗雑であったりする点など、未製品あるいは加工途中で破損してしまったものばかりである。図-11に示した打製石剣も、例えば恩智遺跡出土の柄部分に桜の皮を巻いた例と比較すると、刃缺等における調整加工が荒く、また表面ともに一部に自然面を残していて、まだ、未製品の段階ではないかと思われる（註）。半分に折れたので放棄されてしまったのだろう。こうした石器類に対応するように、剥片類のほとんどは、いわゆるポイント・フレイクとされるものであり、しかも自然面を残し

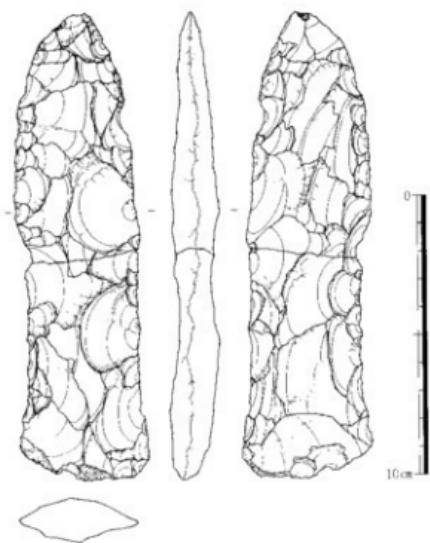


図-11 土壤出土の石剣実測図

ているものが圧倒的に多い。

接合資料は現在まで31例得られたが、中には石核と剥片が9点接合し、ほぼ原石の大きさが復原できるものもある。図版に示したものをみると縦、横約20cm前後、厚さ5cm前後の原石が持ち込まれている。また、原石を分割して2点の石核、1点の石槍の素材を得ている例も存在する。

石器、剥片の特徴、接合資料などから推定すると、この土壤中に投棄された、一括資料を残した石器製作過程の中には、平たい原石を2、3個程度に分割し、調整加工を施して打製石槍、石劍等の武器類を製作することを目的としたものや、例えばB5判程度の本のような形状の原石をもとにして石核を作り、小形の剥

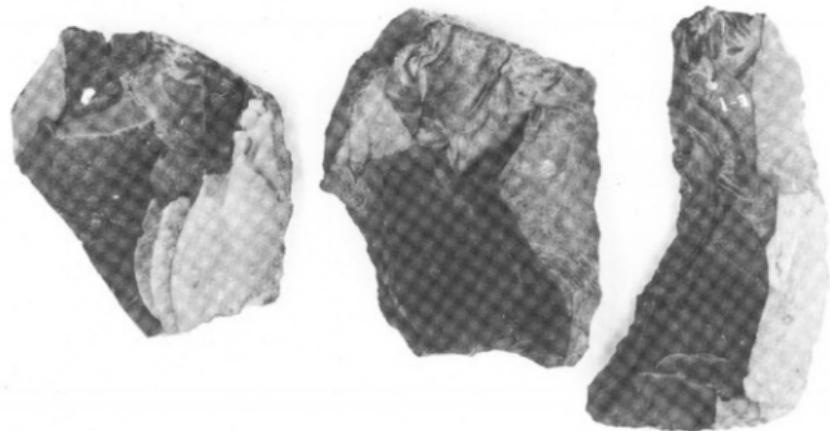
片を得ることを目的とした石器製作過程が存在するようではある。また、基本としてサヌカイト産地から厚みのない原石を選択的に持ち込んでいる様子も想定されよう。

註 恩智遺跡の打製石剣は尖鋭な先端部をもち、柄となる基部の調整も入念に行なわれていて、調整剥離後に刃消しを行なっていると観察されている。

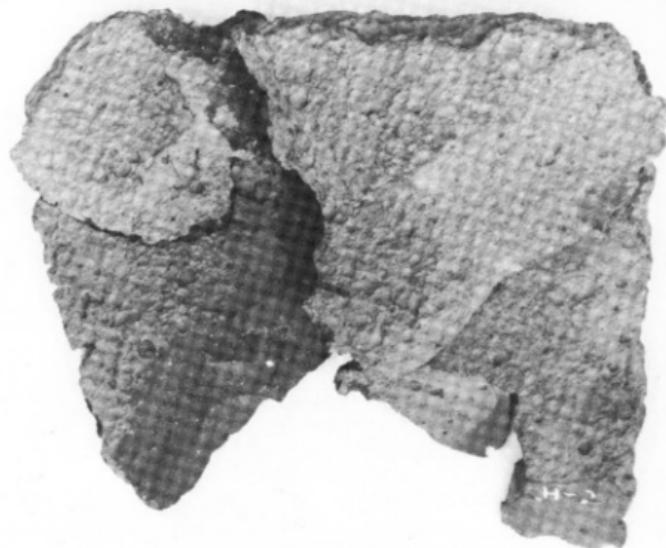
森田季一（1980）「第6章 石器・その他の遺物」『恩智遺跡I』瓜生堂遺跡調査会



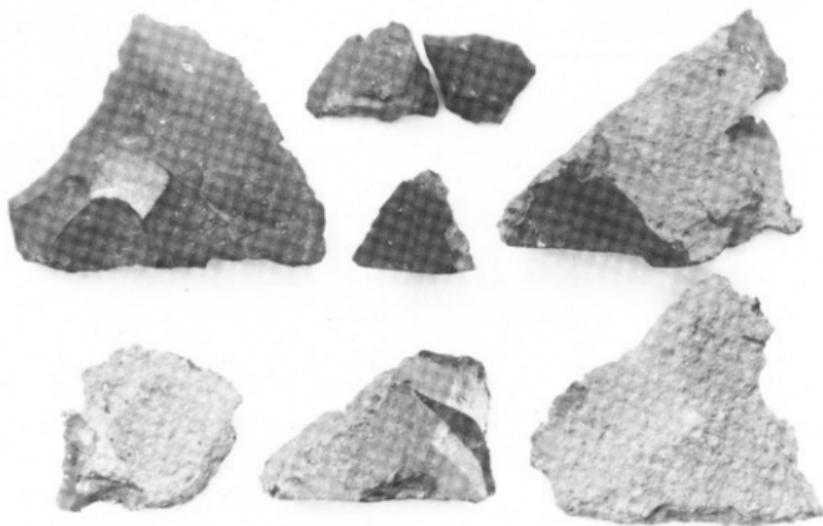
接合資料 A 接合狀態



接合資料 A



接合資料B 接合状態



おお がた みなみ
大県南遺跡

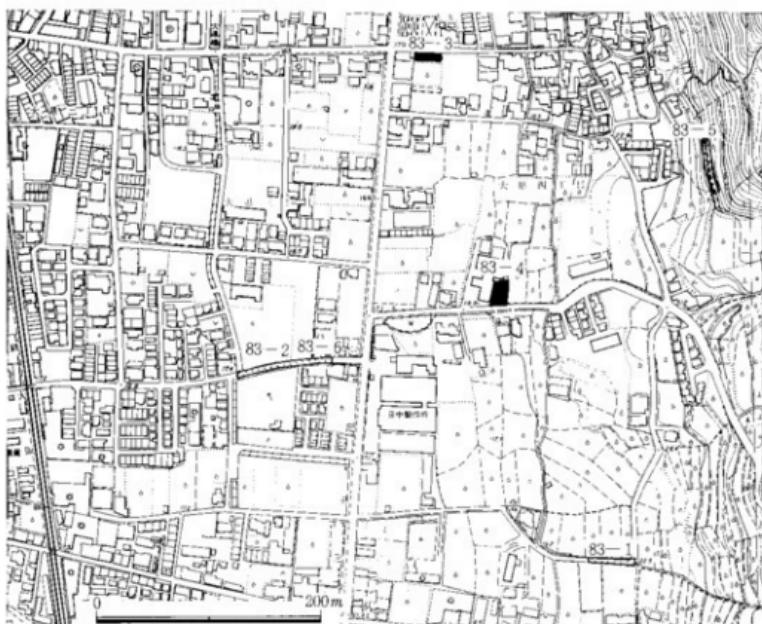


図-12 調査区附近地図

83-4次調査

- ・調査地区所在地 柏原市大県4丁目502-2, 3
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 1983年10月18日・19日
- ・調査面積 6.3 m² / 332 m²

生駒山地には多くの開折谷があり、その開折谷からの流れによって扇状地が形成されている。この扇状地の先端を生駒山地と平行して南北方向に走る旧国道170号線（東高野街道）がある。この開折谷の根幹部には飛鳥時代創建の山下寺があり、調査地はこの山下寺と東高野街道との中間点附近の西向きの緩斜面地である。附近的調査例から、古墳時代中期から6～8世紀に継続する集落址の遺構や遺物が検出されている。また、中世の遺物も多く出土し、遺構の検出も

ある。しかし、調査面積が狭小であり、遺跡の概要も遺物によって判断しなければならないのが現状である。

調査は、個人住宅建築のための事前緊急発掘調査である。現状は果樹園で前面に一段高い道路がある。住宅はこの前面道路に合わせるように盛上して施行する予定であるところから、調査は遺跡の環境復元に心掛けるだけのトレンチを設定した。基本層序のうち、2は耕作前に埋立てられた整地層で新しい時期のものである。3は6～8世紀の遺物包含層で、埋土中、土師器、須恵器、鍛冶関係の遺物、少量ではあるが上面では瓦器の出土もあった。3上面に土壤が検出された。1.3×1.4mの隅丸方形の土壤である。深さは0.7mで底部は舟底状である。埋土下層より土師器、瓦器片が出土した。4は遺物が出土したが、それぞれ細片である事や10～20cm大の礫が多く見られ、洪水等による堆積ではないかと判断される。4除去後に3個のピットを検出した。ピット2・3の底部には平坦面を持つ石があり、掘立柱の柱穴の根石としたものと考えられる。5は弥生時代の遺物包含層である。遺物の混入は少ないが、サスカイト製石鐵や後期に属する土器が出土している。

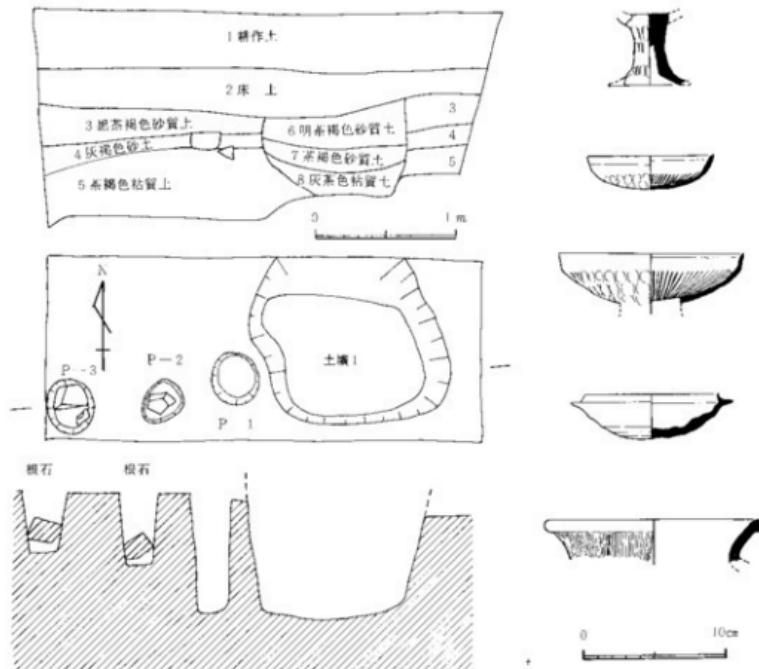
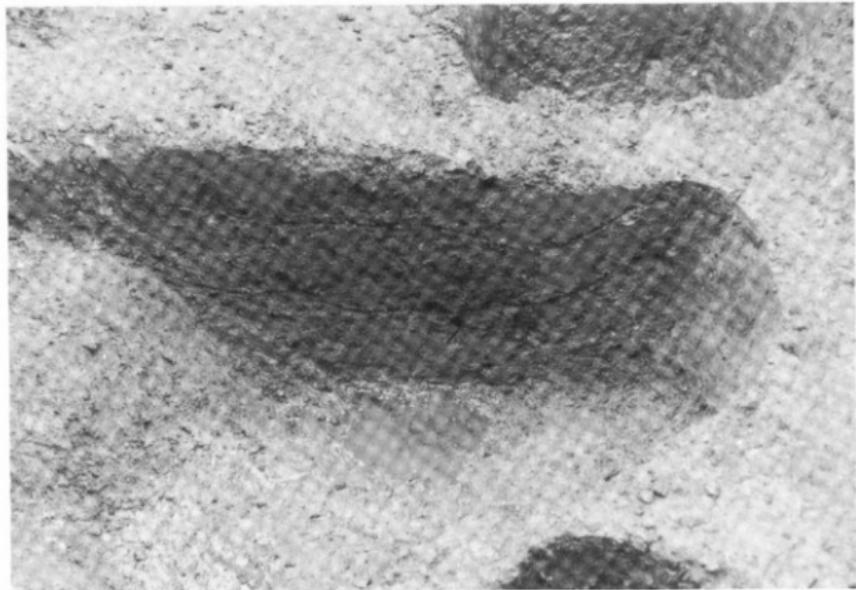
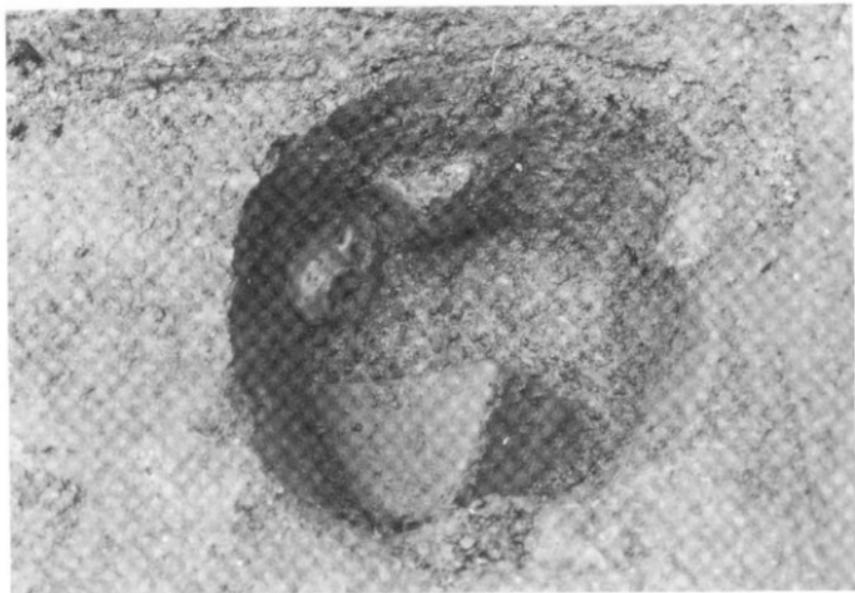


図-13 遺構平面図・出土土器実測図

大県南遺跡



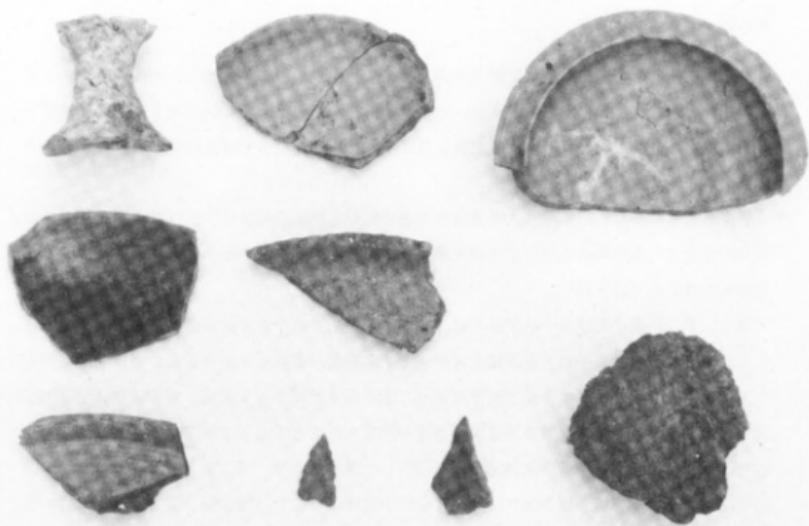
土壤1



ピット3



造構



出土遺物

83—5次調査

- ・調査地区所在地 柏原市大県4丁目218、423番地
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1983年11月18日～12月12日
- ・調査面積 89m²／420m²

はじめに

本報告は柏原市教育委員会が昭和58年度に実施した市道大県六号線建設に伴う事前緊急発掘調査の概要である。昭和57年度に柏原市教育委員会が実施した河内六寺の内、「山下寺跡」の発掘調査の成果を基幹とした今回の調査成果は大県南遺跡の全体的把握の重要な資料となるものであるのみならず、生駒山麓に北から南に連なる山ノ井、大県、大県南、太平寺、安堂の各遺跡を理解する上で不可欠なものであると考えられるので、その概要を報告するものである。なお、調査期間中には、四天王寺国際仏教大学 藤沢一夫教授、帝塚山大学考古学研究所 堅田直所長、八尾市教育委員会 山本昭氏、奈良大学 水野正好教授の諸先生を始め、土地所有者の方々からは貴重な御助言、御配慮を賜わりました。ここに記して感謝の意を表わすものである。

第一節 調査に至る経過

市道大県6号線の建設は市建設部土木課によって計画され、輝比古神社参道の石段下から南に延び、皿池農道に接続する幅員4m、延長約300mの道路で、昭和55年度を初年度とする7ヶ年にわたる継続事業であり、発掘調査も各年度の工事に先立って順次継続的に行なうものである。

調査に至る経過については『大県遺跡—市道大県6号線建設に伴う一』(1983)に詳しいが、本年度は過去三次の調査を受けて第四次調査にあたり、今回の調査地から南については大県南遺跡に相当する(図-14)。

第一、第二、第三次調査の結果からは、旧地形が復元されて3ヶ所の埋没した開析谷が存在することが明らかになった。この開析谷から中世の遺物が数多く出土するところから、尾根上に当該期の住居址が存在することが推定され、他にも5世紀から7世紀にかけての祭祀遺物が認められるところから、古墳や墓址群の存在が推定されるところとなっている。本年度の調査地も地形的にみれば東に高い急斜面という相似した環境にあり、同じような時期の遺構や遺物が存在することは当然予想された。従って建設予定地に対して可能な限り広い面積を調査する必要性が認められたのである。

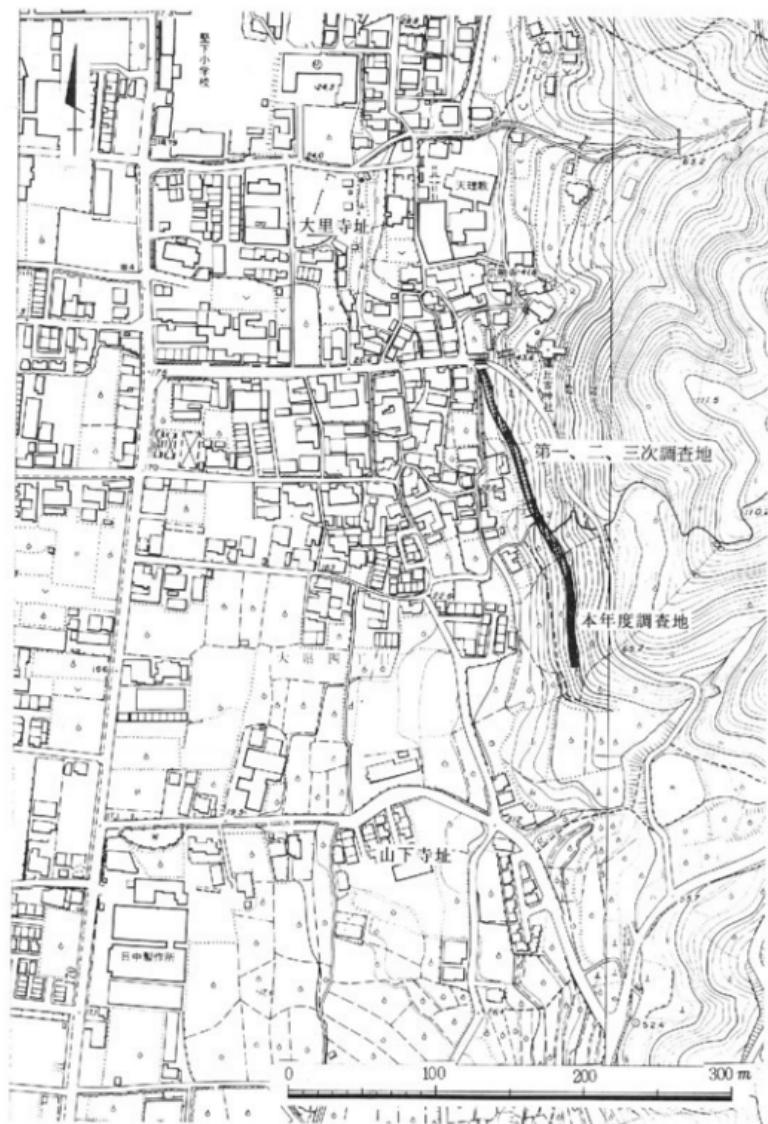


図-14 調査地位置図

第二節 調査の経過

調査区は図-15のよう北から順にA～Gまで8ヶ所を設定した。調査区を設定するに際しての最大の問題は土置場をいかに確保するかという点にあった。というのは東側は道路建設予定地いっぽいまでブドウ棚が作られており、西側はコンクリートの擁壁が組まれた崖になっていてどうしても調査地内で土を処理しなければならない。また機械力を動員することも見込め

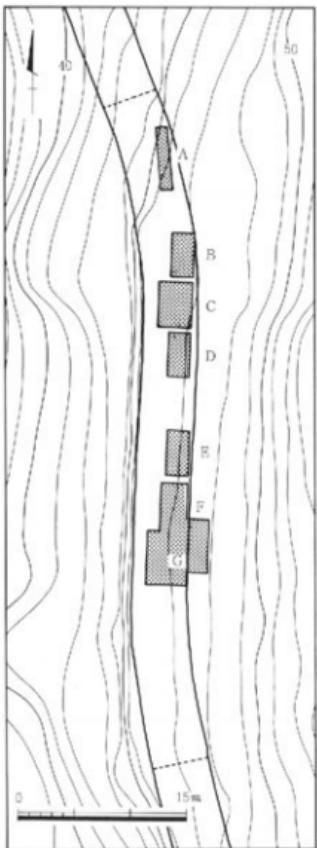


図-15 調査区位置図



調査前の状況



調査開始



調査の状況

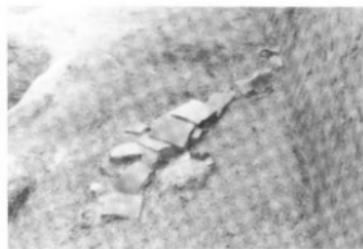
ない狭小な場所であるために、土の移動にしても人力で行なわざるをえないという状況であった。調査予定日数との関係や土砂の流出などの危険も考慮して全面調査を行なうことは無理であると判断し、コンクリート擁壁を壊さないように離れた位置に図のような調査区の設定となった。各調査区は基本的には $1.5\text{m} \times 3.5\text{m}$ の大きさで設定したが、遺構等の検出に伴い、随時拡張した。なお始めの計画では図に示すように道路建設予定地内に破線で示した部分が本年度の工事予定地であったが、土地買収の予算がつかず調査後実際に工事が施行された範囲はG調査区以北となっている。

調査は西側に土砂の流出を防ぐためのコンクリートパネルを立て、2ヶ所の調査区の掘削を併行して行なった。A区を除いては地山面に達するまでの深度が斜面上部にあたる東側で約2mもあり、排土の量も相当なものになった。遺構が検出されたのはC区、G区である。

C区では地山面で四角い柱穴掘り方と円形の小ピット、7世紀から8世紀代の平瓦がまとまって検出され、西側に拡張した。拡張部分はコンクリートの敷かれた現在も使われている里道の下にあたり、ほとんどが道の造成の際の搅乱土で地山面でピットの存在を確認した。また円形の小ピットは中に腐食した鉄線を巻く石をもつものがあり、おそらく埋め殺されたブドウ棚のアンカーであろう。遺構としての意味はないが、削平や盛土を行なって斜面地を有効に利用した人間の足跡をたどる現代資料として興味あるものであった。



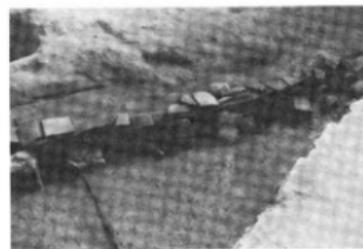
1. 瓦が出始めた（G区）



2. 瓦の並びが確認された（G区）



3. 瓦が重なっていることが確認された（G区）



4. 全体があらわれた（G区）

G区では表上下1m程で7世紀代の高杯、杯、皿、小型短頸壺などがまとまって出土し、始め祭場などの存在を考えたが、地層の観察や下位から中世の土師小皿が出土したため攪乱であろうと判断し掘削を続けたところ、地山面から掘り込まれた柱穴掘り方や地山の傾斜に沿って並べられた瓦積みの遺構が検出された（写真）。そこで可能な範囲で調査区を拡張したところ、孤立柱建物の柱穴であろうと思われる円形のピットの並びや平坦な地山面の存在が明らかになった。

各調査区の埋め戻しは土質場を確保するために順次行なっていったが、最後に全体をならして旧状に戻し調査を終了した。調査終了後G区で検出された瓦積みの遺構について保存を計るため、市建設部土木課との協議に入った。

第三節 層序、遺構

A区（図-16）

A区は6m×1mの範囲を設定し掘削を行なった。現地形は南、東に高いものであるが、掘削の結果地山面の傾斜は正反対で北、西に高いものであった。各層から現代の陶磁器が出土し、遺物包含層はない。地山面までの深さは北側で20cm、南側で50cmである。

B・C・D区（図-17、18）

B、C、D区は隣接する調査区で、実際には併行して調査されたものではないが、層序や遺構など関連させて把握する必要がある。

B区では深さ約1mで花崗岩の地山面に達した。この間に遺構面は存在しなかったが、7、8世紀代と思われる須恵甕、土師高杯、平瓦等の破片が6層に包含されていた。地山面には調査区東南部に若干の高まりがあり、この高まりを分断するように地山面から掘り込まれた東から西に向けて傾斜する溝が検出された。溝の埋土からは鉄滓、土師羽釜、甕、6世紀終末の特徴を示すたちあがりの板端に低い須恵杯身などの破片が出土した。なお東壁の土層から観察さ

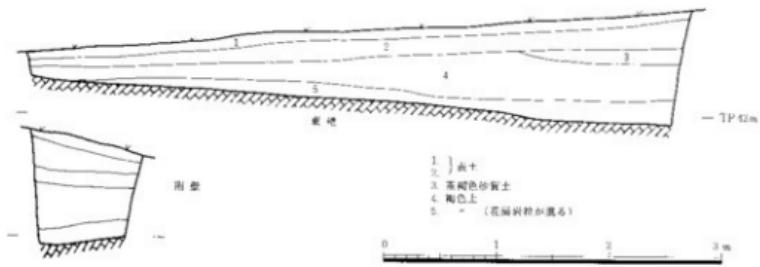
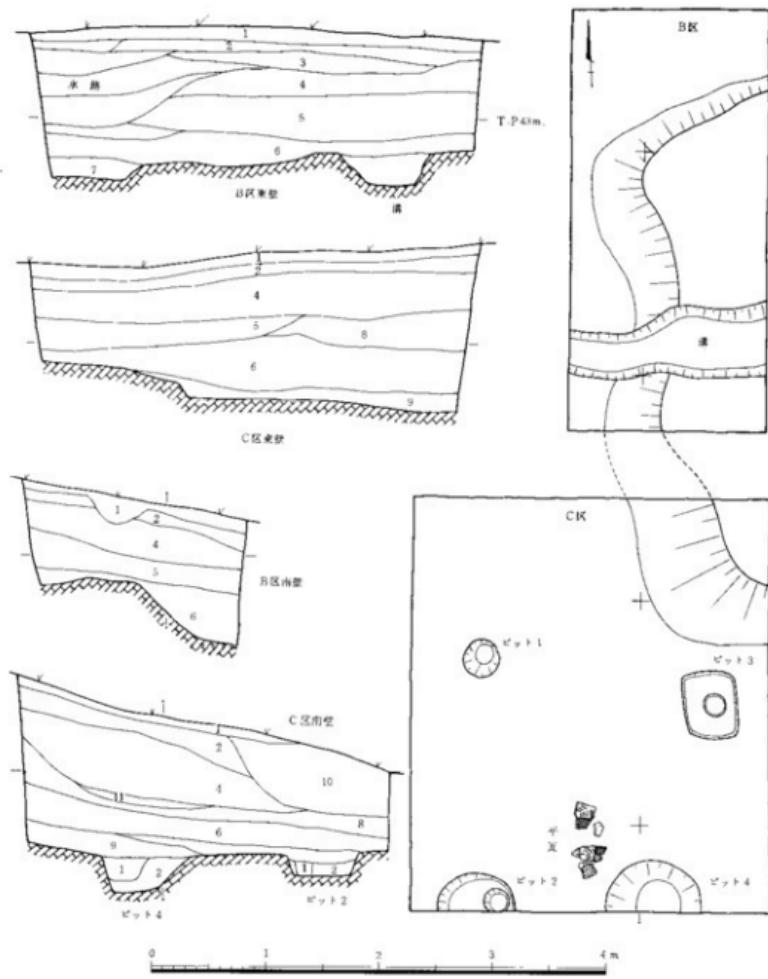
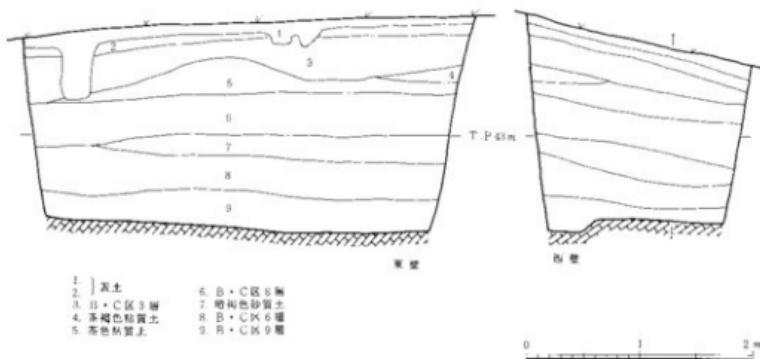


図-16 A区の層序



- | | | | |
|-------------|----------------|------------------|-------|
| 1. 表土 | 7. 黄色砂質土 | (ピット4) | (土) |
| 2. 茶色粘質土 | 8. 黄灰色土 | 1. 棕褐色土 | 茶色砂質土 |
| 3. 茶色粘質土 | 9. 黑灰色土 (炭を含む) | 2. 灰色土 (花崗岩粉が多い) | |
| 4. 黑灰色粘質土 | 10. 単連の粘土土 | (ピット2) | |
| 5. = (礫が多い) | 11. 灰色砂質土 | 1. 黄色粘質土 | |
| 6. 黑色砂質土 | 12. 黑灰色土 | 2. 灰色土 | |

図-17 B・C区の層序と遺構



図一八 D区の層序

れるように、調査区北側に灰色の砂質土と粘質土が互層に堆積する落ち込みが認められたが、この落ち込みは表土近くから切り込まれていたため、おそらく現在のブドウ畑に関係する水路の痕跡ではないかと思われた。

C区では深さ約1.5mで花崗岩の地山に達した。B区同様に地山面までの間に遺構面は認められなかったが、6層、9層から7、8世紀代の須恵杯身、甕、壺脚台部、土師杯、甕、平瓦などの破片が出土した。地山面はほぼ平坦であるが調査区北東部に高まりが認められた。これはB区の高まりから連続するものであろう。遺構としてはピット1～4が検出された。このうちピット2、3は四角い掘り方をもち円形の柱穴が認められたものである。2の掘り方は一辺約70cm、深さ20cm、掘り方埋上の上面で東に偏した径20cmの柱穴が存在した。3の掘り方は長辺60cm、短辺48cmの長方形で深さ3cm、掘り方底面に径20cm、深さ2cmの柱穴が存在した。4についても上層の断面観察からは柱穴様の痕跡を認めたが、平面的にははっきりと識別できなかった。おそらくピット2、3は柱の規模からすれば同じ建物の柱穴であろう。とすれば両者に対応するような柱穴が調査区内に少なくとも2つは存在するはずである。これについては現存するピット3の掘り方が極めて浅く上部を削平されている可能性もあり、すでに失なれてしまった可能性もあるだろう。なお地山にへばりつくように平瓦の破片が出土している。

D区では深さ約2mで花崗岩の地山に達した。3層から7、8世紀代の須恵甕、土師高杯、杯、甕、平瓦、丸瓦、中世の土師小皿などの破片が出土した。6層には7、8世紀の土師高杯、甕、小型手指高杯の破片が含まれていた。9層にはやはり7、8世紀代の土師器杯、平瓦の破片が認められた。9層の平瓦は第四節で紹介するように完形に近いものが多く、東壁の清掃中に9層中というよりもむしろ地山に接して、あるいは地山に近い位置から出土したものである。南壁の断面観察からもわかるように地山面調査区東側で幾分落ち込んでいるという状況

もあり、平瓦が地山面に接して調査区東側を特定して出土していることは、調査区をはずれた東側に相当数の瓦などが存在する可能性を示唆しており、また平瓦を多量に含むような遺構の存在を推定することができるかもしれない。

B、C、D区ではA区から引き続いて地山面の示す旧地形は、南にいくに従って次第に低くなる緩斜面になっている。そして中層には7、8世紀から中世の遺物を含む包含層が、下層には7、8世紀代の土器や屋瓦を含む包含層が存在し、地山面には遺構の痕跡が残るという状況にある。

E・F・G区（図-19、20、21）

ここでは同じ遺構の広がりとして捉えられるF、G区の成果を始めに報告し、次にE区について紹介する。F、G区は当初個々に掘削、調査を行なっていたが、遺構が検出された時点での広がりを把握するために一つのものとし、また可能な範囲で拡張したものである。

遺物は小破片ばかりであるが、他の調査区と比較すると遺物量は圧倒的に多い。また土層も色調によって細かく区分される。層序と出土遺物の関係を簡単にまとめると

3層：上師羽釜他、平瓦、鉄釘等の破片

4層：須恵器、土師器、小型手捏高杯等の破片

5層：須恵蓋杯、甕他、土師高杯他、平瓦等の破片

6層：7世紀代の土師高杯、杯、皿、甕他で完形になるもの。第二節で紹介したように「祭場」ではないかと一時考えたもの。

8層：須恵器、土師器、土師小皿等の小破片

9層：A、B層ともに6世紀末から7世紀代の須恵杯蓋、甕他、土師高杯、皿、羽釜、甕他、瓦器碗、土師小皿等の破片、鉄滓

10A層：土師高杯他、土師小皿等の破片、鉄釘、鉄製刀子、刀子はピット1の西側で地山面「第一段」から土師小皿とともに出土したもの。

11層：7世紀、8世紀代と思われる須恵器、土師器等の破片

14層：6世紀から7、8世紀の須恵杯蓋、甕他、土師高杯、杯、甕、羽釜、甕他、平瓦等の破片、鉄滓

16層：7、8世紀代の須恵器、土師器等の破片、土師小皿。

17層：須恵器、土師器等の小片を含むが出土量は極めて少ない。

というようになり、上層から下層までまんべんなく出土し、しかも上層から中層にかけては7世紀から中世にかけての遺物が同一層に混在していたことがわかる。一方11層、14層、17層など下層の遺物包含層は6世紀末から7、8世紀代の遺物を包含するものであった。

次に遺構と層序との関係をみてみると、まず注意されるのは9A、B層、10A層、11層、17層等がほぼ調査区全体にわたって水平面をもつように堆積していることである。これによって

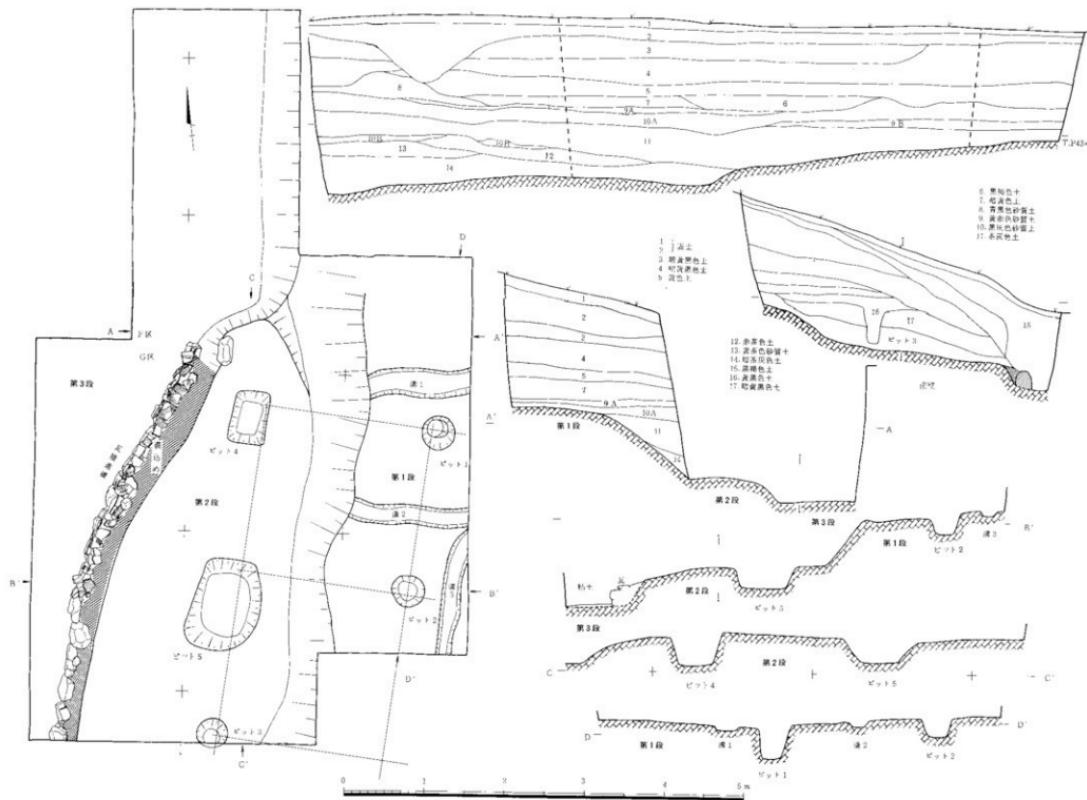


図-19 F・G区の層序と遺跡

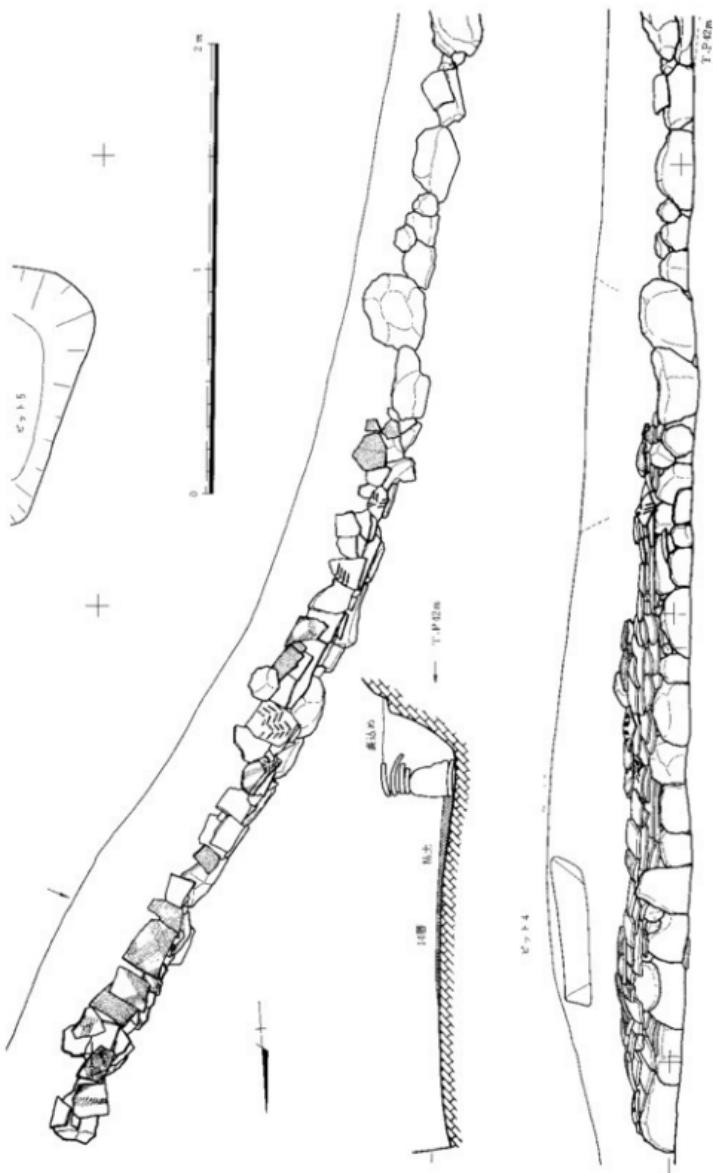


図-20 瓦牆遺跡

調査区中央部から西側にかけて低く傾斜している地山面が埋め立てられるようにして、調査区東側の地山の「第一段」がもつ平坦面が確保、拡張されて広い平坦面がつくられ、その上に土砂が順次堆積した様子を窺うことができよう。この平坦面にはピット1、2、3、溝1、2、3がみられ、一つの遺構面をなすものである。ピット1～3は径40cm程の円形ピット、しかも等間隔に並んでおり掘立柱建物の存在が推定される。図示した以外にはピットを検出することができなかつたので、はたしてどのような規模の建物であるかは明らかではないが、それ程しっかりした掘り方ではないので、大きな建物ではなかろう。また溝は幅30cm程で浅く、その機能も明確にはしえないが、柱穴と考えられるピットを囲むように配されており、建物に伴う水抜きの施設であるかもしれない。以上にみるとこの建物遺構は斜面地にある時期、6世紀末から8世紀代の遺物を含む土砂を盛土して建てられたものであり、廃絶後ピット3の埋土が16層であることからわかるように、大きな時を経ずして7、8世紀から中世の遺物を包含する土砂が一定期間水位に堆積したものであろう。

次に遺物包含層11層の下位、地山面「第2段」にピット4、5が検出された。検出状況はいずれも地山面から掘り込まれたもので柱穴は確認されなかったが長方形を呈し、4は長辺70cm、短辺45cm、深さ42cm、5は長辺118cm、短辺95cm、深さ28cmを測る。5の埋土からは7世紀代の須恵杯身、土師高杯、壺などの破片が出土している。G区の拡張の結果、地山面第2段はF、G区の境界付近に北側限界をもつテラス状の平坦面であることが判明した。

さらにG区部分を中心にして遺物包含層11層、14層、現在の里道を造成した際の盛土層の下位、地山面第2段西側の傾斜面から地山面「第3段」にかかる部分に平瓦の並びが認められ、周囲を掘り下げたところ自然石を孤状に配した上に平瓦が積み上げられた瓦積遺構が検出された。瓦積遺構は南北に約5.2m並べられ、高さは35cmを測る。

瓦積遺構の構築された状況をみると（図-20 断面図）、地山面第3段の東側、第2段の傾斜面と接する部分がわずかにくぼんでおり、ここに自然石を直接、あるいは平瓦を置いた上に自然石を置き並べ、その上に平瓦を4段～5段積みあげたものである。自然石の前面には一定の範囲に粘土が敷かれており、地山面第3段が平坦面をなすように作成されているとともに、自然石の下部は粘土によって保持され、動かないような役割をもつもののように思われる。また瓦積遺構と地山の傾斜面との間には粘性のある土が充填されていて、これも自然石、瓦が動かないように保持するための裏込めとして作用していたものであろう。遺構の南側は擾乱を受け自然石の上に瓦がみられないで明確にはいえないが、地山面第3段あるいは粘土面から出土した平瓦の量は少なく、したがって瓦積遺構から転落した瓦の量はわずかで遺構の高さも検出状況から大きく隔たらないものと思われる。また自然石は上部の積み上げられた平瓦を支えるための地覆石としての役割をはたすものであろう。

地覆石の石材には花崗岩が多用されていたが、他にチャート、石英片岩が用いられていた。

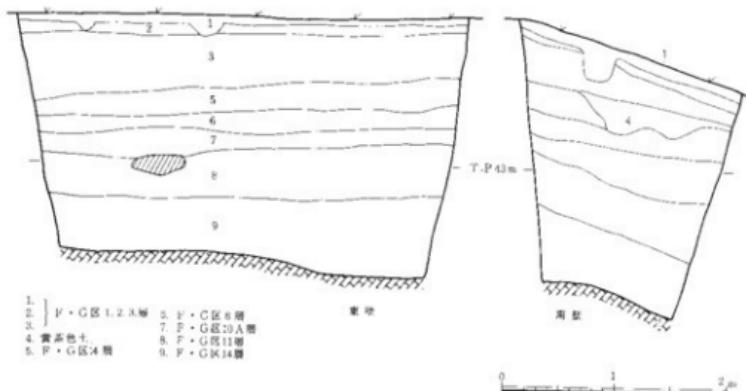


図-21 E区の層序

平瓦は上部にあるものを観察した限りでは、凹面に布目、凸面に各種の叩き痕をもつもので、7、8世紀代のものである。大きさは一枚の平瓦を四分割した程度のものがほとんどで、一部半截のものもある。この程度の大きさになると平瓦のものも曲面は気にならず、ほぼ平坦で、從って積み重ね、並べる方向も一定しない。意図的に大きさの一定した平瓦を集めたものか、あるいは大きさを意識して割ったものを用いたのか問題となろうが、例えば色調についてみれば、茶灰色、黒灰色など様々なものが使用されており、その点では瓦積造構を構築した際に一定の美的、装飾的意識は働いていないようではある。

この瓦積造構はより北側のF区、さらには次のE区にまでは及んでいない。地山上の遺物包含層自体はこの地区でも14層が一様に堆積しており、また地山上にも平瓦の出土が認められなかつたことからすれば、瓦積み造構の存在した範囲は地山面第2段の周辺に限定できよう。こうしてみると瓦積み造構と地山面第2段、ピット4、5とは一体の造構として把握することができよう。そして瓦積み造構の前面にみられた粘土面や造構下のくぼみなどについて注意すれば、G区東側やF区の地山面第3段もこうした造構と一体となるものとして捉えなければならないだろう。なおF区東側では地山は急激に高くなっている。

E区では深さ約2mで花崗岩の地山面に達した。遺物は3層で須恵蓋杯、甕等、土師杯、甕等の小片が、4層から須恵蓋杯、土師杯、羽釜、甕、瓦器塊、土師小皿などの破片が出土し、14層からわずかに土師器片、鉄滓などが認められた。この間にF・G区でみられたような掘立柱建物に関するような造構は認められなかったが、8層はF・G区11層と同じものであり、一つの造構面として考えられよう。同じように地山面もF・G区から連続する造構面として捉えることができるが、ここでは西側に著しく下がっていた。

第4節 遺物

各調査区、各層から遺物は出土しているが、いずれも小破片で復元し図示しうるものはほとんどない。ここではG区6層でまとめて出土し復元することのできた土師器、刀子、鉄釘、鉄滓、瓦積遺構に用いられた瓦を含む平瓦、道具瓦について報告する。

G区6層出土の土師器(図-22)

1は小型の杯。全体を手捏整形した後底部外面をヘラ削り、口縁部から内面にかけて荒いナデ調整を施したもの。胎土には細砂粒をわずかに含む。2は中型の杯。やはり手捏整形した後口縁部外面に強い横ナデ、内面を軽くナデ調整したもの。内面には正放射状の暗文がみられる。

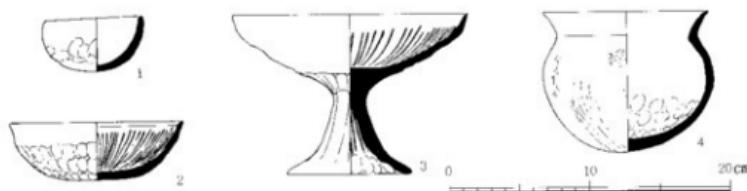


図-22 G区6層出土の土師器

胎土は密で角閃石を含む。3は高杯で杯部内面から外面は横ナデ調整、胸部との接合部は指ナデ、脚部はナデ調整が施されている。杯部内面には正放射状の暗文があり、脚部内面には指頭圧痕、しばり日がみられる。杯部と脚部の接合部には粘土の継目が残る。胎土は密で角閃石を含む。4は小型の短頸壺で外面はハケ調整後ナデ調整が、内面ナデ調整が施され、内面底部には指頭圧痕が残る。胎土には長石をわずかに含む。いずれも焼成は良好で赤褐色を呈する。時期は7世紀前半代であろう。これらは復元して完形になったものであるが、他に数個体分の杯、高杯破片が出土しており、完形に近いかたちで数個体の杯等が含まれていたものである。

鉄製刀子(図-23)

G区10A層、地山面第1段ピット1の西側の位置から土師小皿とともに出土したもの。長さは25cmを測る大型品である。平造り、角棟、鋒はフクラ付き。刃はやや内反りで古式の様相をとどめている。木製の柄が付き目釘が遺存する。木質部は柄だけではなく刀身にも残っていて、

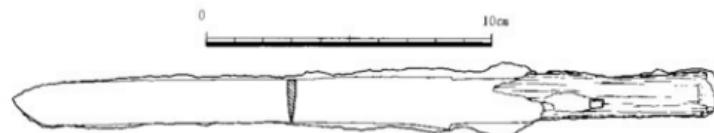


図-23 鉄製刀子

木製の鞘に収められているものかもしれない。図版に示したX線写真は帝塚山大学、堅田直教授に依頼して撮影していただいたものである。

鉄釘（図版）

鉄釘は3本出土している。いずれも破損品で全体の大きさはわからないが折曲頭鉄釘である。

鉄津（図版）

11点出土しており総重量は350 g。径5 cm内外の板状のものである。1点はB区の溝から出土しているが他は包含層出土のものである。

平瓦（図-24、25）

平瓦はF・G区の瓦積遺構に使われたものをはじめ、C区、D区の地山上の包含層からまとまって出土している。いずれも破片のため具体的に法量を知ることはできないが、大きな破片からそのかたちをみると、厚く方形状のものと薄く台形状を呈するものとの二種類が存在する（図-24 1、2）。また特異な例として瓦積遺構転落瓦として考えられる一端に割り込みを入れた平瓦が存在する（同3）。道具瓦ではないかとも思われるが、整形や凸面の縫合目、破損の位置などからすれば平瓦の一種とした方が良さそうである。側面はヘラ調整され凹面には布目が残る。長石を胎土に含み焼成良好、明灰色を呈する。割り込みは焼成前、生乾きの段階でなされたもので、基本的には平瓦から変形されたものである。破片のため全体の形状は不明だが、両端に割り込みを入れたものであろうか。近世の平瓦にはこうした割り込みがみられるが、本例のように飛鳥、奈良時代の古瓦には類例のないものである。

さて平瓦は叩き目の種類によっても区分することができる。今回出土した資料では7種類に区分することができた（図-25）。

I類（3）は細い軸の格子叩き目。凹面には布目痕、2 cm幅の模骨痕をとどめる。厚さが8 mmと極端に薄く、黄茶色を呈する極めて焼成の悪いものである。船橋遺跡から類例が出土している。II類（4）は太い軸の格子叩き目。平瓦側縁に平行して叩かれている。凹面は斜方向に強くナデ調整が行なわれており、側面はヘラ切り未調整。胎土は長石を含み焼成は堅緻、灰色を呈する。III類（5）は太い軸の格子叩き目と斜格子叩き目の2種がみられるもの。凹面は布目痕が残るが斜方向にナデ調整されている。凹面の下端部はきつく面取りされており側面はヘラ切り未調整。胎土は長石を含み焼成は堅緻、灰色を呈する。IV類（6）は有軸綾杉の叩き目。斜方向に叩く。凹面には布目、側縁近くに布縫目がみられる。幅3 cm程の模骨痕を残す。側面はヘラ切り未調整。長石、雲母を胎土に含み焼成は堅緻、黒灰色を呈する。V類（7）は有軸綾杉の叩き目。IV類と異なるのは中心の軸の他に一方に偏した位置にも軸があり、副軸をもつともいべきものである。幅9 cm、長さ12 cm以上の原体を斜方向に叩く。凹面には布目、幅2 cm程度の模骨痕を残す。胎土には長石、雲母を含み焼成は堅緻、黒灰色を呈する。VI類の叩き目は（8）のように平瓦下半部にのみみられるもので、また（1）のように側縁部にかかるよ

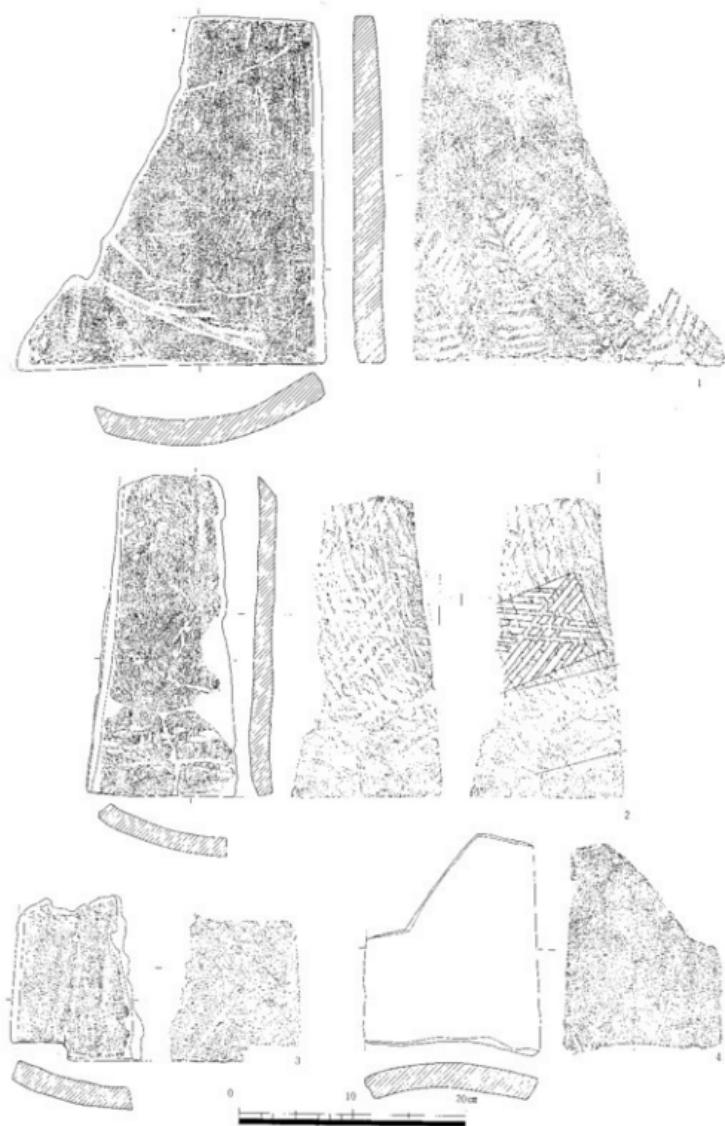


図-24 平瓦、道具瓦(4) 斜測図

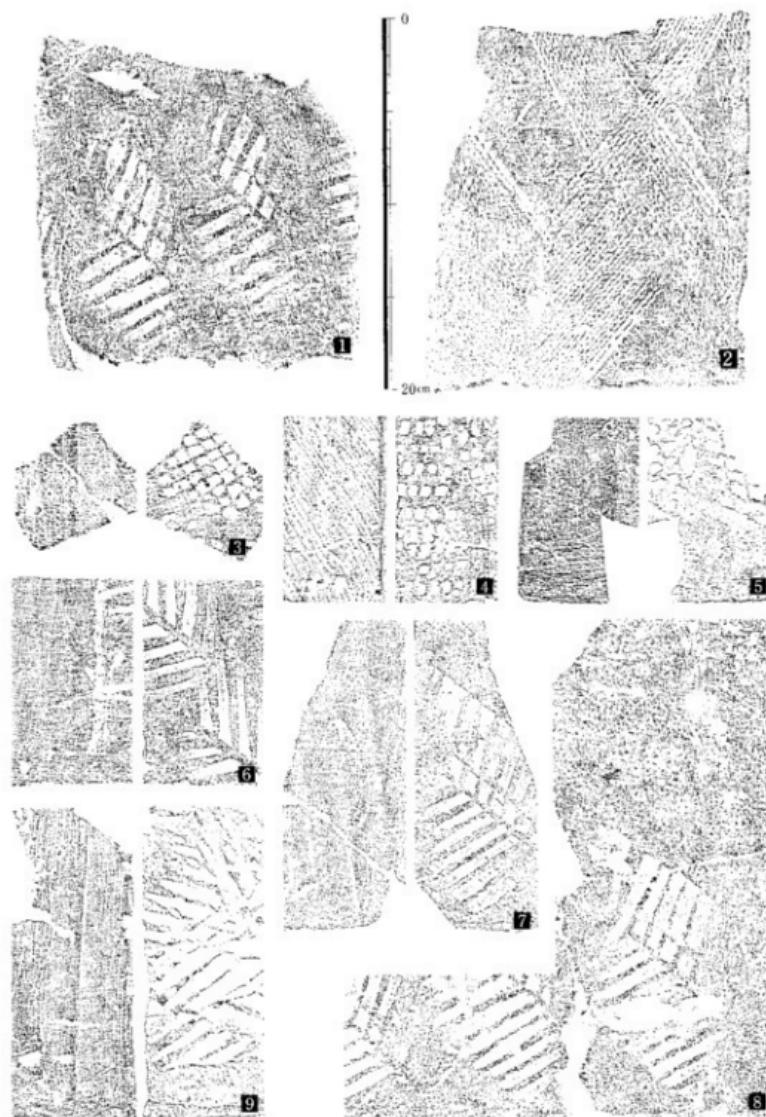


図-25 平瓦叩き目拓影

うにも叩かれている。VI類(9)は一見複雑に入り乱れた条線の叩き目。ところが図-24の(2)の平瓦から斜格子部を中心に多方向に幅6mmの条線が刻まれた幅7.5cm、長さ10cm以上の原体が復元された。条線が複雑に入り乱れてみえるのは、叩きの後強くナデ調整が行なわれているからである。このナデに使用された工具はナデ調整痕が丸くくぼみ明瞭な稜をもつことから、丸棒状の工具とみることができる。これを単一に、あるいは束ねて使用したものであろう。凹面は布目、幅3cm程の模骨痕が残り、側面はヘラ切り未調整。下端部は凹凸両面ともきつい面取りがみられる。胎土には長石を含み焼成は堅緻、茶灰色を呈する。VII類(2)は繩叩き目。幅8cmの原体をジグザグに叩く。縦方向の縄の痕跡がわずかに残っており、縦の叩き→ナデ調整→ジグザグの叩きの順に平瓦凸面の調整が行なわれたものであろう。凹面は布目、側面はヘラ調整、淡灰色を呈する。本例と(1)の拓影は発掘調査時に瓦積遺構から採取したもので、瓦の観察については十分ではない。

平瓦凹面や側面の観察からするとI～VI類は桶巻作り、VII類は一枚作りと考えられる。また先述した平瓦のかたちと叩き日の種類の関係をみると、かたちは不明だが極端に薄いもの・I類、方形で厚いもの・IV類、V類、VII類、台形で薄いもの・III類、V類、VI類のようにまとめることができる。この関係を整理すると、今回出土した資料の範囲では、桶巻作りの平瓦には極端に薄いものや方形、台形のものがあり、I類～VI類の叩き目がみられるのに対し、一枚作りの平瓦には方形、VII類の叩き目が限定してみられる。出土状況はVII類のような繩叩き目の平瓦が瓦積遺構に多用され、VI類の多方向条線の叩き目を残す平瓦がD区、I類～III類の格子叩き目の平瓦がC区から多く出土した。

I類～IV類、VII類は市内各地の寺院址に類例がみられる。一方V、VI類は市教育委員会 花出勝広氏の指摘によると、調査区を南西に降った位置にあたる山下寺推定地内の調査時に出土した平瓦に類例がみられるとのことである。

道具瓦(図-24-4)

駁斗瓦の破片で幅15cm。凹面は布目がみられる。側面の一部にヘラ切り未調整の痕跡をのこすところから、平瓦を分割して作られたものであろう。胎土に長石を含み色調は淡灰色を呈する。瓦積遺構の前面から出土したもので、転落瓦であろうか。

第5節 まとめ

最後に調査成果の簡単なまとめと、調査後市土木課との協議の結果行なわれた遺構の保存措置について報告しておくことにする。

「調査に到る経過」の項でも触れたように、過去3回の調査によって鐸比古神社から皿池に到る急峻な斜面地においても、古墳や中世の住居址などの存在が推定されていたが、今回の調

査ではこの推定を具体的に裏付ける遺構が出土し、古代から現代までの斜面地の積極的な土地利用の営みを知ることができた。確認された2つの遺構面は、6世紀末～8世紀、中世の遺物を含む厚さ2mに及ぶ土砂によって埋め立てられ、ついにはブドウ畠として利用されたもので、現在の地形からは過去の状況を全くることはできない。山腹の土地利用という視点でみれば調査の成果からは3段階を設定することができる。

最も古い利用例は6世紀末～8世紀の遺物を含む包含層の下から検出された瓦積遺構である。この遺構はかたちの上からみると建物基壇としての機能を考えることができるかもしれない。しかし瓦積基壇とすると多くの点で問題が残る。瓦積基壇の構造は通常縦に半蔵した平瓦を、側縁部を基壇前面に揃えて積み上げたものである。平面形は方形ないしは長方形の一辺として当然直線的であり、仮に八角円堂の基壇のようなものとして考えても角が存在するはずであろう。しかもある程度の高さが必要とされる。また『片山施寺塔跡発掘調査概報』によれば、平瓦の色調も整えられていて外観上の美観も意識されていたことが報告されている（柏原市教育委員会 1983）。こうした点からすれば今回の瓦積遺構は建物の基壇としては考えにくい。

ところでこの瓦積遺構は第3節で報告したように北に向って延びる地山平坦面第1段とテラス状の第2段と一体をなすものであり、第2段に付属すると思われる施設である。この地山面第2段にはかなり大きな長方形のピットが穿たれており、これが方向性をもって並んでいることからすれば、ここでは柱穴として理解しておきたい。ただし地山面第2段の広さからすると、このピットがより南側に直線的に並ぶものではあっても、建物を想定させうようなものでないことは明らかであろう。おそらく柱が直線的に並ぶことからすれば、櫻や櫻のようなものが南側に延びていたものと思われる。従って瓦積遺構もこうした機能をもつ遺構の延石的な、あるいは土留めの化粧的な役割になっていたものではないだろうか。この瓦積遺構の前面にある平坦面はすぐ西

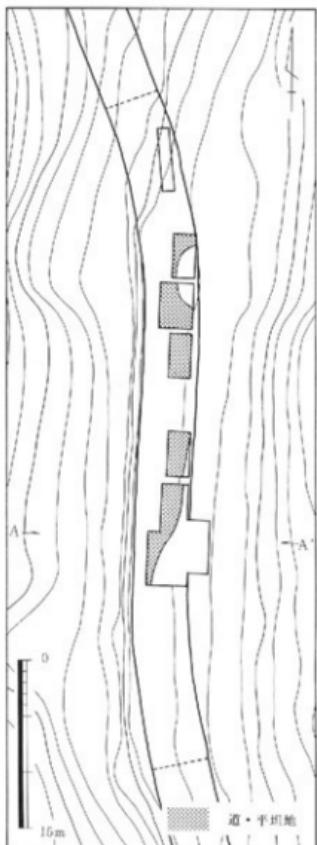


図-26 道状遺構

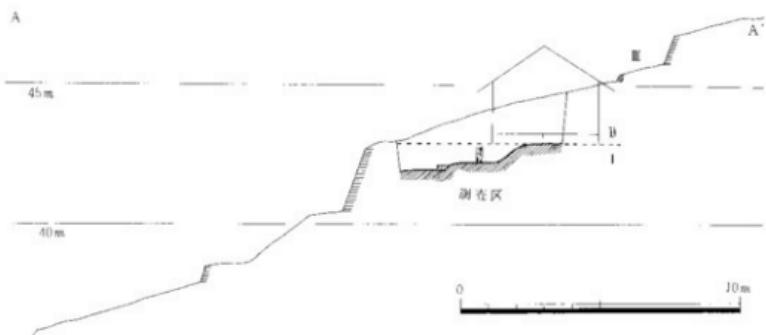


図-27 調査地内の土地利用

側が急峻な斜面地となり、平坦面の幅は狭いため山腹にとり付けられた道であり、さらに北側のB、C区にも統いて一部には平坦面が広くなり建物も建てられていたと考えたい。D区の平瓦出土状態は、この道に沿って調査区を外れた東側の位置にも再び瓦積遺構が存在することを示唆している。この遺構面をⅠ期とする（図-26、27）。

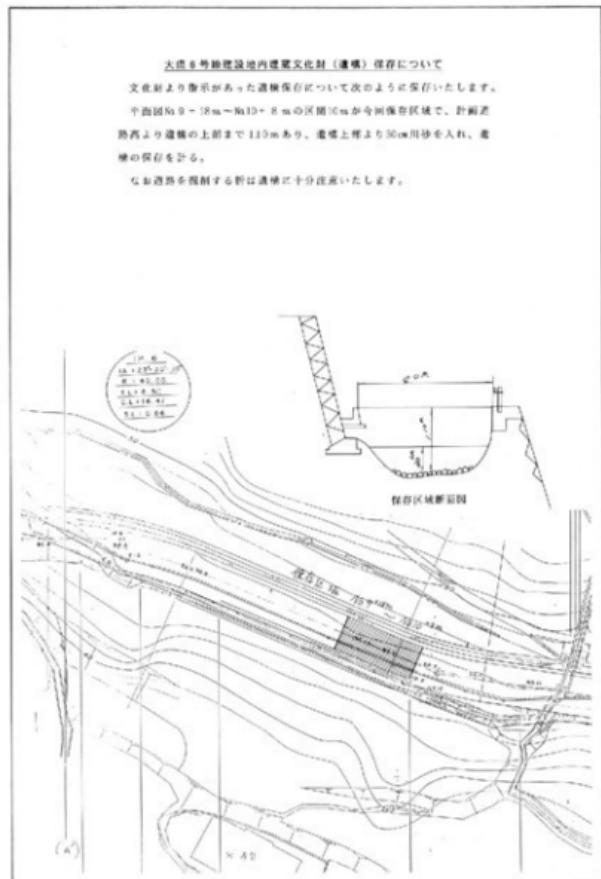
次にⅠ期の遺構面を埋め立てるようして平坦面をつくり、山腹にとり付くようして孤立柱建物が建てられていた時期がある（図-27）。この遺構面はE、F、G区など調査区南側に存在した。建物の規模は明らかでないが、地形を考えれば東側のブドウ畑の下に広がる可能性はある。建物の廃絶後すぐに7、8世紀から中世の遺物を含む包含層が遺構面に水平に堆積していく。

Ⅲ期はいうまでもなく現在のブドウ畑である。ブドウ畑の造成の際には、やはり7、8世紀から中世の遺物を含む土砂を利用しており、これらは現行の地形に沿って堆積している（図-27）。

Ⅰ期、Ⅱ期の時期は瓦積遺構に使われた平瓦の年代や包含層に含まれる遺物の時期により、それぞれ奈良・平安時代、中世以降と考えられるが、それ以上の細かい時期は断定しにくい。というのは上の堆積はほとんどが自然堆積層ではなく、人為的な盛土層と考えられるためである。こうした土砂はどこから運び込まれたものであろうか。包含層中に含まれている遺物には高杯や鉄釘、鉄製刀子、小型手挽高杯など古墳に関わる遺物が含まれており、一つにはこうした古墳などを破壊して土砂が運び込まれたとすることができる。さらに羽釜や瓶など生活用貝類も多く住居の存在が推定される。古墳時代から奈良、平安時代にかけての集落は、山體の扇状地や東高野街道沿いに展開していく調査区からは離れた位置にあるので、ここで推定される住居の性格が問題となろう。今回出土した平瓦の叩き目の検討によって、先に山下寺との関係を把握することができた事実からすると、調査区の斜面下に推定されている山下寺の僧房的な

ものをこの住居に比定することができるかもしれない。瓦積造構の平瓦も山下寺の盛行期・奈良時代のものであり、山腹にとり付けられた道も盛行時・山下寺の寺域の広がりを示すものではないかと思われる。とすると先に述べたようにⅠ期の時期の推定には層序に関する基本的な問題点があるが、もう少し限定して奈良時代に特定することができるものかもしれない。Ⅱ期の造構面にみられた掘立柱建物は、山下寺の衰退後こうした僧房や道を濱すようにして建てられたものだろう。

調査終了後、瓦積造構について市建設部土木課と協議したところ以下の報告を受け上面に砂を入れて保存が計られることになった。また次年度の調査についても当然瓦積造構が存在することが予測され、これについても調査後保存する事が約束された。

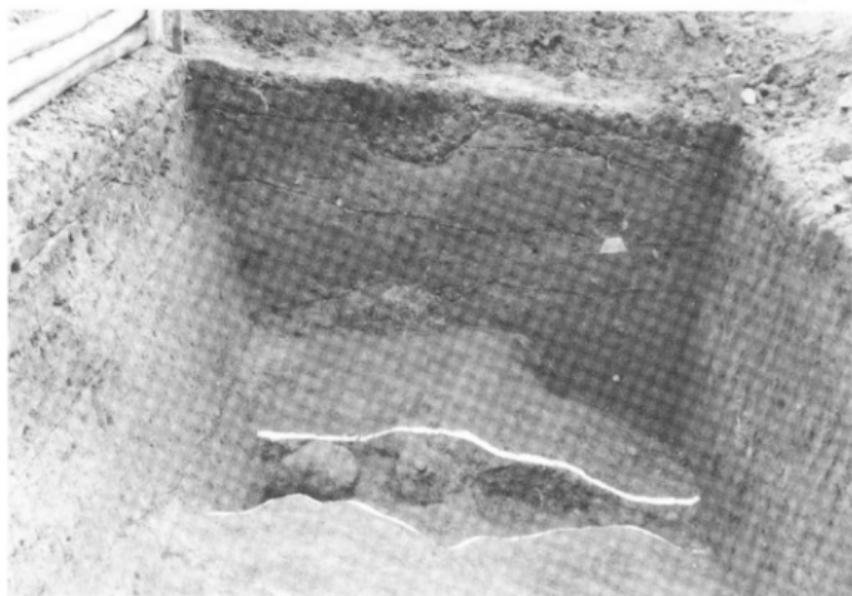




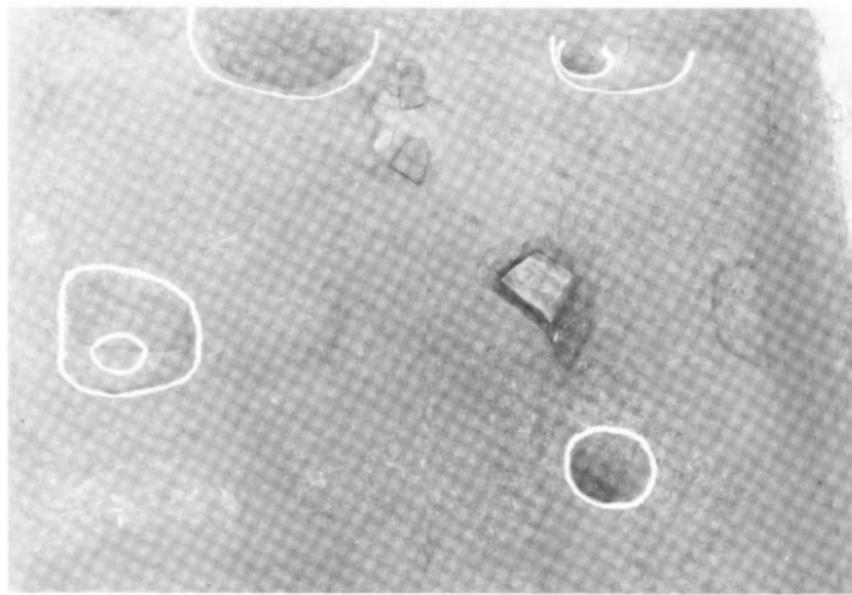
調査地遠景（西から）



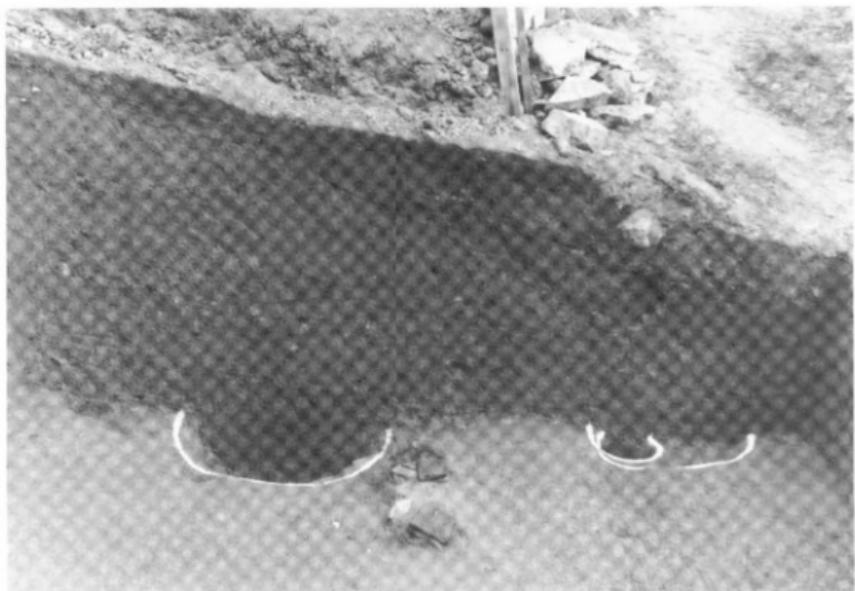
調査前の状況（南から）



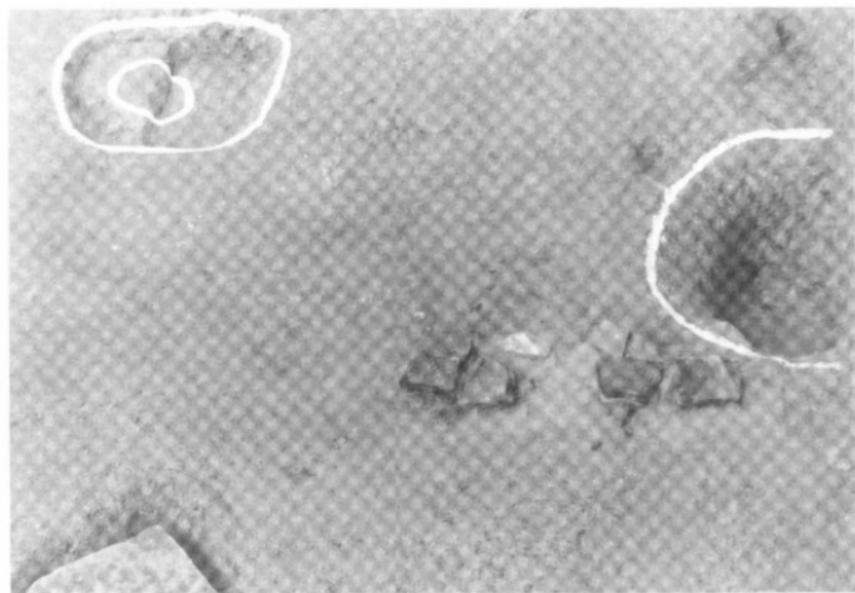
B区の溝（北から）



C区のピットと平瓦（北から）



C区の層序（南壁）



C区の平瓦（西から）



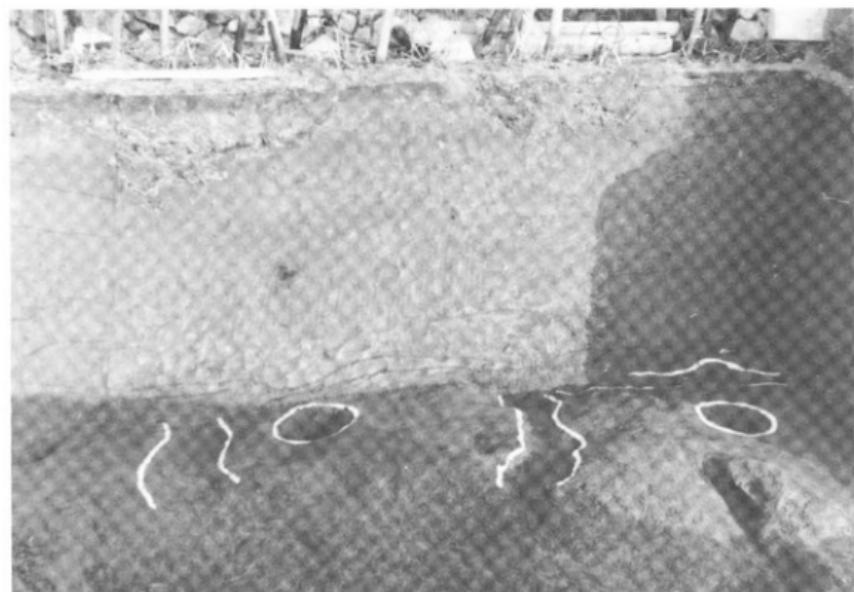
G区6層土師器の出土状態（西から）



G区10層刀子、土師小皿片の出土状態（東から）
- 49 -



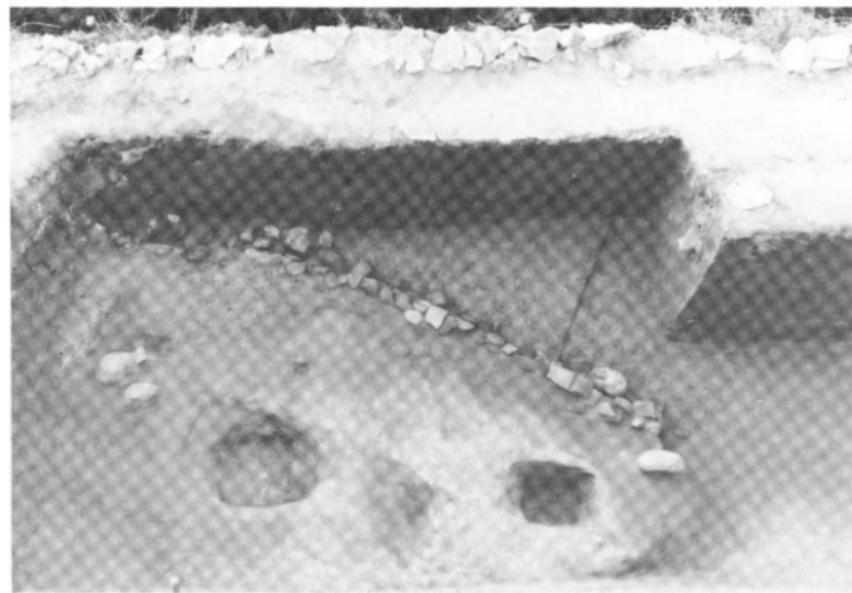
G区東側の拡張（西から）



G区地山面第1段の遺構（西から）



瓦積遺構の検出状況（南から）



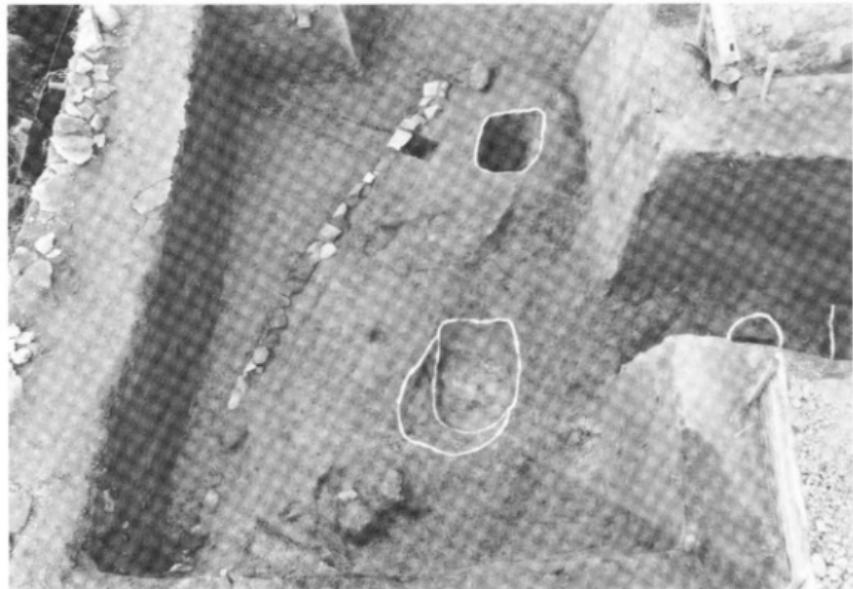
瓦積遺構の検出状況（東から）



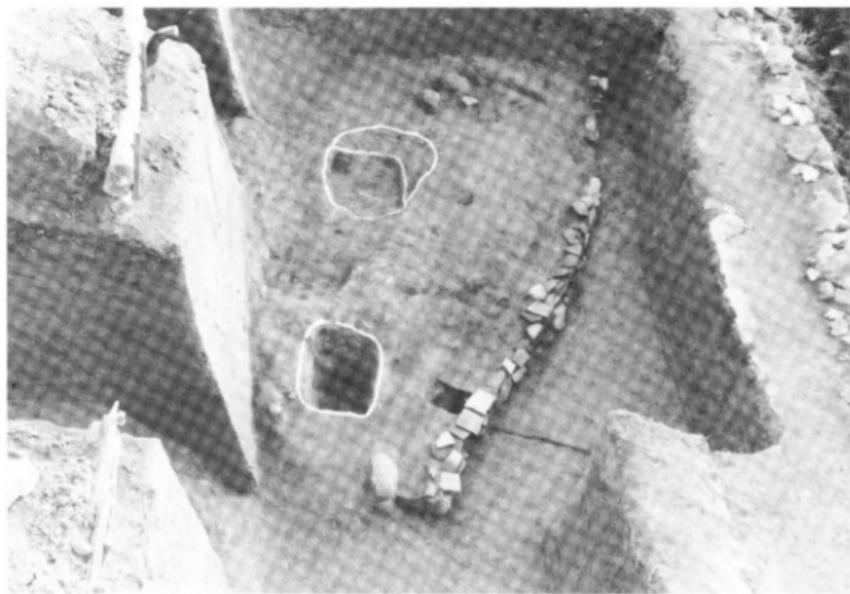
瓦積造構の検出状況（北から）



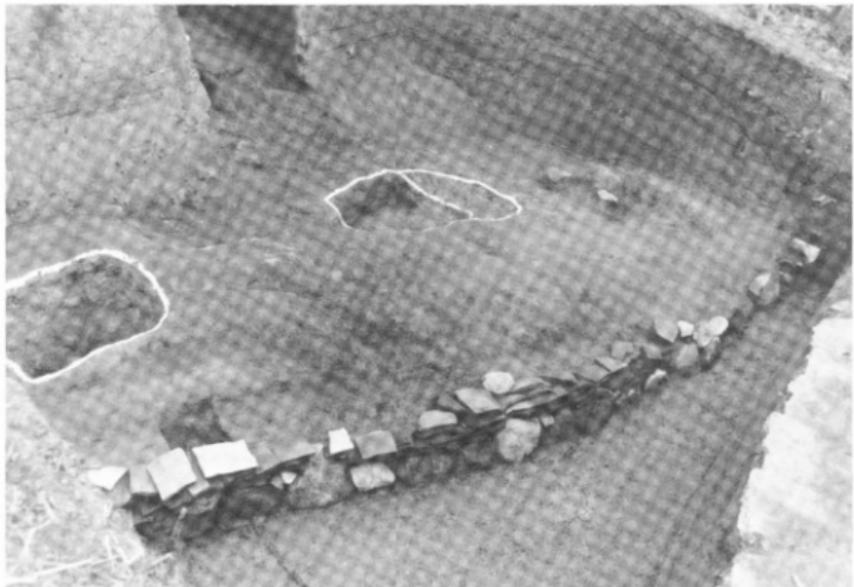
瓦積造構の検出状況（西から）



瓦積遺構（南から）



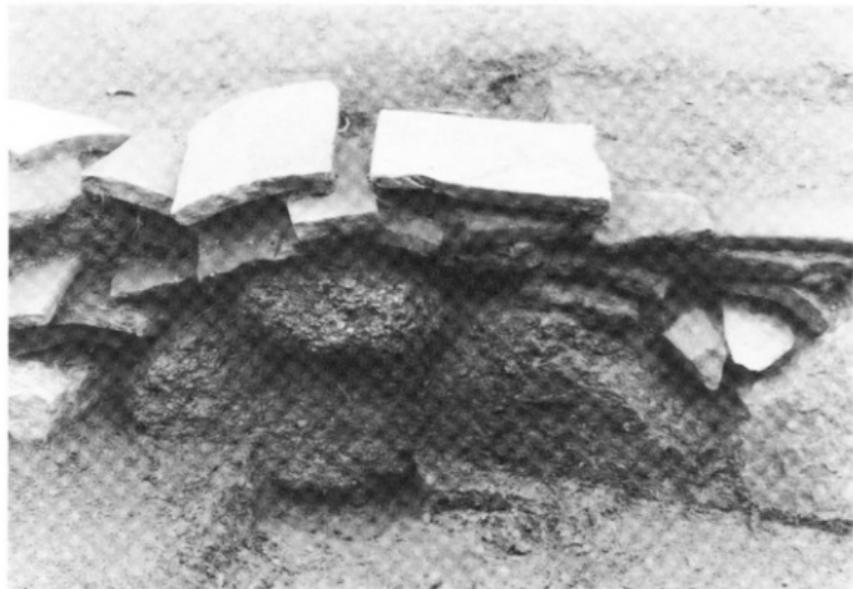
瓦積遺構（北から）



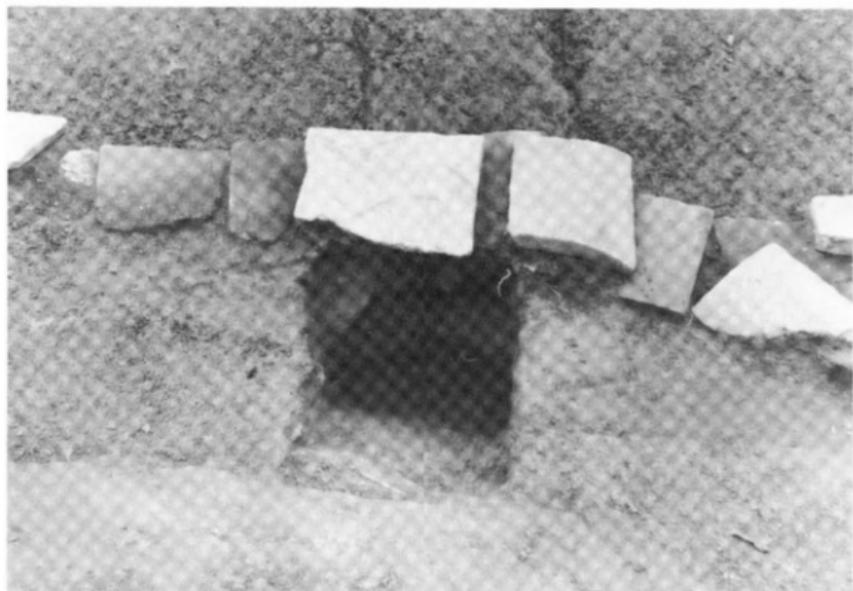
瓦積遺構（西北から）



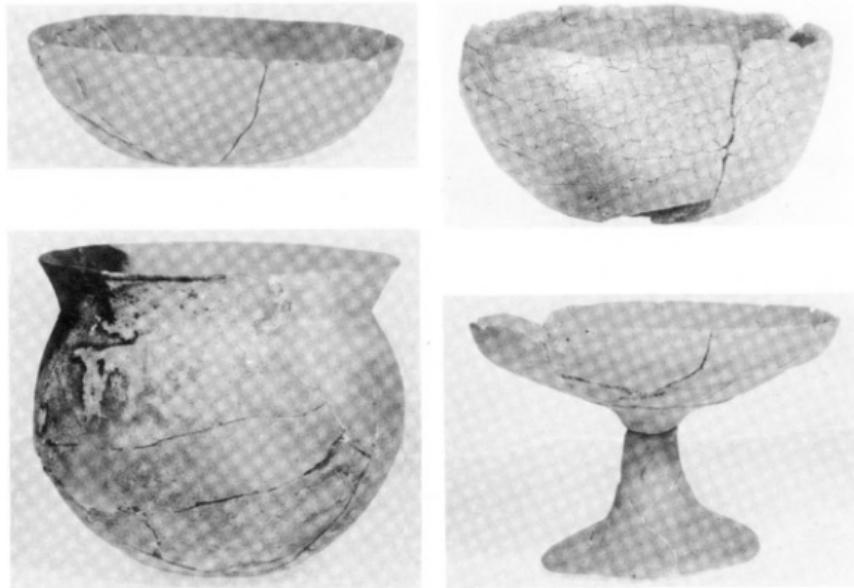
瓦積遺構（北から）



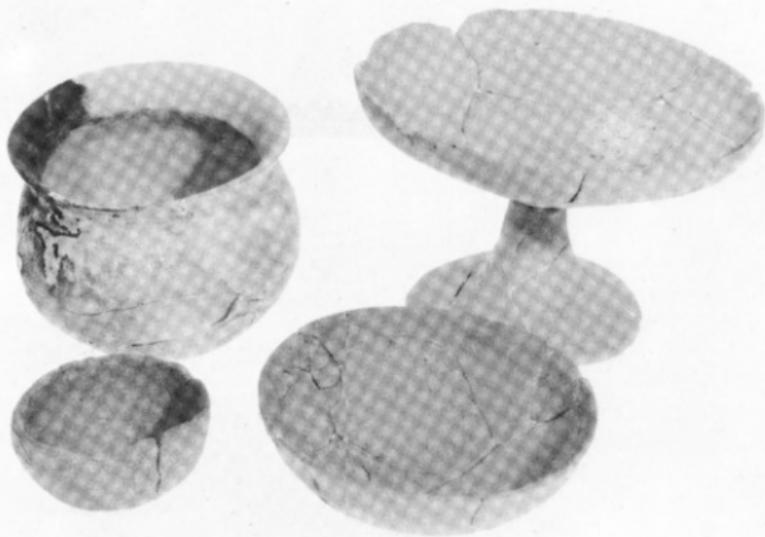
瓦積遺構 瓦と地覆石



瓦積遺構裏込め



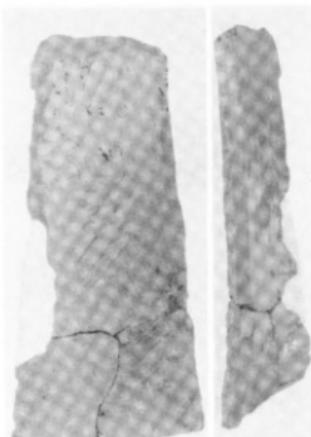
G区6層出土の土師器



G区6層出土の土師器



平瓦V類



平瓦VI類



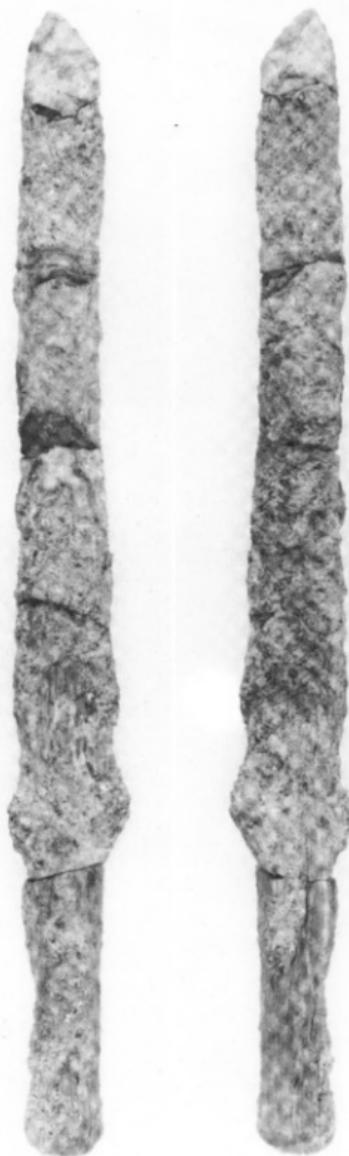
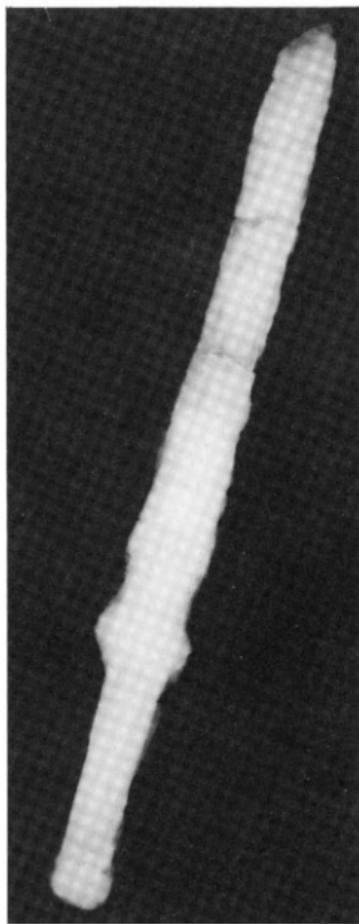
削り込みのある平瓦



鉄釘



鉄滓



G区10層出土の鉄製刀子

たい へい じ 太平寺古墳群

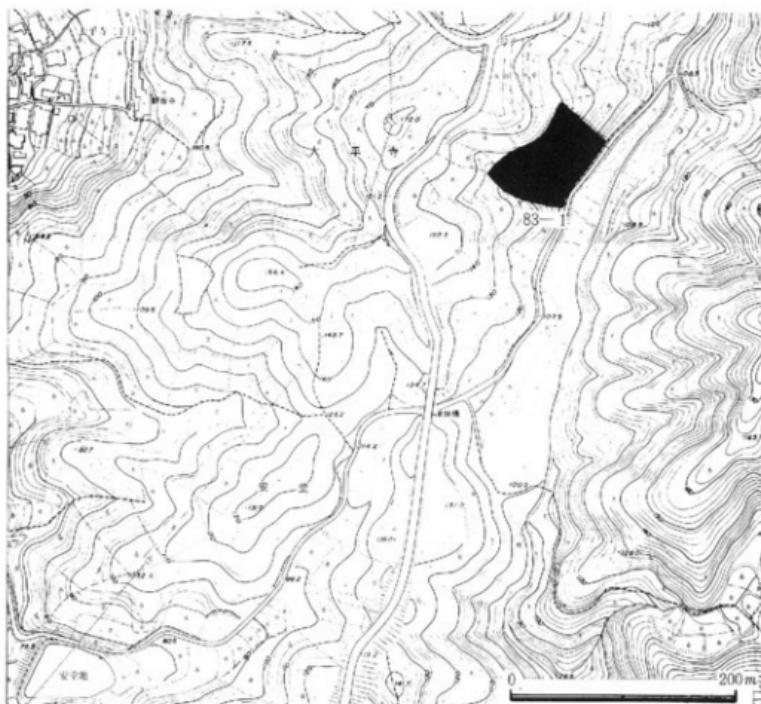


図-28 調査地区附近地図

83-1 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市大字安堂 493 甲、495-1
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1983年5月23日～6月18日
- ・調査面積 60m² / 3300m²

柏原市の東部、通称「東山」と呼ばれる地域は、また平尾山古墳群として総数1,300基を超える古墳の密集地域としてよく知られている。今回、この平尾山古墳群の西限、太平寺集落の東方にある天冠山の東斜面で、すでに廃絶された葡萄畠を利用して植木の仮置場を設置する旨の

大平寺古墳群

届出が教育委員会にあった。調査対象地内には、これまで古墳は確認されてはいなかったが、西方には天冠山1～3号墳があり、周辺にいくつかの古墳が知られているところから、古墳の存在する可能性が高いと判断し調査を行なった。

対象地内の地形を観察するかぎりでは、また遺物の散布等も全く認められなかったことから墳丘や周溝等の外部施設は確認されなかったが、平尾山古墳群内の諸古墳が尾根上に立地する場合が多いことを考慮し、東南方に延びる尾根に2×5mのトレンチを3本設定し掘削を行なった（図-29）

（1）A、Bトレンチの調査

A、Bトレンチは地表下、平均して約1mで花崗岩衝積土の地山となり、墳丘、周溝など古墳の諸施設、その他の遺構、遺物は検出されなかった。地山はBトレンチからAトレンチにかけて急斜な斜面となっていて、上部で標高130m、下方で124mを測る。

（2）Cトレンチの調査

Cトレンチも当初A、Bトレンチと同様に2×5mの範囲を設定し、調査を行なった。地表下約1mでトレンチ北西部において23層とした固く締まった粘質土層が検出され、この部分を残しながら掘り下げると花崗岩の自然石が顕われ、さらに破碎された花崗岩片が一面に散かれ

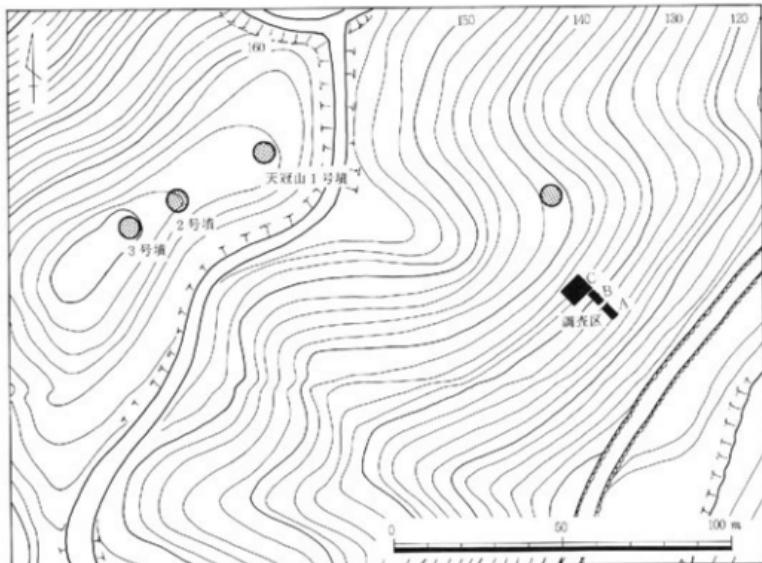


図-29 調査区位置図

たような状況を呈するようになった(図-30)。そこで横穴式石室の存在が推定され南西側に5m拡張したところ、南西向に開口する横穴式石室が明らかとなり、当初検出された花崗岩塊は奥壁及び北西側側壁であることが判明した。

土層の状況からも判るように、北西側(斜面上位)には墳丘盛土の一部、石室を構築する際の掘り方と壁との間の裏込めなどは残っているが、石室部あるいは南東側には全く残っていない(図-31)。これは葡萄畑の造成などで相当の地形の改変が行なわれたためであり、その際墳丘は削られ、石室が破壊され、石室を構成する花崗岩塊は破碎されて一部は埋置され、また一部は石垣などに利用された結果ではないかと思われる。

北東壁の状況から判るように、古墳が築造された当時の地形との関係は、東南に延びる尾根上に直交するように営まれたものであろう。石室を築く際の掘り方も、自然斜面上位側が深くなるが、現在残っている限りでは、少なくとも2.5m程地山を掘り込んでいる。

石室(図-31、32)

石室はほとんど破壊され規模を推定することは容易ではなく、また開口部の状況も明確ではないが、ほぼ長さ7m前後、幅2.6m、無袖式の横穴式石室であろう。高さは不明である。開

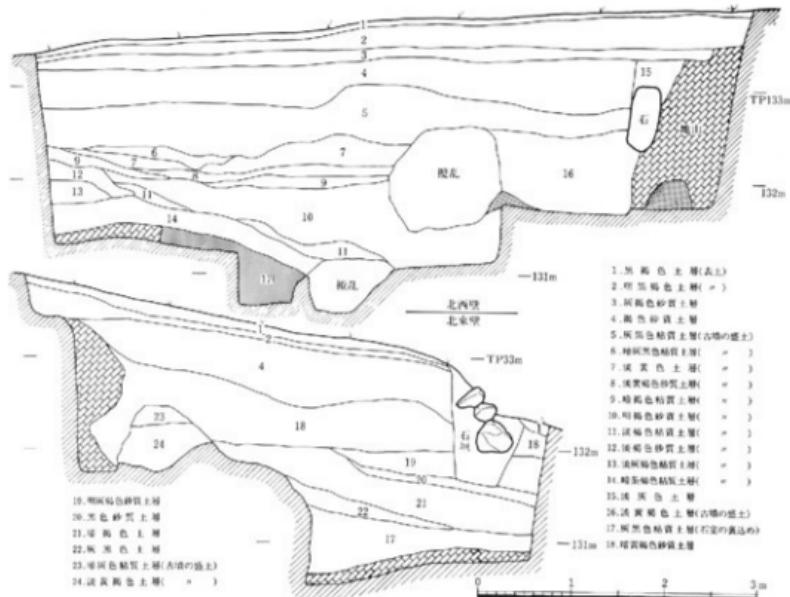


図-30 Cトレンチ土層断面図

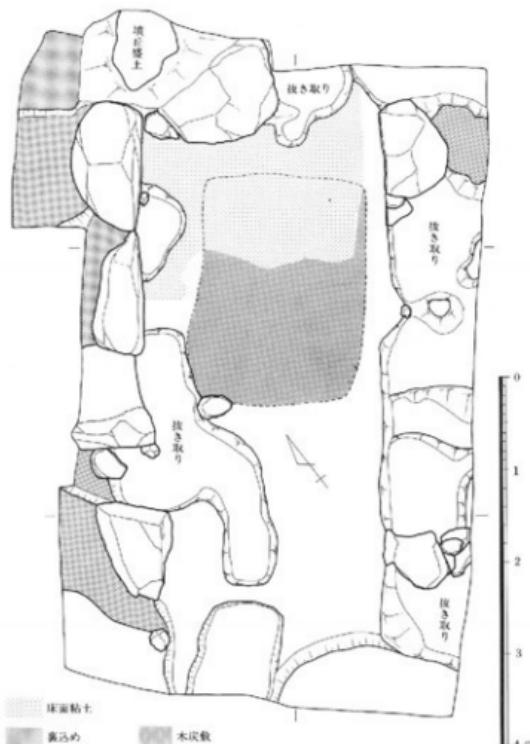


図-31 C トレンチ平面図

口部の方向は南西を向く。石材はすでに破碎され、抜き取られているものが多いが、側壁は長円形の花崗岩自然石を、平らな面を石室内に向け、長軸を石室主軸に合わせて置いたものようである。奥壁は高さ1.5m程の方形の花崗岩が立てられているが、一つは抜き取られていて2枚で構成されていたものであろう。

床面は奥壁の前面に一部粘土が敷かれているところから、おそらくこれが全面に敷かれていたものと思われる。粘土は奥壁の石の下にまで及んでおり、石室築造の順序を示す。

また掘り方底面は床面下では水平、奥壁、側壁下では若干掘りくぼめられており、あらかじめその位置が

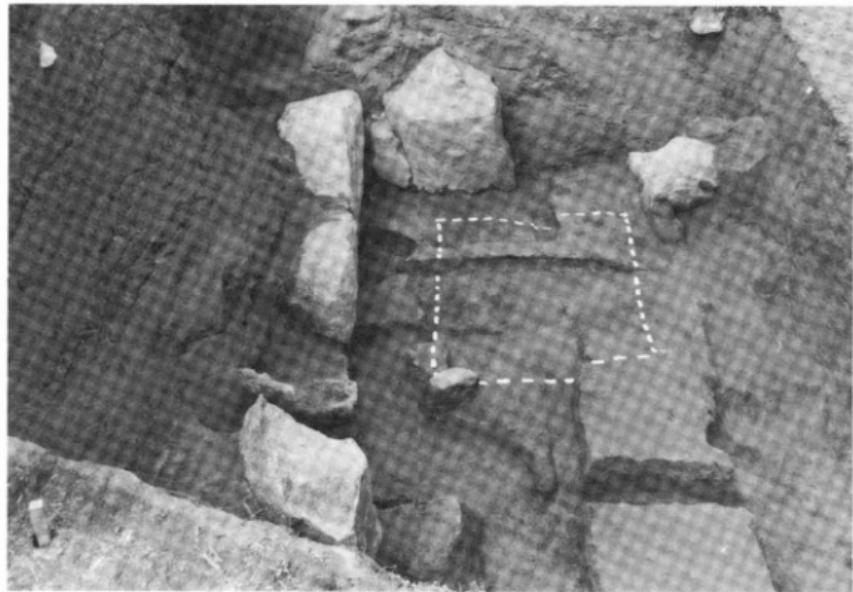
定められていたのである。

床面下の木炭敷（図-31、図版）

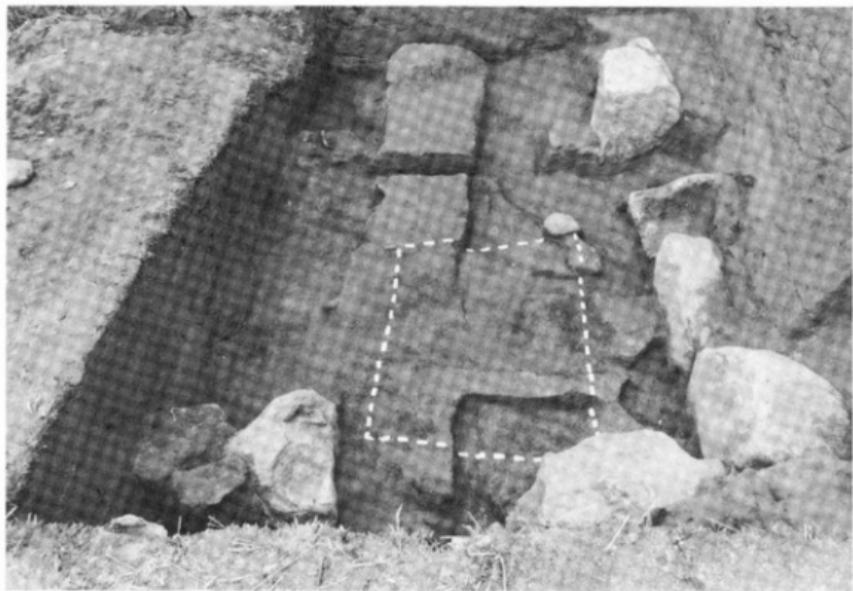
石室後半部には床面下に木炭粉が長辺2.4m、短辺1.8mの長方形状に敷かれていた。水平な掘り方底面の上に、石室中央部を高くするように花崗岩の小粒を含む山土を積み、その上に木炭粉を敷きつめている（図版）。その後粘土を置いて石室床面を造作したものである。

さらにこの木炭層中には多量の鉄滓が含まれていた。長辺2~3cm程の小さなものであるがたら研究会大沢正己氏によると小鐵治滓の可能性が強いということであった。

床面下に木炭が敷かれる例はしばしばみられる。例えば近いものでは、かつて太平寺3号墳として報告されたものにも同様の状況をうかがうことはできるが、鉄滓などは含まれていなかったようである（註）。おそらく目的としては石室内の排水、除湿の機能を計ったものであろ



石室（入口から 点線は木炭層の推定範囲）

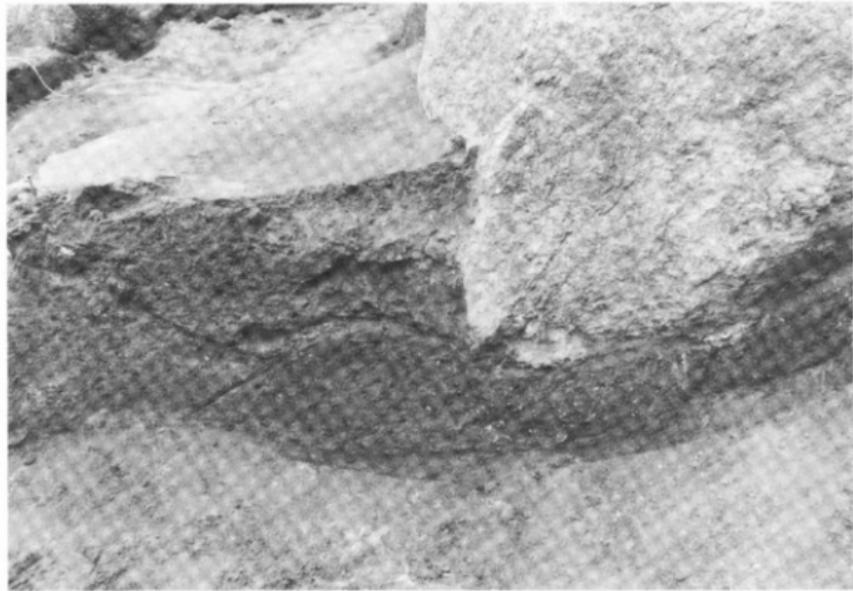


石室（奥壁から）

大平寺古墳群



石室（南から）



石室掘り方底部と側壁石底部

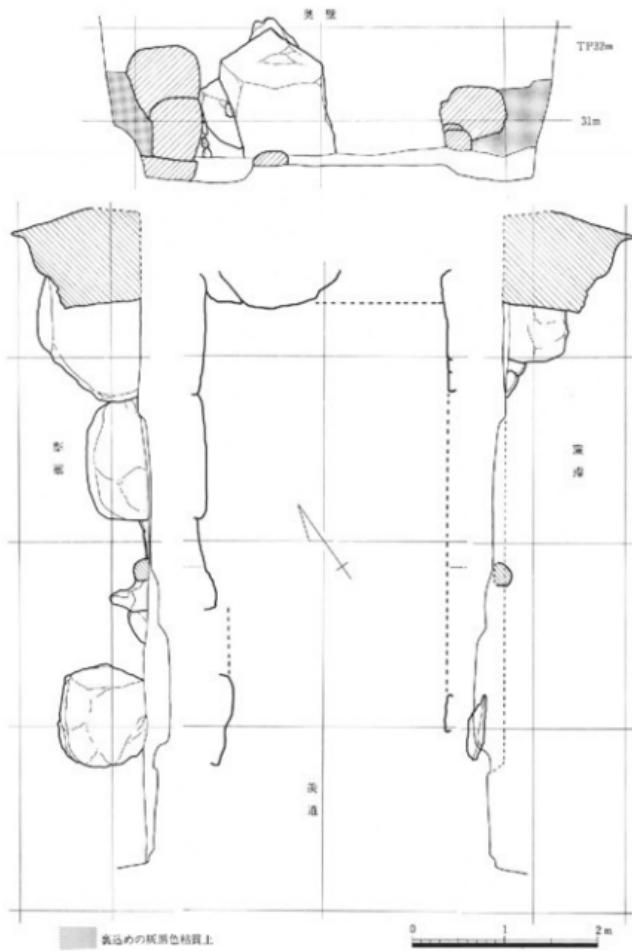


図-32 横穴式石室平面図・立面図

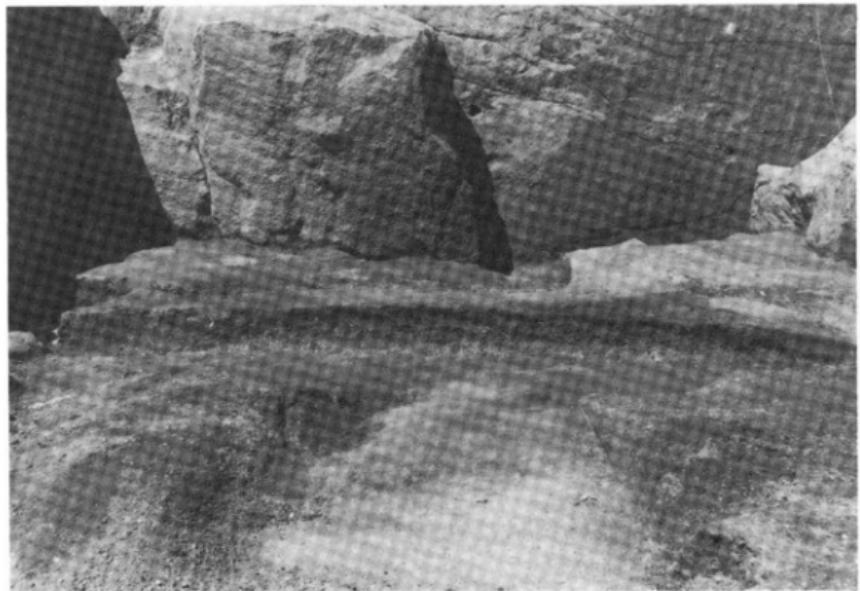
うが、その意図の中に二義的に鉄滓が含まれてしまった事実に注意する必要があろう。

石室の構築法

土層や地山の状況、床面に敷かれた粘土と奥壁石との関係、掘り方底面の状態等から石室の構築に際しての順序をある程度うかがうことができる。

- ① トレンチの大きさ、葡萄畑の造成等によって掘り方の規模を推定することはできないが、

大平寺古墳群



石室床面下の木炭層



木炭層中の鉄滓

尾根に直交するように長方形の掘り方を花崗岩の地山に掘り込む。この際、あえて掘り込み面を水平にする等の措置はとっていないと思われる。

- ② 掘り方底面に石室の位置を決め、壁体の置かれる位置を若干深く掘りくぼめておく。
- ③ 石室後半部に排水、除湿の施設を設けるため、山土を石室の主軸部に高く、周囲に低くなるように平面長方形状に積む。
- ④ その上に木炭粉を敷きつめる。その際、まだ横断面は凸状を呈している。
- ⑤ 次に粘土を敷いて床面を造作する。ここで初めて床は水平となる。粘土は一部壁体の下にも及ぶ。
- ⑥ あらかじめ定められた位置に石を積む。おそらく入口の方から順に置かれていたものと思われる。
- ⑦ 壁体と掘り方との間に裏込めの土を充填する。

今回の調査では以上の方針、順序については復元できると思われるが、破壊が著しく、細部や壁体の石の積み上げ、天井石の架構など不明な部分も多い。また掘り方についても、斜面下位の部分、南東壁側ではたして掘られているのか、あるいは斜面地をカットすることで掘り方底面をも同時に造り出しているのかといった問題も残る。

出土遺物（図-33）

石室床面上に埋置された破碎花崗岩片の間や側壁の抜き取り穴から遺物が出土しているが、いずれも二次堆積の資料である。須恵器は長脚高杯で、脚部は失なわれているがスカシ孔の無いものであろう（1, 2）。手捏高杯は高さ10cm前後の小形品である（3, 4）。赤褐色を呈し焼成は良好。鉄製刀子は破損品で、あるいは一ヶ月であるかもしれない。柄部に木質が残る（5, 6）。また、756年に鋳造された銅錢、神功開宝が出土している（図-34）。

古墳の築造年代はその規模からみて6世紀後半代に遡るものであろう。石室の幅員からすると少なくとも四棺以上を埋納することが可能である。残念なことに棺釘のすべてが失なわれてい

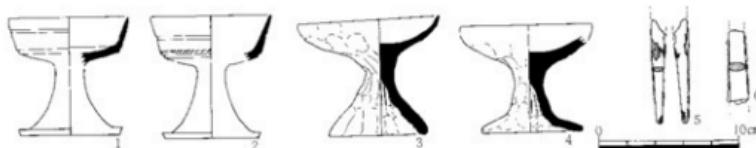


図-33 Cトレンチ出土遺物実測図



須恵器高杯



小型手捏高杯



刀子・神功開宝

る現状では、はたして何体の遺骸が葬られたものか明確には知りえないが、後期古墳のもつ一般性や7世紀前半の須恵器が出土していることからすれば、当然数回の追葬も行なわれたものと思われる。

神功開家の出土は、古墳が古墳時代の墳墓としての機能や認識が忘れ去られた後、再利用された結果によるものである。その背景には奈良時代の火葬骨の埋納等が考えられるが、本古墳ではそれを検証しうるような状況ではなかった。

ところでこの古墳の被葬者についてはどのように考えることができるだろうか。半尾山古墳群という後期古墳群の一つを構成しているとともに、古墳群の位置する「東山」山麓部の同時代の集落との関係をも考慮する必要があるだろう。例えば最近の調査では山麓部の扇状地から5世紀末～6世紀の遺物とともに、多量の鉄滓、輪羽口など鉄、鉄製品生産に関する遺物が出土することが明らかになってきている。住居址等の遺構は明確になっていないが、それでも鉄生産に従事した集団が集落を営んでいたことを推測することは無理なことではなかろう。そこで本古墳の石室内除湿施設に鉄滓が混入していた状況に注目すると、古墳の被葬者、あるいは築造者が鉄滓を含むような木炭を利用しうる人間ではなかっただと思われる。こうした人間の背景として、山麓部の鉄生産集団を想定しておきたい。また、それが供獻等ではなく二義的に混入されたと推定される点で、被葬者の階層をも知りうる視点が設定されるのではないだろうか。いずれにしても類例の増加をまって検討しなければならない課題ではある。

調査後、植木の仮廣場に至る道路が付けられるという計画があり、丁度石室部にかかることになった。協議の結果、計画は変更し石室は保存されることになったが、半尾山古墳群には今回のように填土を削られ地下に埋没している古墳が、精緻な分布調査の網目をくぐって相当数存在しているものと思われ、これからも慎重に対処していく必要が痛感された。

なお今回の調査については大阪府教育委員会の分布調査にも記されておらず、太平寺支群の天冠山東支群1号墳（TE支群1号墳）と仮称しておく。

註 河内考古刊行会（1979）『河内太平寺古墳群』



図-34

神功開拓影

たか い だ
高井田横穴群

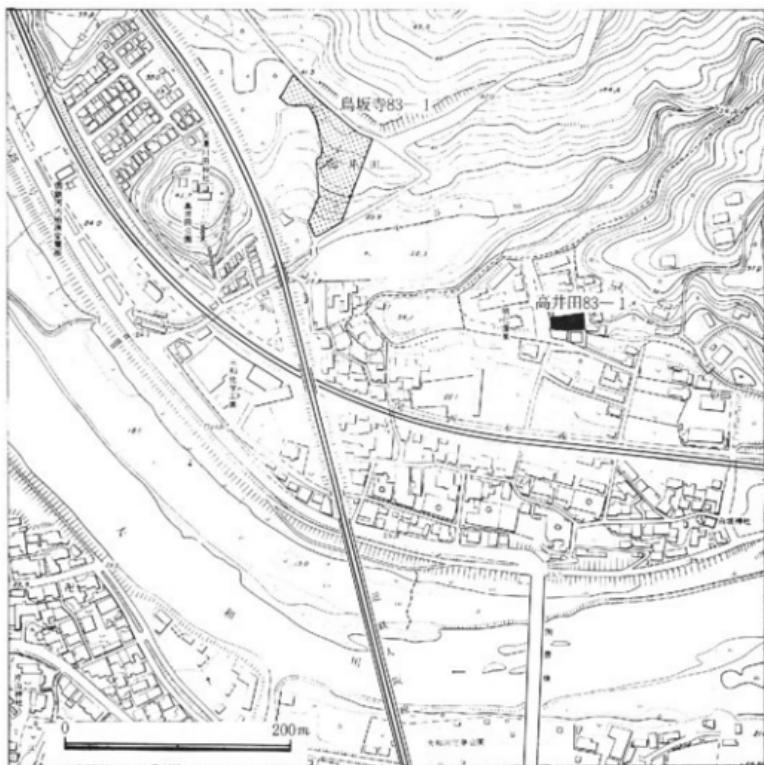


図-35 調査地区附近地図（鳥坂寺跡調査地区を含む）

83—1次調査

- ・調査地区所在地 柏原市高井田 617-8・9
- ・調査担当者 花田勝広
- ・調査期間 1983年4月27日・28日
- ・調査面積 4 m²/249.91 m²

調査地は、高井田横穴群の所在する丘陵の同一尾根上に位置し、明化産業株式会社の東側60mの地点である。申請地は、すでに擁壁工事が行なわれており、きわめて遺構の保存状態が悪いと予想されたが、調査の結果、現地表下2.6m～2.9mで遺物包含層が検出された。

調査は、申請地の中央部に2×2mのトレンチを設定し、現地表下2.9mまで掘り下げた。層序は、上層より盛土・耕土・灰褐色粘質土・灰褐色砂質土・暗灰褐色砂質土・青灰色砂質土・黄褐色砂礫土（地山）の順に堆積している。遺物は、暗灰褐色砂質土から瓦器片が、青灰色砂質土からは須恵器・土師器片が出土した。瓦器は、細片であるため図示出来なかったが、外面に指サエが残る12～13世紀代の椀、皿である。須恵器は、7世紀代の杯身、蓋で周辺に分布する横穴墳群の追葬期と同時期の遺物である。このように、調査区周辺には、横穴墳の分布が予想される。

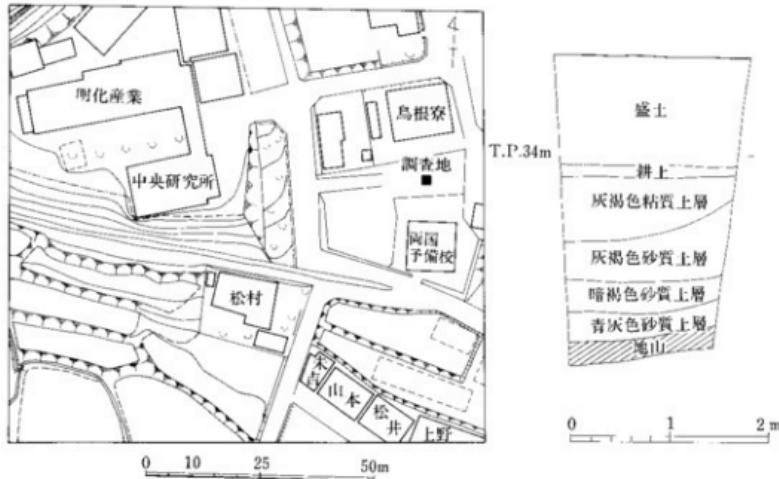


図-36 調査区位置図・土層断面図

玉手山遺跡

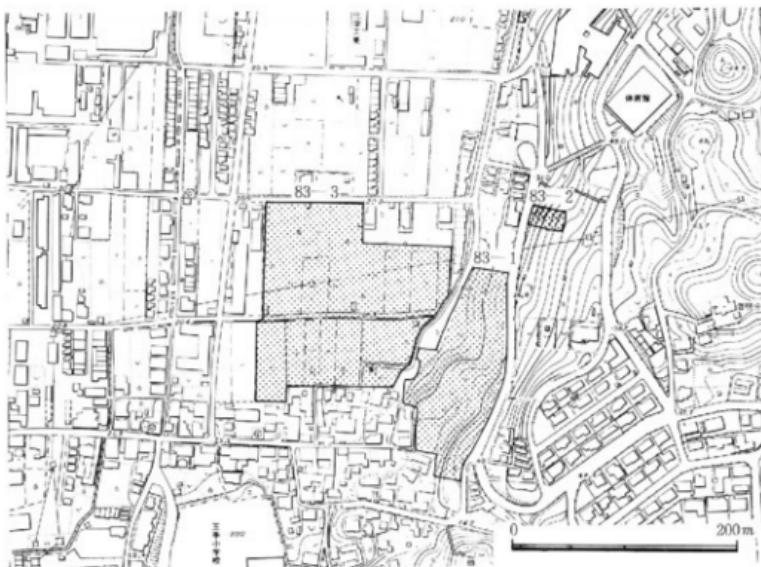


図-37 調査地区附近地図

83-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市玉手町145-123・124
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1983年12月17日～23日
- ・調査面積 63.5m² / 821.42m²

本調査は、マンション建設に伴う事前発掘調査である。

玉手山丘陵は最近の調査成果によって旧石器時代から人間の居住した痕跡を残しており、弥生時代における高地性集落も確認され、また古墳時代には数多くの古墳が群集して営まれていることは周知のことである。当該地は玉手山2、3号墳の西150mをへだたる斜面地で、全面調査の必要度の有無を確認するために実施した予備調査である。結果として、確たる遺構の存在が認められなかったので、全面におよぶ発掘調査は実施しなかったが、以下トレンチ内における調査の概要を記述する。

調査地は玉手山丘陵の北西斜面地で、標高35m～47mの急傾斜地である(図-38)。斜面に沿って幅1.5mのトレンチを3本設定し掘削を行なった。さらに遺物の出土した地点をAトレンチでは北側に1.5m、Cトレンチでは南側に2m拡張し、遺構の有無の確認を行なった(図-38)。

Aトレンチについて層序をみると地表から約1.5mで地山に達するが、上位より表上下(1)茶灰色砂質土層、(2)明黒色土層、(3)茶灰色疊混り砂質粘土層、(4)灰色砂質粘土層、(5)明灰色疊混り粘質土層が堆積しており、トレンチ東側、斜面上位においてのみ(2)、(5)層が部分的に認められた。地山は灰褐色疊混り粘質上で花崗岩等の岩塊を含んでおり、大阪層群と思われる。(5)層と地山とは漸移的で、花崗岩等の岩塊を含んでいないものが(5)層であるという程度の違いでしかない。Cトレンチの地山は凝灰岩の風化土で、その上にAトレンチ(2)層がのっている。Bトレンチは畑などの耕作土ですぐに地山に移行する。土層の観察からすると(1)～(4)層は二次堆積であると判断された。

遺物はAトレンチ(5)層から土師器細片、Cトレンチ(2)層から小型手捏高杯、円筒埴輪小破片、土師器細片が若干出土した。高杯は赤褐色を呈し焼成は堅緻である。破損しているのが高さ5cm前後を測るものであろう。埴輪は円筒埴輪の胴部破片で外面タテハケ調整、突出度の低い不整形のタガをもち、色調は黄灰色を呈している。6世紀初頭のものであろう。他の土器片は小破片のため時期は不明である。

今回の調査では遺構の存在は確認されなかったが、古墳の供獻具である小型高杯、埴輪片が

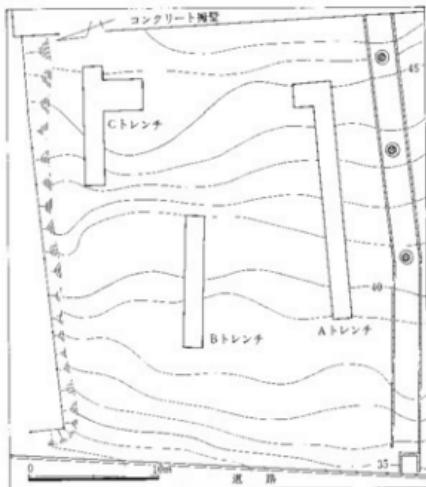


図-38 調査地地形、トレンチ位置図

考える上で貴重な成果といえる。

出土した(2)層、土師器片が出土した(5)層からみて近接地に同時期の古墳が存在することを示唆するものである。玉手山丘陵の尾根上に前期～中期の大型古墳の存在は周知されているが、尾根から下った斜面の中期～後期の小古墳や古墳周辺の諸施設の解明は今後に期待されるものである。トレンチ内の地山観察から凝灰岩層が大阪層群の間に露出している状況が把握されたことは安福寺横穴墳群をはじめとする横穴墓の存在を

玉手山遺跡



調査地遠景



調査終了状況（東から）

こくぶにじ 国分尼寺跡

83-1次調査

- ・調査地区所在地 柏原市国分東条町2582-1、2
- ・調査担当者 桑野一幸
- ・調査期間 1983年4月6日～4月8日
- ・調査面積 4.5m²/514m²



図-39 地籍名に残る「尼寺」(網点部分)と調査地点

天平13年(741)、聖武天皇の発願により諸国に国分寺、国分尼寺が設置された。河内国では国府より遠く、柏原市東条の地に国分寺が造営されたが、「法華滅罪之寺」ともいう国分尼寺の位置は明確ではない。各地の例をみると、国分尼寺が置かれた地には現在でも「尼寺」、「法華寺」という地籍名を残す場合が多い。「柏原市史」にも説かれているように、現在の光洋精工第二工場の附近には「尼寺」という地籍名が残っており、この附近に国分尼寺が置かれていたことが推定される(図-39)。

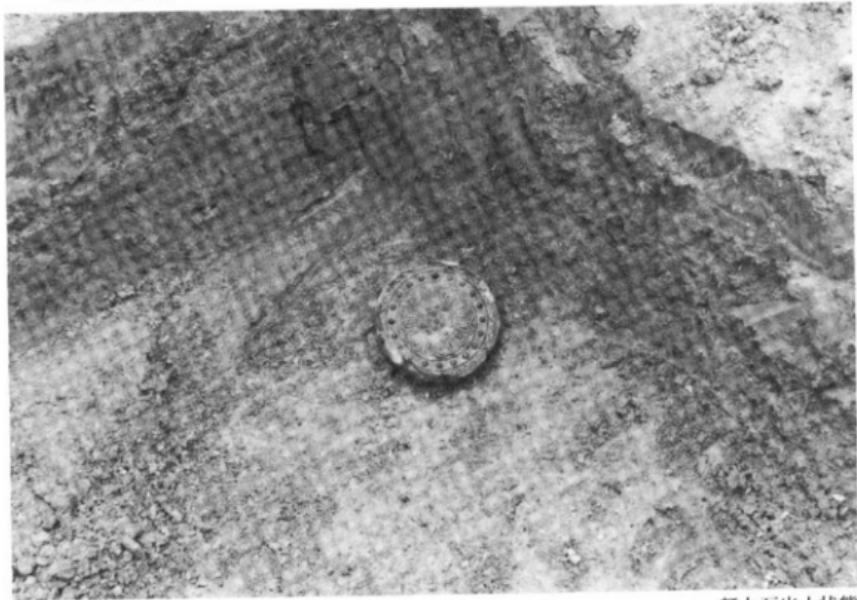


図-40 調査区位置図

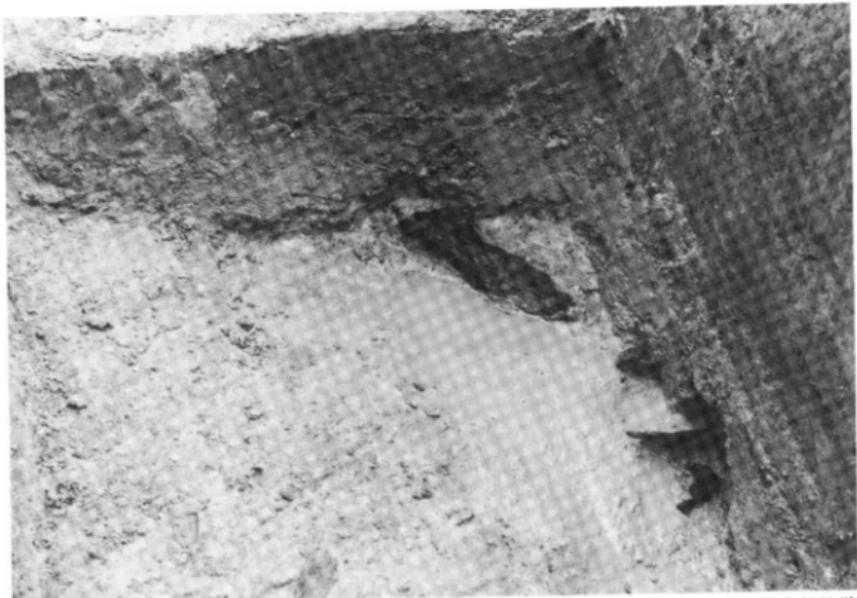
今回の調査は、個人住宅建設に伴う事前調査として行ったものであるが、国分尼寺推定地の北辺にあたり、その実体を解明するため重要な地点であると判断された(図-39)。周辺の現地形は南にやや高くなっているものの、ほぼ平坦な地であり、国分尼寺が大略1町半四方(約150m)を原則とするところから、寺地を確保するには十分であったと思われる。

調査は、対象地北西隅に1.5m×3mのトレンチを設定し現地表下から約1.7mまで掘削した。層序は図示したように各層ともほぼ水平に堆積しており、しかも非常

国分尼寺跡



軒丸瓦出土状態



自然流路

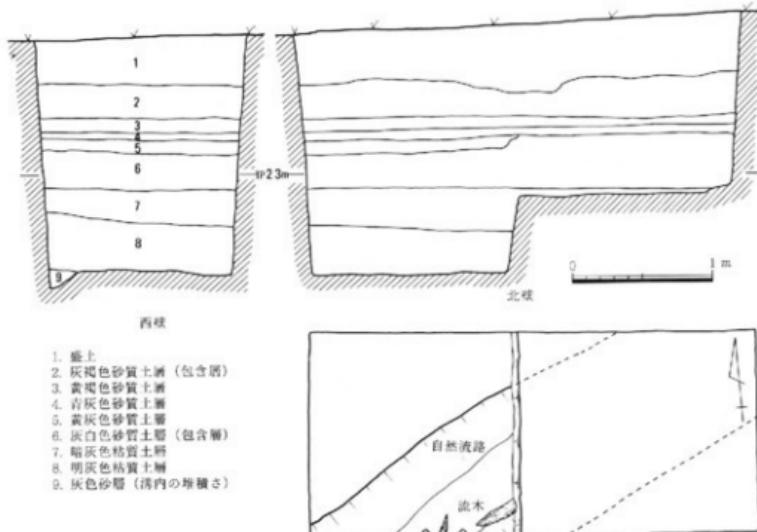


図-41 調査区土層図と平面図

に固くしまっていることが注意された。上位に砂質土、下位に粘質土が堆積していたが、砂質土中において上、下2枚の遺物包含層が確認された。上部の灰褐色砂質土層からは瓦器塊、皿類の破片が若干検出され、下部の灰白色砂質土層では複弁蓮華文軒丸瓦や平瓦などの屋瓦、須恵器、土師器の小破片がわずかに検出された。またトレンチ底部、地山面で溝を確認し、溝内

からは自然木が出土した。この溝については北東方向、すなわち大和川に向って流れ込むような自然流路であろうと判断した。こうしたことから自然流路を埋めたてるように、ある時期整地が行なわれたのではないかと思われるが、地形を改変した要因については連断できない。

遺物は上、下包含層とも、土器類については小破片のため、器形の復原、法量の計測、図化を行ないうるようなものは全くない。瓦は下部包

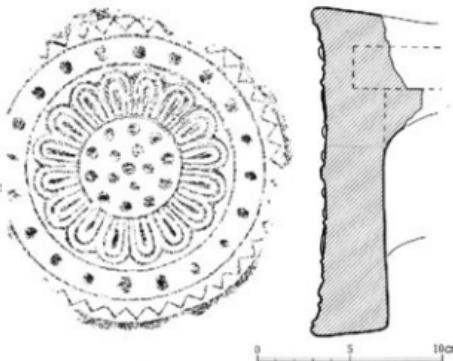


図-42 下部包含層出土の軒丸瓦実測図

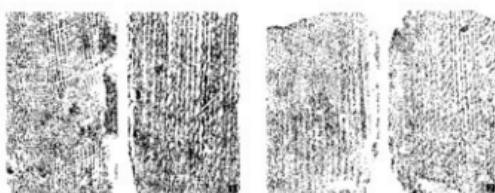


図-43 下部包含層出土の平瓦 拓影（1／3）

もつ間介のない八葉の花弁で構成され、外区は20の珠文、周縁の形状は三角縁で線鋸彫文がめぐる。胎土は長石が多く、色調は明灰色を呈し、焼成はやや軟。丸瓦部はほとんど残っていないが、接着方法は「印籠つき」法で瓦当部上縁よりかなり下位にはめ込み、その上下に粘土を厚く塗りつけたものである。時期は8世紀前葉に位置づけられよう。平瓦は凸面に繩叩き目を施すもので、図示したものはいずれも4本/cmの繩目を残す（図-43）。凹面は7本/cmの布目痕をとどめるもの（1）と、磨消したもの（2）とがある。

今回出土した軒丸瓦と同種のものが国分寺跡の発掘調査の際にも出土している。ただし同范ではない。少なくとも諸国の国分寺あるいは国分尼寺の造営が8世紀中葉以降であるとすると、河内国においては国分寺跡、尼寺推定地からそれ以前にさかのばる瓦が同じように出土する事実は、創建の経緯をさぐるうえで興味ある点ではあろう。

（追記）

調査後、便槽掘削の際事前に連絡を受け立ち合ったところ、下に図示した土師器鍋が地表下約1mで出土した。半壊品であったが外面ナデ調整、内面ハケ調整が施され、色調は赤褐色を呈し、胎土には長石、雲母が含まれる。下半部は二次焼成を受け煤が付着している。

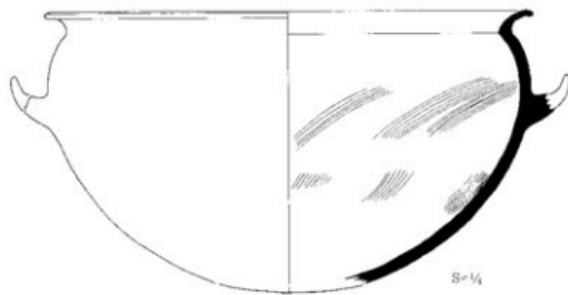


図-44 立会出土遺物

い　う　ら 五　十　村　廃　寺

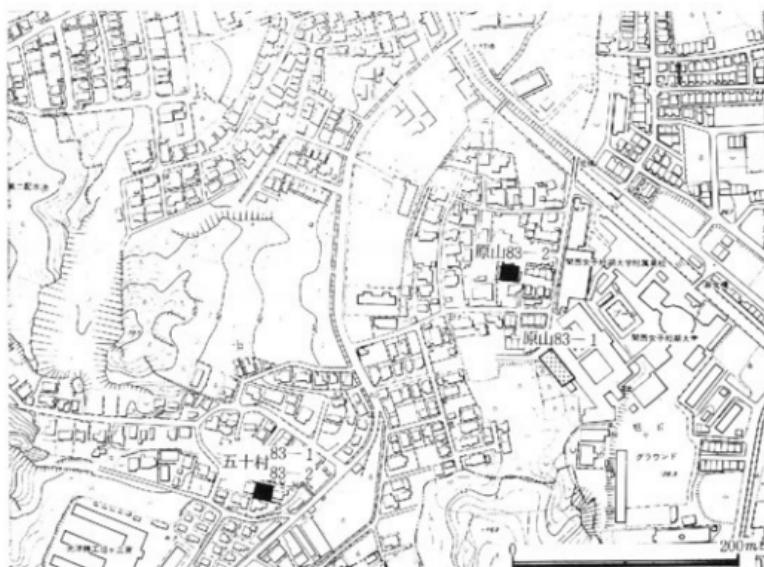


図-45 調査地区附近地図（原山遺跡内調査区を含む）

83-1 1次調査

- ・調査区所在地 柏原市旭ヶ丘2丁目369-36
- ・調査担当者 北野 重
- ・発掘調査期間 1983年1月25日～2月1日
- ・調査面積 22m² / 247m²

調査概要

当地区は五十村廃寺の寺域内にあたり、当初、旧住宅建設のための造成工事が行なわれたと
いう伝聞から、その削平や搅乱の進行度によってどれだけの遺構が遺存しているか危惧された。
調査区に、1×10、1×1 mのトレンチ各2本を設定した。その結果、事前の伝聞を裏付ける
ように、南側半分は地表より約50cm下まで搅乱があり、その後また盛土されていた。北側半分
はある程度の削平は受けているものの何らかの遺構が遺っている可能性が認められた。遺構は

五十村廃寺

現地表面から浅く、住宅の基礎によって破壊される恐れがある為、下記の調査を実施した。

遺構

遺構は、表土を約10~20cm掘り下げた段階で、五十村廃寺の主要伽藍の1つと考えられる基壇の一部を検出した。基壇の検出規模は、東西方向8.3m、南北方向3.4m、基壇高約10cmを測る。当建物の基壇の残部については、東側や南側に端部が検出されなかつたところからさらに拡がるが、既に消滅している。

基壇の内側から礎石の抜き取り穴を6ヶ所検出した。礎石の抜き取りピット最下層のみで、上層部がほとんど削平を受け、検出面からピット底面まで5~26cmを測る。ピットの位置は、基壇の東西方向の一辺に平行して3個のピットが2列に並ぶ。検出面は黄褐色粘質土の地山上である。北西隅から東側へピットナンバーを付し、1, 2, 3とし、南側のピットも同様に西から東へ4, 5, 6とした。1, 2, 3は東西方向に長い形状が見られ、4, 5, 6は、円形又は長楕円を呈するとと思われるが、いずれも半蔵されているのでその規模は不明である。ピットでは、その底面に礎石の根石として瓦と石を敷並べている。ピット5は、他のピットと比べ極端に大きく、抜き取り時に掘り広げられたものだろう。ピットの埋土は、主に礎石の抜き取り時に上層から混入したであろう茶褐色粘質土である。ピット1, 2, 4は、当建物が消失した時の焼土や炭が多く含まれていた。また、埋土中からの出土遺物は、礎石の抜き取り後の遺物(1, 4, 5)と礎石の据置時の遺物(2)とがある。

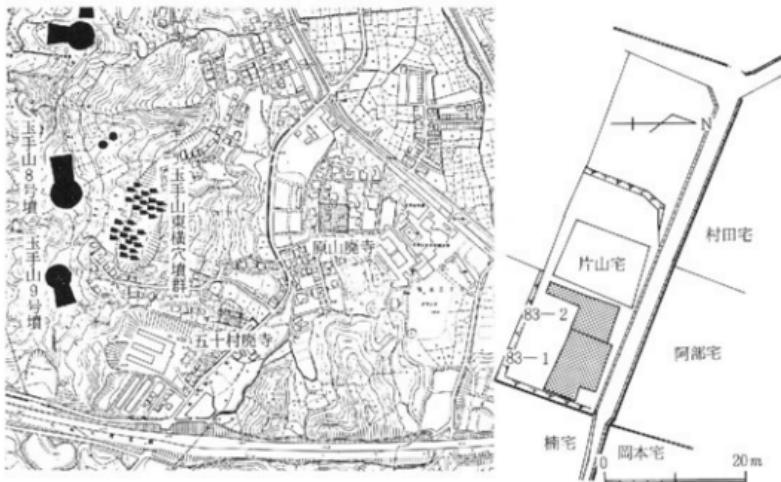


図-46 調査区附近地図、発掘調査区

基壇の外縁は、ほとんど削平されているのであるが、地覆石として使用されたと考えられる凝灰岩や瓦の部分的な遺存が見られた。基壇北縁では、西の端から3.5～5.0mの範囲で瓦積みの最下段を検出した。瓦はそれぞれ10～20cm大の平瓦片を使用している。この瓦積みの瓦の中に瓦塔の破片が出土した。瓦塔の破片は合計3片が出土し、「北」の字を線刻した1片は基壇最下段に原位置をとどめており、他の2片もその上段に積まれていた可能性が高い。北縁の他の部分は、瓦積みが崩壊したような状態の部分もみられたが、ほとんど削平されていた。基壇西縁は、凝灰岩と瓦積み部分が検出された。北の端から0.6～1.0mの範囲で凝灰岩の切石が2個並び大部分欠損するが原位置をとどめている。さらに2.8～4.0mの範囲で瓦積みが検出された。この部分の瓦はそれぞれ10～20cm大の平瓦片を使用し、2～3段に積まれていた。

基壇の構造については、上段部分が消滅している事から、地覆石として使用された凝灰岩切石があるものの、東石、羽目石等が消滅しているところから残念ながら復元は困難である。基壇の下段がどれだけの高さか不明であるが、約10cm以上の地山削り出しを行なっている。削り出し部分から基壇外縁まで約50cm弱の控えの部分がある。北側、西側同じ長さである。

基壇外側には、恐らく建物廃絶時に落下したと考えられる多量の瓦の堆積が見られた。瓦の出土状況は、後世の2次的な割れが多いが、直接数枚の瓦が一挙に落下した状態の瓦も見られた。この瓦の位置は、基壇外縁から1～2mの範囲である。

これらの瓦の堆積土中から赤褐色焼土や炭を含む土層が各所に見られた。礎石の抜き取りビット内からも焼土があった事、また、同建物の礎石と思われる石が2次焼成を受けている事を考え合わせると、同建物の廃絶は、焼失が原因であるといえる。堆積した瓦除去後に整地層の存在は確認されなかった。直ぐ地山が見られ、後世の攪乱がないとはいえないが、5～10cmの凹凸のある平坦面である。雨落ちについては、基壇の外縁から1～2mの範囲を注意して掘削したが、北縁や西縁にも何ら痕跡は検出されなかった。この建物には、築造時から雨落ち施設のなかった事が考えられる。

ビットNo	東 西 方向径	南 北 方向径	上 面 標 高	下 面 標 高	底面の 形 状	出 土 遺 物	埋 土	その他の特徴
1	1.03	0.63	44.123	44.098	ほ ぼ 水 平	瓦小片	炭焼土を含む	
2	0.75	0.45	44.123	44.058	"	5～20cm 大の瓦片	"	5～30cm大の 石を敷く
3	0.48	0.38	44.083	44.023	ゆるい 円 弧	な し	茶褐色粘質土	
4	0.58	(0.45)	44.113	44.023	ほ ぼ 水 平	瓦小片	炭焼土を含む	南側半分は欠 損する
5	1.75	(1.06)	44.105	43.853	"	"	黄褐色粘質土	"
6	0.80	(0.57)	44.088	43.958	"	な し	"	"

単位は、m、T.P.である

表-1 磂石抜き取りビット

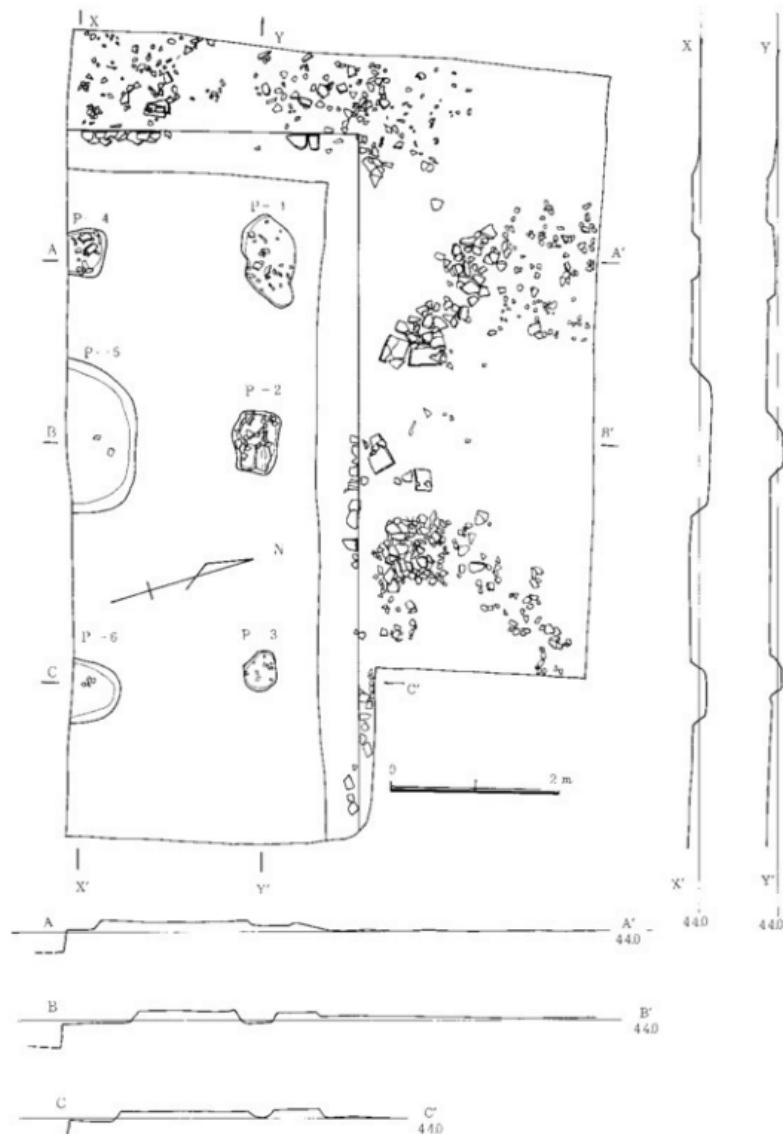
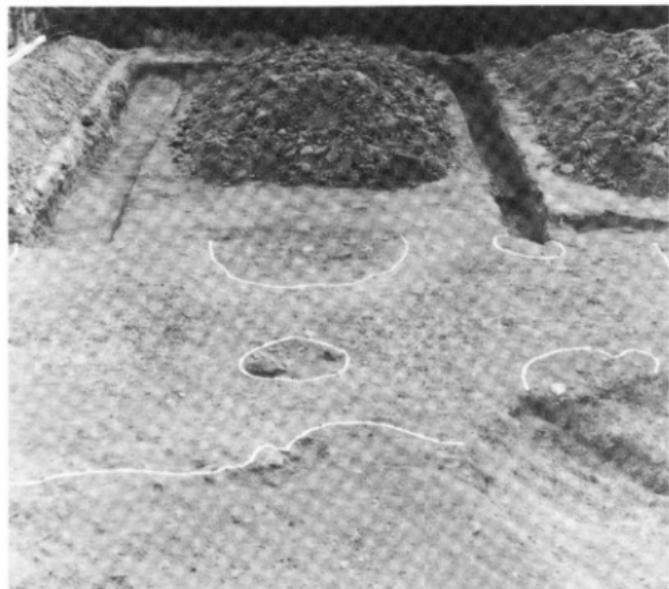


図-47 遺構図

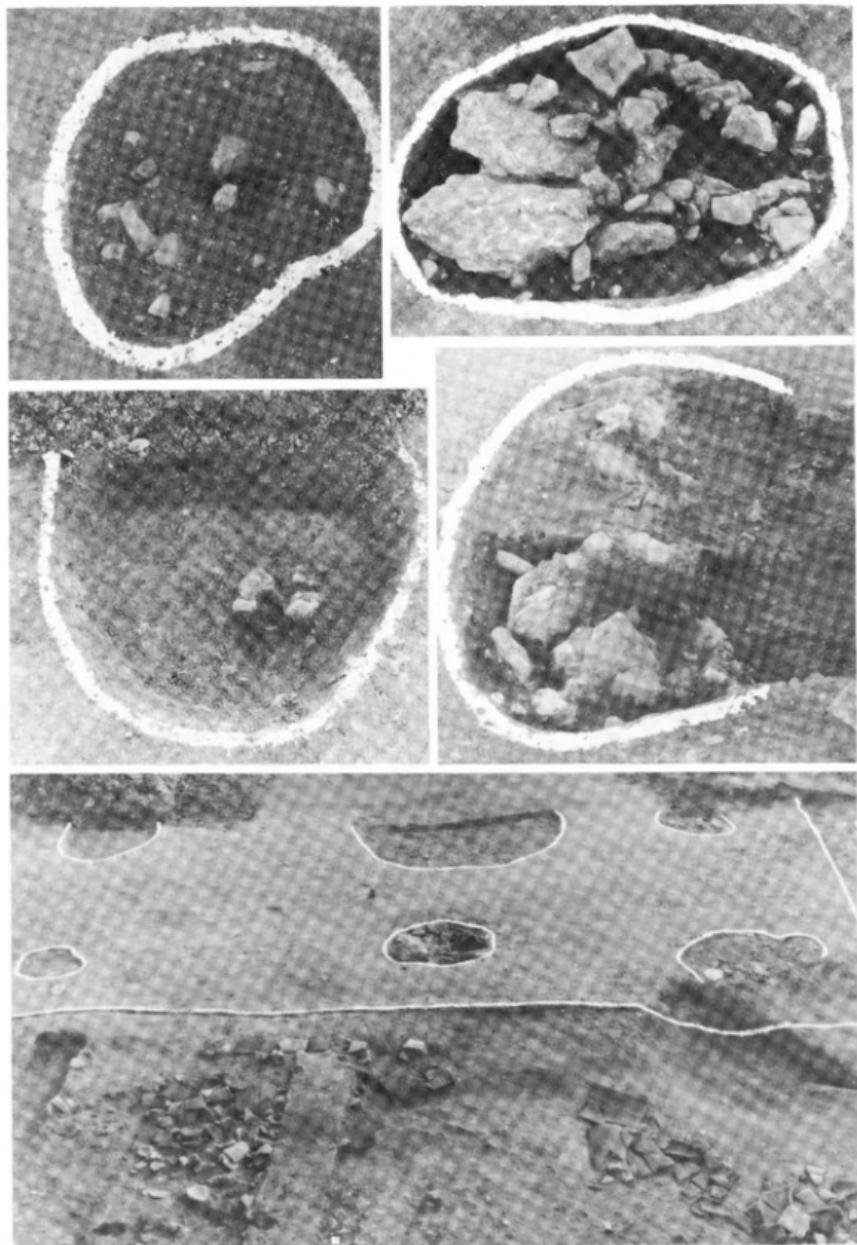


遺構

五十村庵寺



遺物出土狀況



ピット検出状況

出土遺物

遺物は、基壇周辺の瓦溜りを中心として、各トレンチの各層、礎石の抜き取りビットなどから、瓦、凝灰岩、鉄釘、瓦塔片、土師器片がコンテナ30箱分出土した。今回出土の遺物及び、当調査区の隣地である楠克美氏、松倉喜代治氏から寄贈された遺物と合せて報告したい。

瓦塔（図-48）

瓦塔片は、合計3片出土した。出土地点は、基壇北縁の西の端から4.1mの地点で、瓦積みの中の1片として最下段に並べられていた。他の2片も基壇に積まれていた可能性が強く1mと離れない場所から出土した。3片は共に精良な粘土を使用し、青灰色に焼成された須恵質のものである。以下、各片について概略したい。

1片は、8.9×10.5cm、屋蓋部分の破片で中央部付近のものであろう。この屋蓋は軸部と付着したもので、接合部分で剥離している。表には丸瓦を表現した瓦棒が2本平行して軒先へ直亘ぐ伸びる。この瓦棒を含め屋根部分は、スキーのジャンプ台のような屋根の形状を模する。軒先は、実際の塔婆に擬した細かな表現がないが、明瞭な段を有し、やや遠方から見た塔婆の雰囲気をよく現わす。瓦棒の長さは約9cm、瓦棒間は約5cmを測る。裏側には、軒檼の表現かあるいは屋蓋と軸部を付着させるための補強用として使われた粘土紐が見られる。瓦棒よりやや丁寧さを欠き断面三角形で軒先から軸部にかけて徐々に太くなっている。軸部との角度は、約15°位である。仕上げは全面に指ナデ調整である。

2片目は、14.0×20.0cm、初層部分。軸部の1面の中央部分の破片である。上下端部は锐利な刃物の切断面を持つ。中央部分の下端から3.5cmのところに、タテ5.5cm、ヨコ5cmの方形透し孔が锐利な刃物であけられている。この孔は戸口を表現したものである。この戸口から約3cm横に離れたところと、上に約1cm離れたところに四天柱と長押の柱棒がある。四天柱は、下になる程やや八の字状に広がり、長押は水平に伸びる。柱棒は瓦棒と同様断面三角形を呈する。上端から約4.5cm下までの間は、屋蓋の付着部分が割がれた部分で凹凸した破面である。この破面から、軸部作成後に屋蓋を取り付いている事が観察される。この破片の長押の端部はやや崩れである。

3片目は、10.5×13.1cm、初層部分。軸部の中央部分で、戸口とその上の部分である。戸口の上には長押の柱棒が見られる。さらにその上には、逆「北」の字の線刻が見られる。線刻文字を持つ瓦塔は特殊事例であり、北の字も本邦初見のものである。この線刻部分は、特に意識して割られているように感じられる。そして、また基壇の北側に置いているのも興味強い。線刻の上部は、2片目と同様に屋蓋部分の剥離面を持つ。この部分に、頭貫又は斗拱が存在したかどうかは不明である。

軒丸瓦（図-49）

当調査区より出土した軒丸瓦は、完形に近いもの1点（1）と小破片2点の計3点にすぎない。しかし、これらの他に、当調査区の東および南に隣接する家の敷地内より出土したも

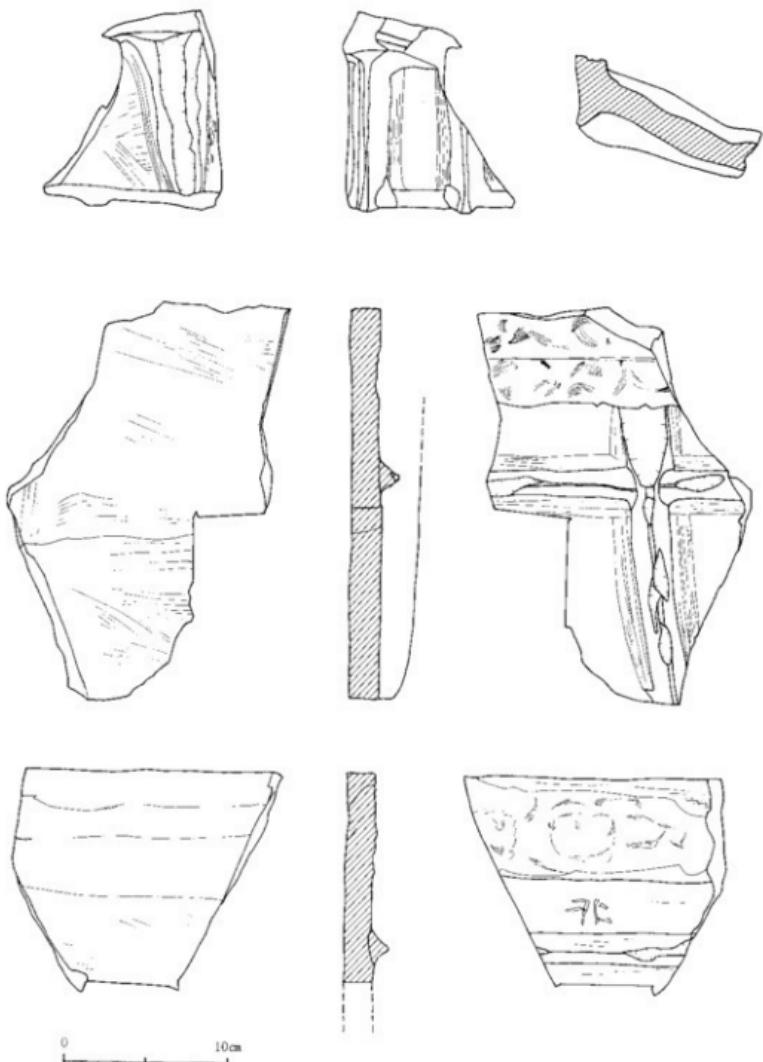
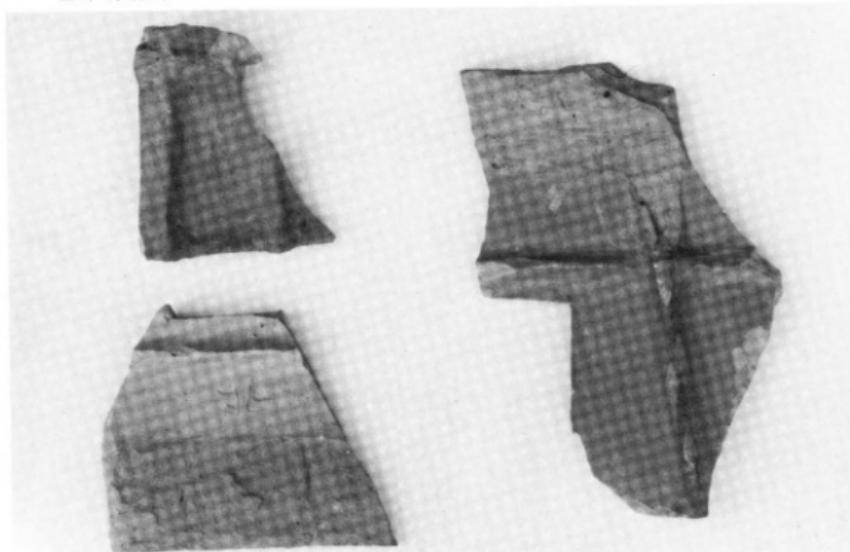


图-48 瓦塔实测图

五十村廟寺



瓦塔



3



1

軒丸瓦

のが3点ある（2～4）。出土地点から見て、いずれも今回検出された建物に使用された瓦である可能性が強い。あわせてここで記述することとする。

①は調査区内基壇の北側東寄りの地点から出土した。単弁（無子葉弁）8葉の蓮華文を持つ直径17.5cm。中房には1+7の蓮子を配する。また、中房の周縁は縁取りをするようなわずかな高まりが認められる。各弁の輪郭は細い凸線で描かれ、弁の先端は内側に切れ込んでいる。間弁は契形を呈するが、弁間は細い凸線様になっている。外区は傾斜縁となる。元来鋸歯文の省略された形態のものと考えられる。瓦当と丸瓦との接合方法は瓦当裏面の外区より一段下に溝をつけ、さし込み、上下に粘土を補っている。瓦当裏面は、周縁がわずかに盛り上がる様になんでて仕上げている。胎土は密であるが、墨化した花崗岩の小礫を含んでいる。全体にやや赤味を帯びた黄褐色を呈し、いくぶん軟質な焼成となっている。本瓦は從來から五十村廃寺出土^{註1.}として公表されている軒丸瓦とよく似た形態ではあるが、蓮子の数が1つ少ない。

②は調査区南隣の敷地内より出土したものである。①と類似の意匠を持つ軒丸瓦であるが直徑は14.0cmと小振りである。単弁（無子葉弁）8葉の蓮弁は①と同様な線描である。しかし文様はやや硬化した印象を与える。中房には1+8の蓮子を配する。外区は傾斜縁となり、線鋸歯文を巡らせる。文様の仕上がりは鮮明である。また、瓦当と丸瓦はほぼ直角に接合されており、瓦当裏面にはかなり多くの粘土を補填した模様である。胎土には石英、長石の砂粒が多く混入している。全体に灰色を呈し、堅緻な焼成となっている。

③は調査区南隣の敷地内から出土したものである。単弁（單子葉弁）8葉蓮華文軒丸瓦で、直徑は16.9cmを測る。各弁は凸線で縁取られ、弁の先は深く内側に切れ込む。子葉は中央に細く作られる。各弁の盛り上がりはほとんどない。外縁は平坦縁で、圓線文をめぐらせる。中房は比較的大きく、周縁を凸線で縁取る。中房には1+8の蓮子を配する。蓮子は竹管文風の形態をとっている。中房、外区とも弁区と同様盛り上がりが乏しく、全体に平ばんな印象を受ける。文様の仕上がりはやや甘い。瓦当裏面はほぼ平坦で、ナデにより平滑に仕上げられている。丸瓦との接合状況は溝をつけ、さし込みによると見られる。胎土は密で、石英、くさり礫などの微砂粒をわずかに含むのみである。全体に黄灰色を呈するが、断面内部は灰色である。焼成はやや軟質なものとなっている。この瓦と同型式のものは、羽曳野市善正寺跡から発見されている^{註2.}。善正寺跡では近似の2種の軒丸瓦が認められるが、そのうちの退化した型式のものと同一である。また、本市内原山廃寺跡からも、類似の意匠の軒丸瓦が採集されている。

④は調査区南隣の敷地内より採集されたものである。単弁（單子葉弁）8葉の蓮華文を配する。直徑は13.7cmを測る小型の瓦である。全体に磨滅が甚しく文様は極めて不鮮明である。各弁の輪郭は線描で表現され、子葉は大きく中心部分がわずかに溝状に凹んでいる。中房はその外郭がかろうじて確認できるだけで、蓮子は全く消滅している。外区は平坦縁、素文である。瓦当と丸瓦との接合状況は、①と同様さし込み法による。胎土には石英などの微砂粒は含まれ

るが、密なものを使用している。全体に黄白色を呈し、軟質な焼成となっている。

以上の瓦の他に、今回の発掘によって発見された小破片が2点ある。そのうち1点は中房付近の破片で単弁（單子葉弁）8枚の蓮華文を持つ。中房には1+8の蓮子を配する。全体に灰色を呈し、堅緻な焼成である。胎土は密で石英などの微砂粒を含むのみである。

他の1点は弁区の破片であり、単弁（單子葉弁）8葉かと推定される。蓮弁を太く凸線で取り囲み、中房を盛り上げている。間弁先端の位置には珠文を置く。外区は素文の直立線となる。灰色を呈し、いくぶん軟質な焼成となっている。胎土は密で、石英、長石などの微砂粒がわずかに混じるのみである。

丸瓦（図-50）

丸瓦片はコンテナに3箱分程度出土しているが、全形を知り得る資料はない。行基丸瓦と玉縁丸瓦の双方が含まれる。その比率は定かでないが、行基丸瓦の方がいくぶん多いようである。ここでは代表的な2点について略述する。

⑤は行基丸瓦かと推定される。厚さ2.6cm程度、凸面は長軸方向の強いナデによって丁寧に調整されており、叩きの痕跡は認められない。なお、凸面の一部には調整の後に着けられた布目の痕が確認できる。側縁は凹面側から断面の中程までヘラを入れ、残りを割った痕が観察される。胎土は密で、石英、長石などの砂粒を含んでいる。全体に灰白色を呈し、焼成はやや軟質。

⑥は玉縁丸瓦である。丸瓦部の厚さは1.3~3.8cmを測る。凸面は長軸方向の繩叩き目で成形した後、丁寧なナデによって磨り削している。玉縁部分の末端はヘラ削りによって調整する。側縁もヘラ削りを2度重ねて平滑に仕上げている。胎土は精良で、微砂粒をわずかに含むのみである。灰色を呈し、焼成は堅緻である。

この瓦の他に凸面に叩きの痕跡を留めるものはすべて⑥と同様の長軸に沿った繩叩き目である。これらの中には玉縁丸瓦と行基丸瓦の双方が含まれている。

平瓦（図-40~52）

平瓦片がコンテナ15箱分程度出土している。このうち、基壇北側東寄りの地点、下層から発見されたもののうちにはほぼ全形を知り得るもののが4点あった（図-91・7、8）。これらはい

図版号	直径	内 区				外 区				瓦当厚	
		弁 区		中 房		幅	形 態	文 様	高さ		
		蓮弁の型式	弁幅	径	蓮子数						
①	(17.5)	単弁(無子葉)8葉	2.5	4.4	1+7	(2.1)	傾斜縁	(線路齒文)	14	2.5	
②	(14.0)	単弁(無子葉)8葉	2.9	4.1	1+8	1.5	傾斜縁	線路齒文	08	3.2	
③	16.9	単弁(單子葉)8葉	2.9	5.1	1+8	2.2	平坦縁	圓線文	02	2.9	
④	13.7	単弁(單子葉)8葉	2.9	4.1	不 明	1.2	平坦縁	素 文	03	4.0	

表-2 軒丸瓦法量表 () は推定 単位はcm

ずれも凸型を用いた一枚づくりの平瓦であり、凸面の成形方法も後述する同一の縁叩き目（工類）に属する。実形の4点以外にも平瓦片の中ではこの類の瓦の比率が圧倒的に高い。ここではまずこの一枚づくりの瓦についてその形態と成形法を記述し、その他の種類の叩き目を残す瓦については別表にまとめて略述した。

まず、法量は広端縁で幅25.5～26.0cm、狭端縁では幅24.0～24.5cm、長さは中軸線で33.4～34.1cm程度となっている。厚みは2.4～2.6cmとほぼ均等である。広端縁は瓦の中軸線に対して直角をなしているが、狭端縁はいくぶん傾いている場合が多い。また、広端縁寄りは瓦の反りが小さく、狭端縁寄り反りが大きい。このことは、あらかじめ幅27～28cm程度の長方形に成形した粘土板を使用したことを窺わせる。瓦の横断面図を描いた場合、両側縁がほぼ平行していることもそれを裏づける。凹面には模骨痕は認められない。布目では広端縁と両側縁に沿って布端の痕跡を残すものも多いが、いずれも広端縁両隅に向って引張られた様に経緯の条が乱れている。あるいは粘土板を凸型から剥す際の用意に凸型の外へ布端を出しておく必要があったのかもしれない。一方、広端縁の角が凸面方向に屈曲した瓦が多く、さらにその部分を整えるためか、角を斜めに切り落とした例も數多く認められる（図-94、10、24）。この事実は布目の状況と一致する。

主として凸面に遺る叩き目などから、本調査で出土した平瓦を分類すると上記の瓦

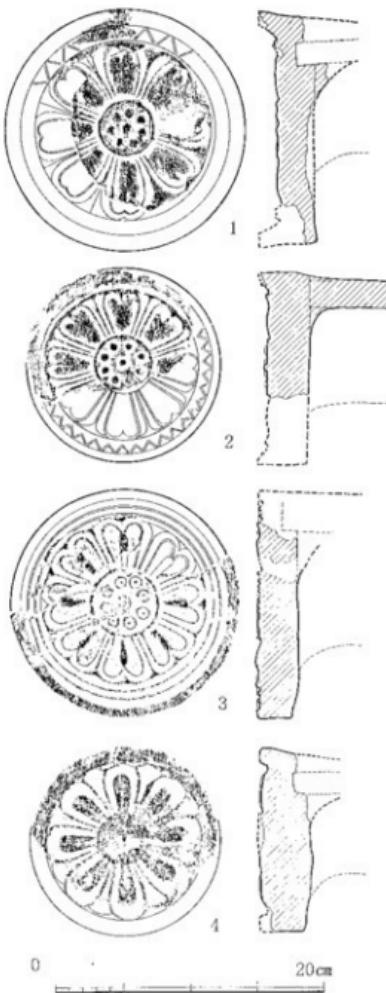


図-49 軒丸瓦断面図及び拓影

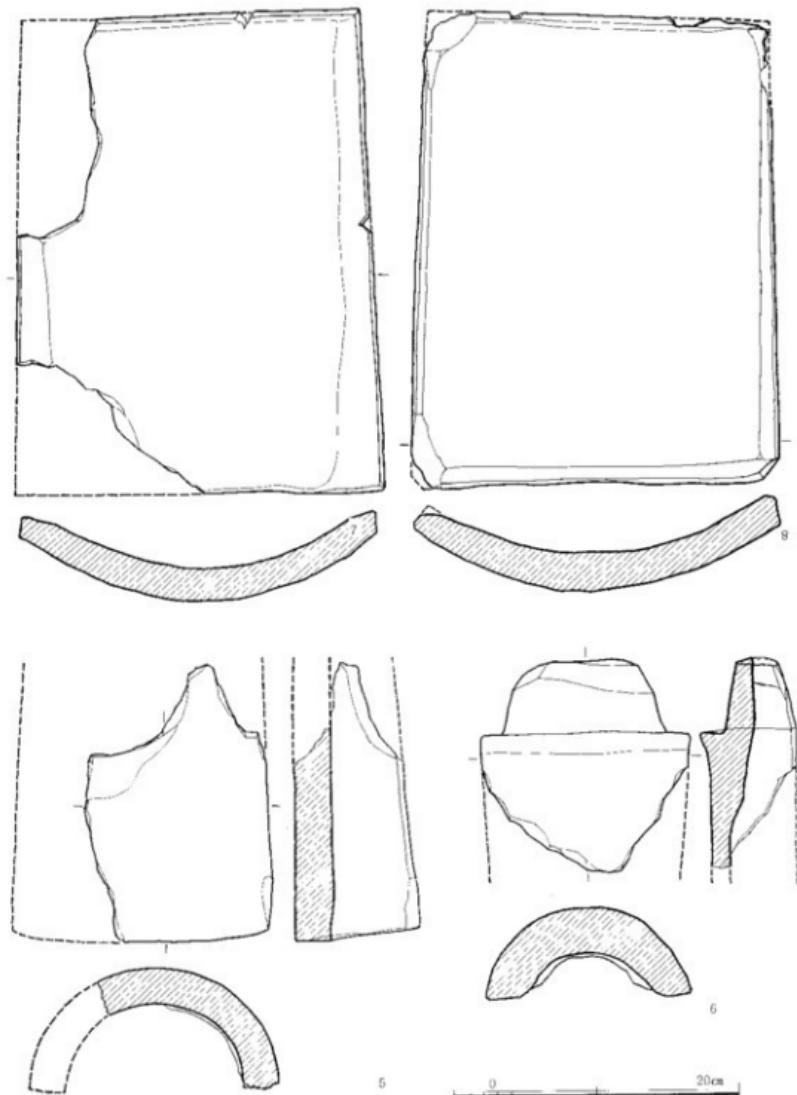
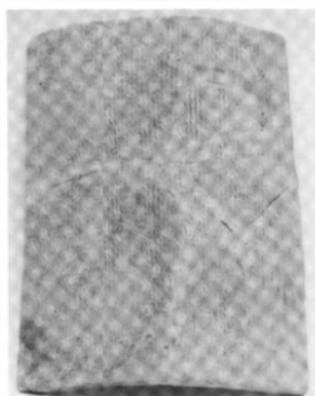
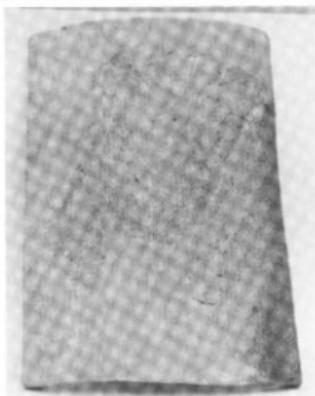
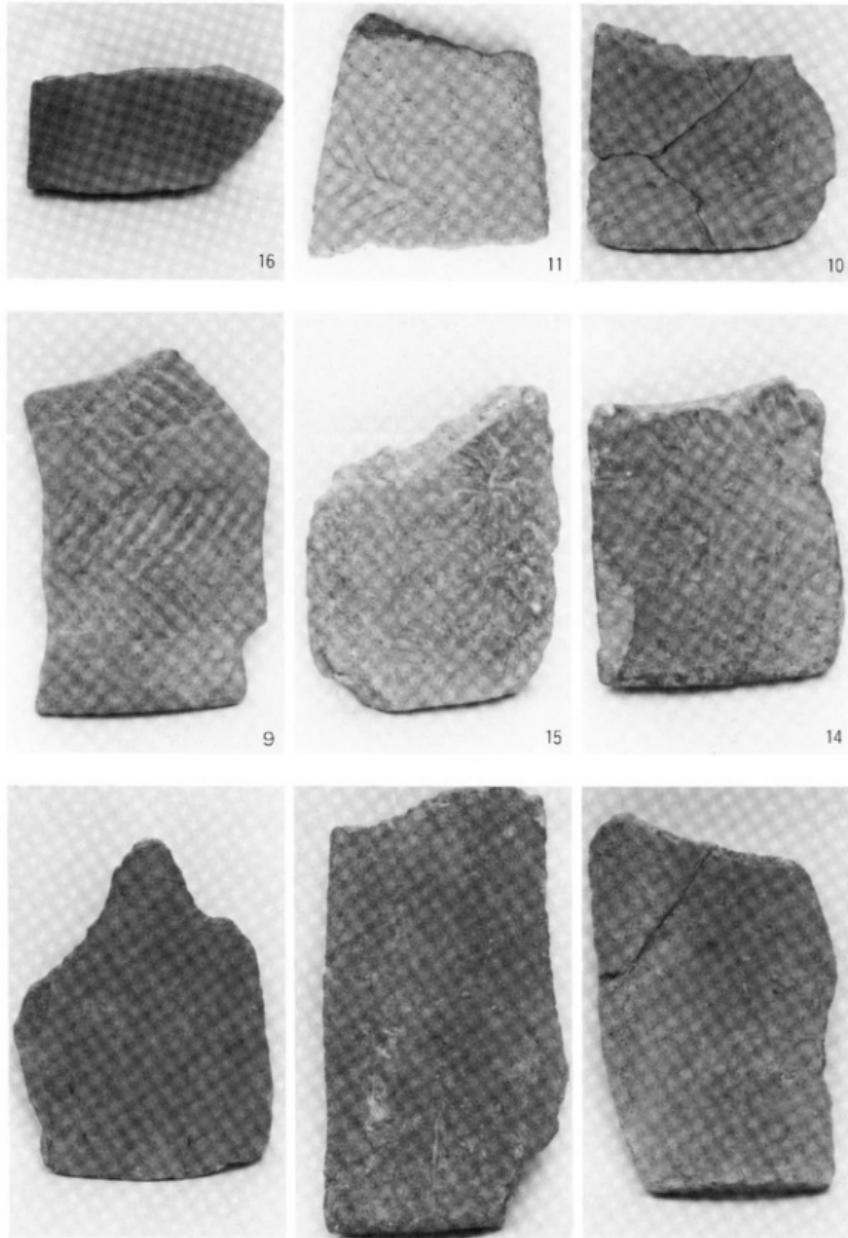


図-50 平瓦・丸瓦実測図





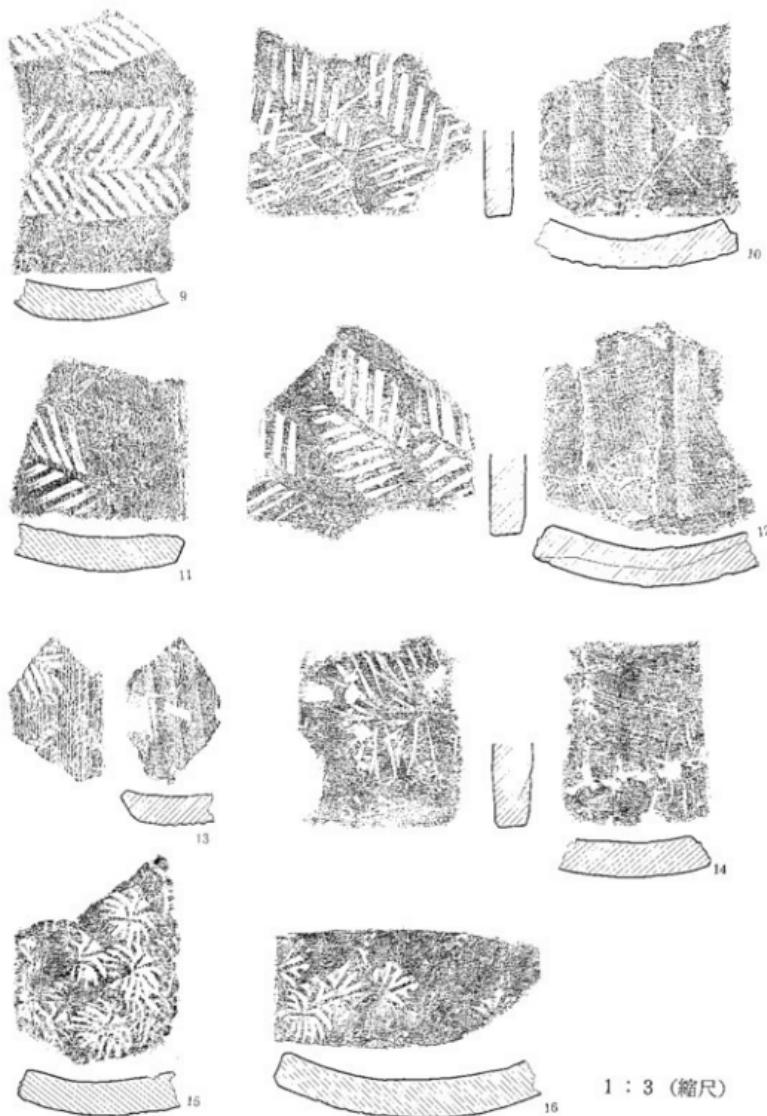


図-51 平瓦断面図及び拓影

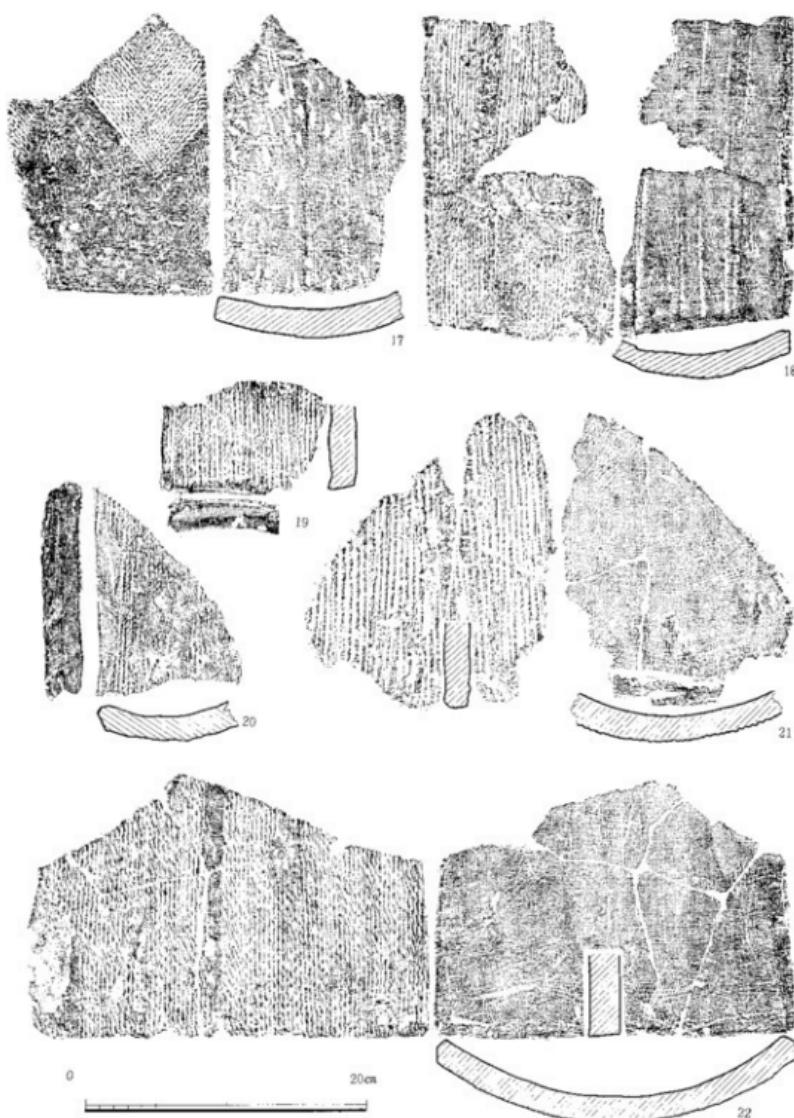
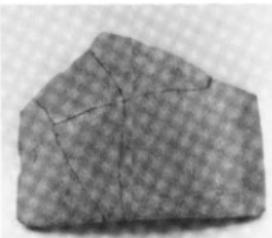


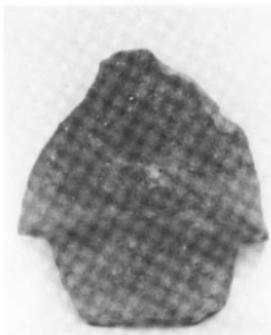
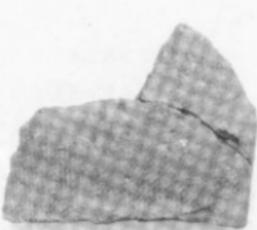
図-52 平瓦断面図及び拓影



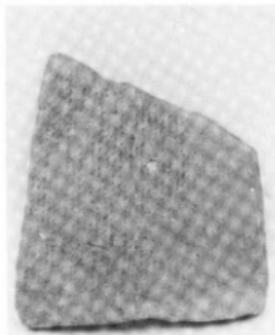
20



22



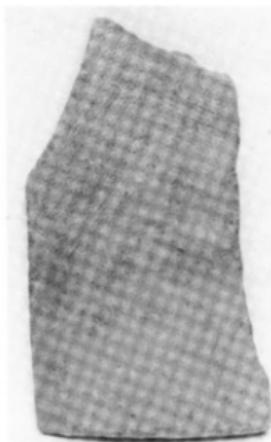
6



- 97 -



17



21



五十村廃寺

を含めて9種類認められる。このうち、一枚づくりのものは2種類のみで（H, I類）あるが平瓦全体の8割近くを占めている。桶巻作りと推定される瓦の中で最も多いのは綾杉叩き目を持つA類であり、他は数点から十数点を数える破片である。このことは本調査によって検出された建物には繩目叩きを持つ一枚づくりの平瓦が主として使用されたことを明確に物語る。

なお、本調査では、軒平瓦は破片を含めて一点も発見されなかった。

註1 用語は原則として『奈良国立文化財研究所 基準資料I 瓦編I解説』によった。

註2 『柏原市史 史料編I』 1975年

註3 『古市遺跡群II』 1980年 羽曳野市教育委員会

83-2次調査

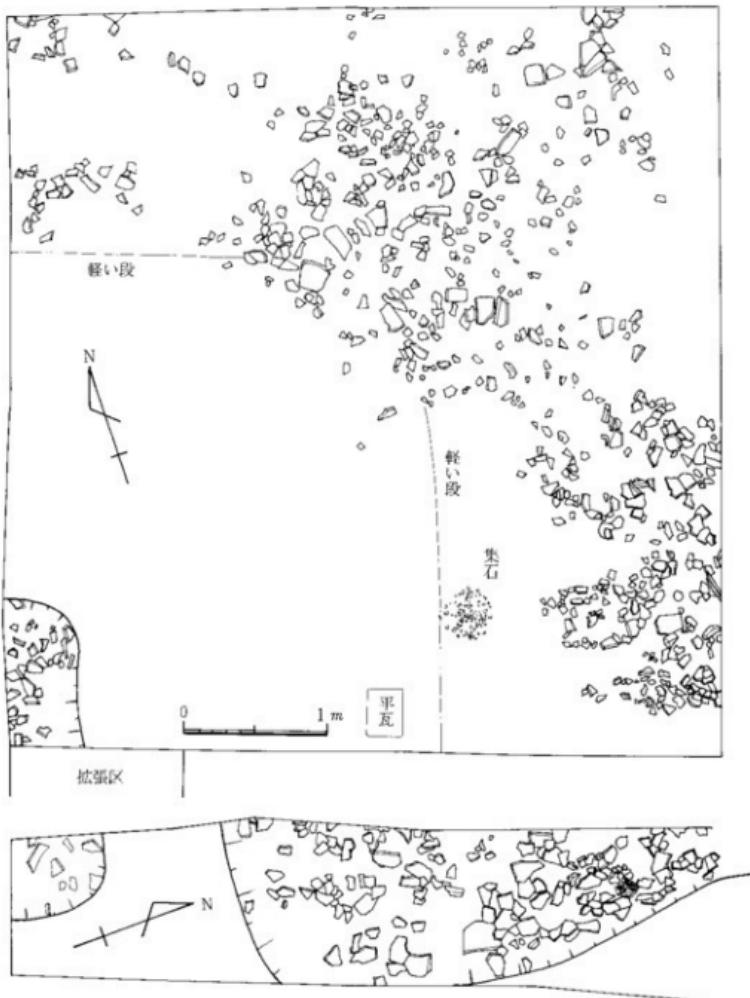
- ・調査地区所在地 柏原旭ヶ丘2丁目369番36
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 昭和58年11月14~21日
- ・調査面積 40m² / 106m²

当調査区は五十村廃寺83-1次調査区に西接した場所にあたり、五十村廃寺の主要伽藍が位置するので調査を実施した。調査は東西5.0×南北5.0mのトレンチを設定して実施した。

基本層序は、表土30cm、遺物包含層10~20cmがあり直下に地山（黄褐色粘質土）が見られた。遺物包含層除去後に調査区中央部に隣接調査区で検出した基壇と平行するように方形の凸部が見られた。この凸部の北側及び東側から多量の瓦が出土した。その状況から、その間隙が約3mと狭いものの立地的には狭小な面積しか有しない寺院であるので、基壇が顯著に削平された痕跡ではないかと考えられた。また、トレンチ南西隅に円弧状の土壤を検出した。全容は不明であるが、検出規模は、南北1m、東西0.5m、深さ0.3mを測る。黄灰色粘質土である。83-1次調査に同様の土壤が検出され、礎石の抜き取り跡ピットである事が判明している。この為土壤の規模を明確にするために、南側に東西1×南北5mの範囲でトレンチを拡張した。結果規模は西側については不明であるが、南北4.2m、東西1m以上の土壤である事が判明した。この土壤埋土中から多量の瓦が出土し、軒丸瓦と軒平瓦が見られた。また、トレンチ南端部に半径0.7mの円弧状の別の土壤を検出した。同土壤も埋土が黄灰色粘質土で底は平らである。

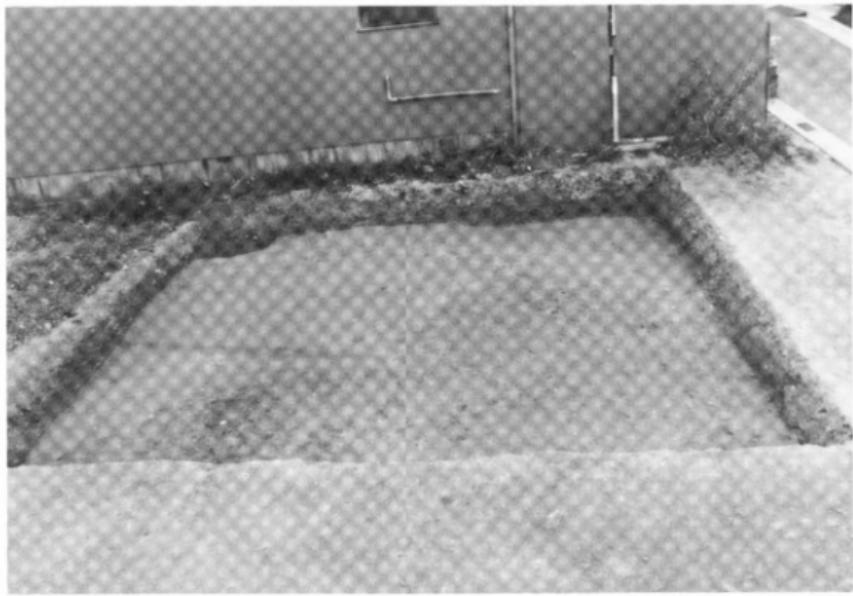
出土遺物は、コンテナ整理箱20箱分の瓦と少量の鉄釘、瓦塔、土師器、須恵器片である。平瓦、丸瓦は細片で復元し得るものはないが、土壤出土瓦が割合大きな破片であった。軒丸瓦は、4種5個体、軒平瓦は1種4個体の出土を得た。軒丸瓦3種は、83-1次調査区出土のものと同形である。もう1個体は、重弁八葉蓮華文軒丸瓦である。一段高く突出した中房には1+8の蓮子を配し、間弁の先端位置に珠文を置いている。また、83-1次調査区出土軒丸瓦①は、

同范例から線鋸齒文が配されている可能性があったが、同一個体のものが出土し、線鋸齒文が配されていない事が明らかになった。軒平瓦は、從来から五十村廃寺出土として公表されている軒半瓦とよく似ている。



図一53 造構平面図

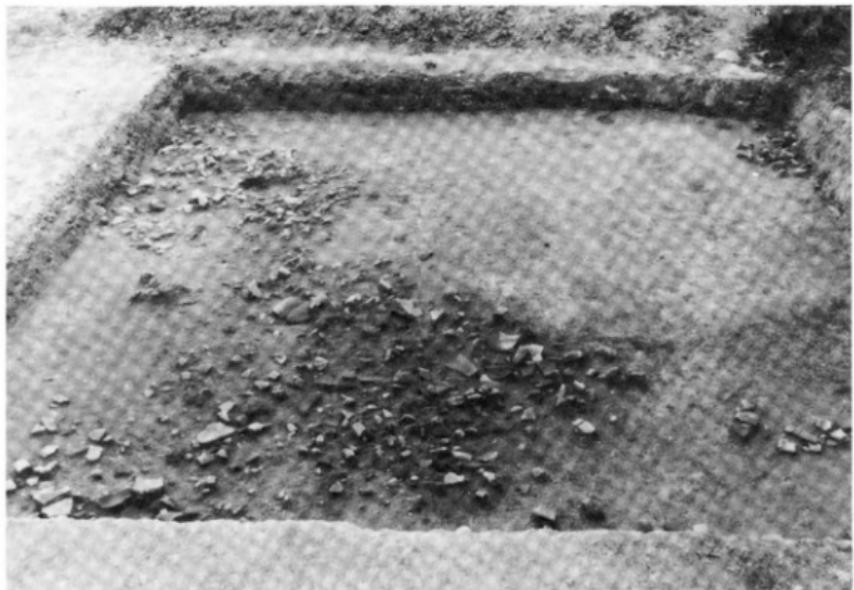
五十村廃寺



調査区全景



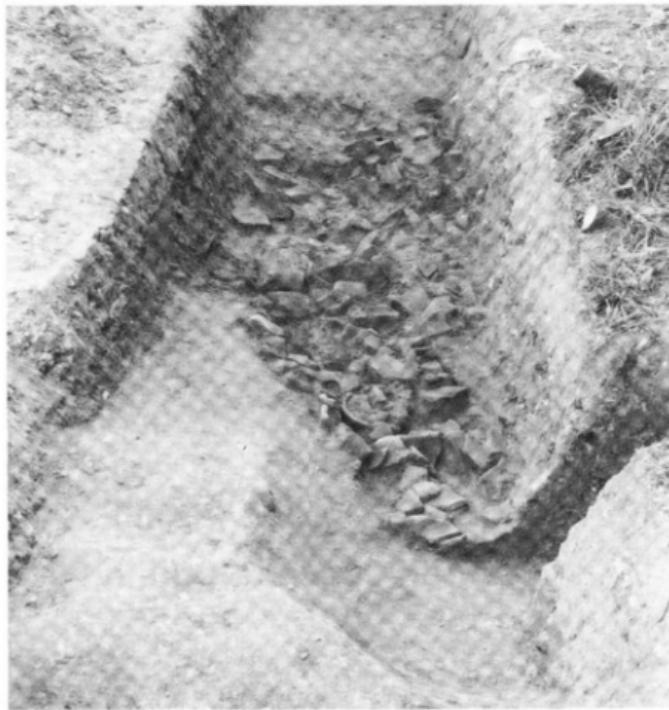
落ち込み



トレンチ全景



遺物出土状況



遺物出土状況

補 註

本郷遺跡、船橋遺跡、太平寺・安堂遺跡については本年度は、以下の通り発掘調査を実施したが、国庫補助事業については本文中で紹介すべき遺構、遺物の検出がなかったため、調査地区位置図のみ掲載する。



図-54 本郷遺跡内調査地区位置図(1/5000)



図-55 船橋遺跡内調査地区位置図(1/5000)

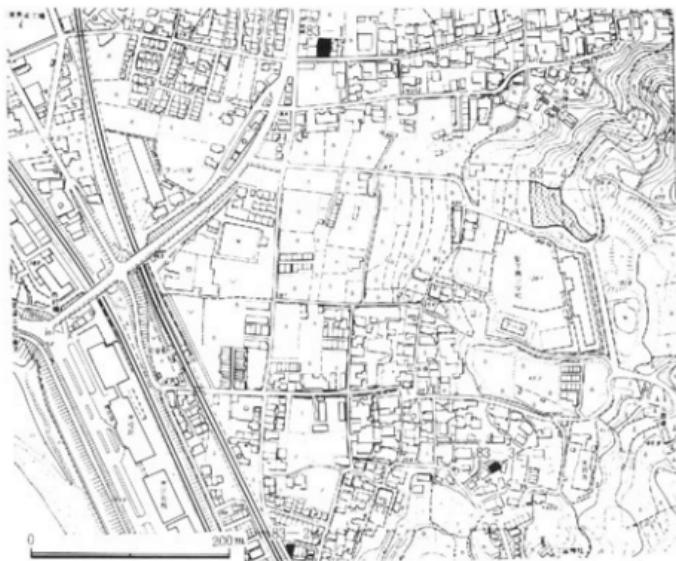


図-56 太平寺・安堂遺跡内調査区位置図

附 章

船橋遺跡

1. 表採遺物

本年度も昨年度に引き続き、船橋遺跡のパトロール、遺物の表面採集を数回にわたって行なった。船橋遺跡は周知のように大和川川床になっており、増水するごとに徐々に遺跡が削られていく。本年度は、昨年度のような大きな被害はなかったが、それでもやはり崩壊はつづいている。現在でも、下図のように比較的残存状態のよい遺物が出土しているので一部報告する。

弥生土器（1～5）1は外面にタタキ目をもつ壺、2～4は壺・甌の底部。5は高杯の杯部で、外面にハケ目が残る。

土師器（6～10）6は壺の口縁部。体部内面に強いヘラ削りが見られる。7は甌。口縁端部をややつまみ上げ、体部外面はナデ、内面はヘラ削りからナデ調整を施す。8・9は甌。10は皿である。

須恵器（11～13）11は短頸甌の口縁部。12は杯身。13は杯蓋。

遺物の時期は、表採という性格上かなり幅がある。これは、船橋遺跡がかなり長期にわたる遺跡であることを示している。川床であるため、保存・調査は困難を極めているが、今後とも注目していかなければならない遺跡である。

（安村）

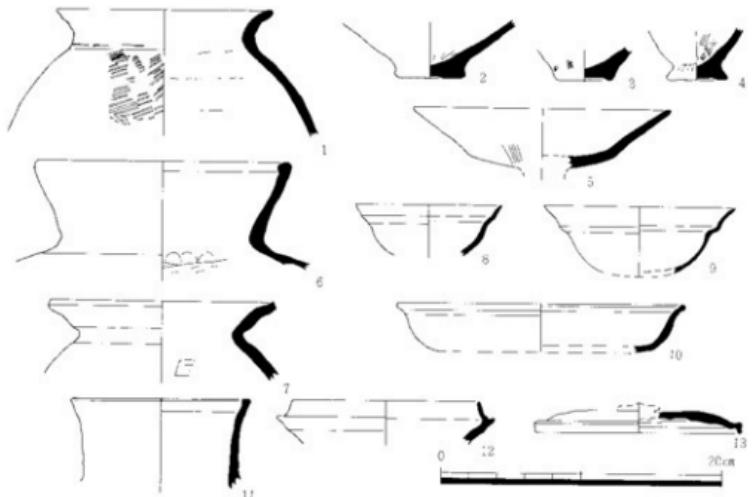


図-57 船橋遺跡表採遺物実測図

2. 徳珍日出雄氏表採遺物

柏原市旭ヶ丘1丁目の故徳珍日出雄氏が採集しておられた船橋遺跡の遺物、玉手山3号墳の埴輪を御子息徳珍一雄氏から寄贈して頂いた。船橋遺跡の表採遺物を一部図化した。

1～5は弥生土器。1は河内では見られない土器である。6、7は土師器、8、9は須恵器である。10は重頸文軒平瓦の頸部分で、須恵質である。11は須恵質で両面に同心円の叩き目が見られる。やや中厚となるが、埠状を呈する。12は博で、二側面にしつくい状の物質が付着している。

(安村)

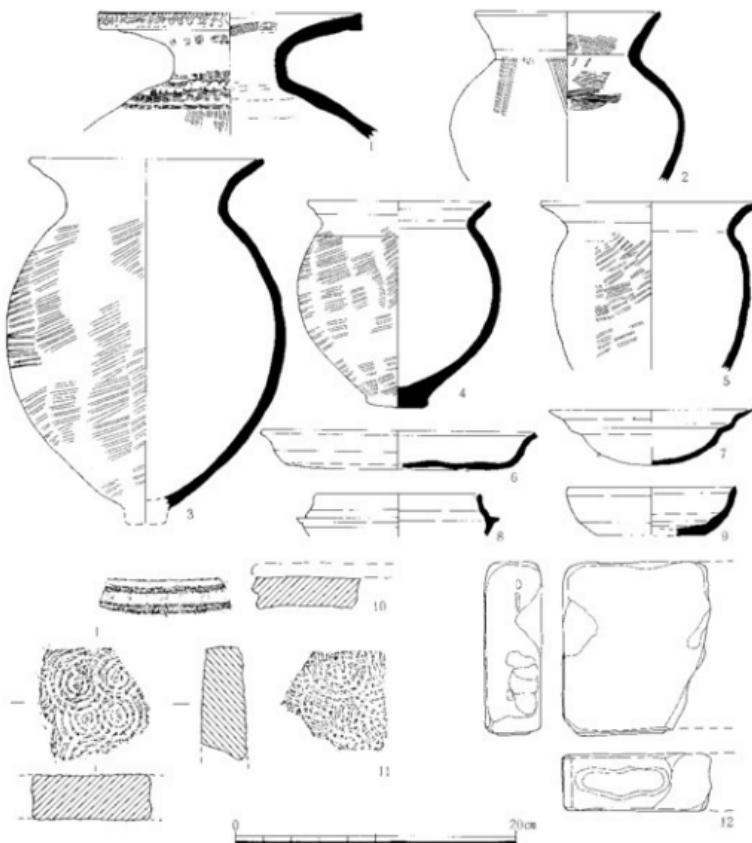
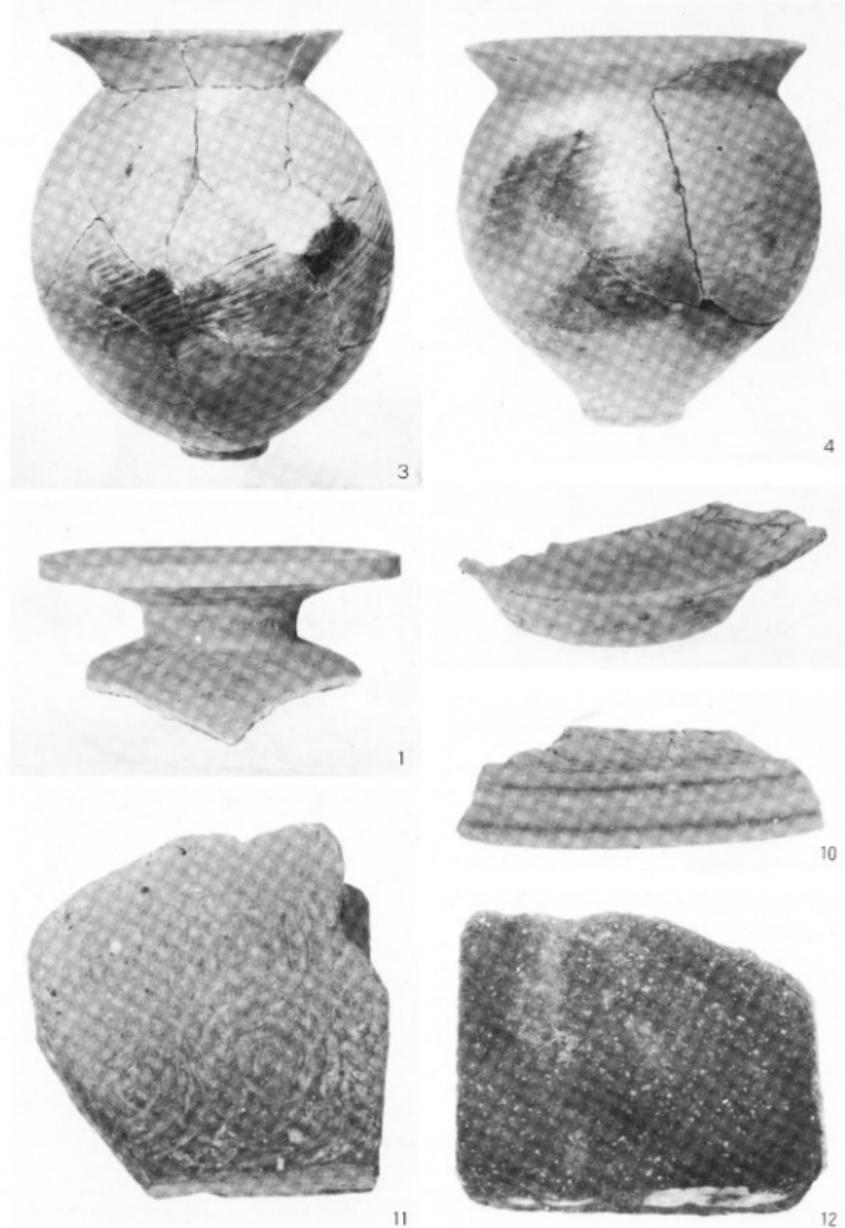


図-58 船橋遺跡表採遺物実測図



玉手山古墳群

1. 玉手山3号墳採集の埴輪

船橋遺跡表採遺物と共に、故徳珍日出雄氏が採集しておられた玉手山3号墳の埴輪を、御子息から寄贈して頂いた。とりわけ、玉手山3号墳の埴輪は貴重な資料である。

埴輪は、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪がある。朝顔形埴輪（1～3）の口径は40cm前後、ラッパ状に開く口縁部の中間に凸帯をめぐらせるものと、めぐらせないものがある。円筒埴輪の口縁部（4・5）は、口縁端もしくは口縁直下に一条の凸帯をめぐらせる。また斜下方に鉗状の突出部をもつ埴輪片（8・9）がある。蓋形埴輪の可能性を捨て難いが、器壁の厚さなどから円筒埴輪に取り付く可能性が高い。壺形埴輪の胴部となり、その埴輪を円筒埴輪の上にのせるためのものかも知れない。10～12は蓋形埴輪片と考えられ、11・12は同一個体の可能性がある。調整は継て、ハケ目の後ナデを基本とする。
(安村)

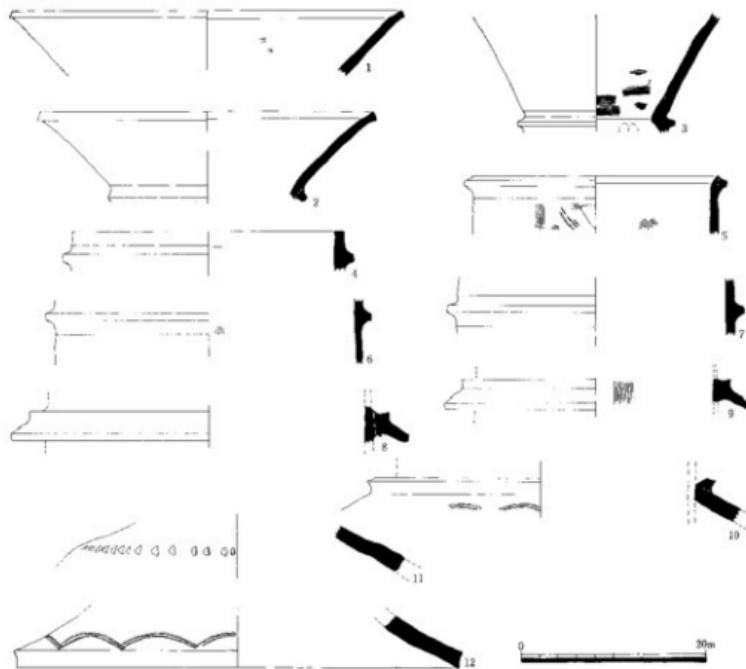
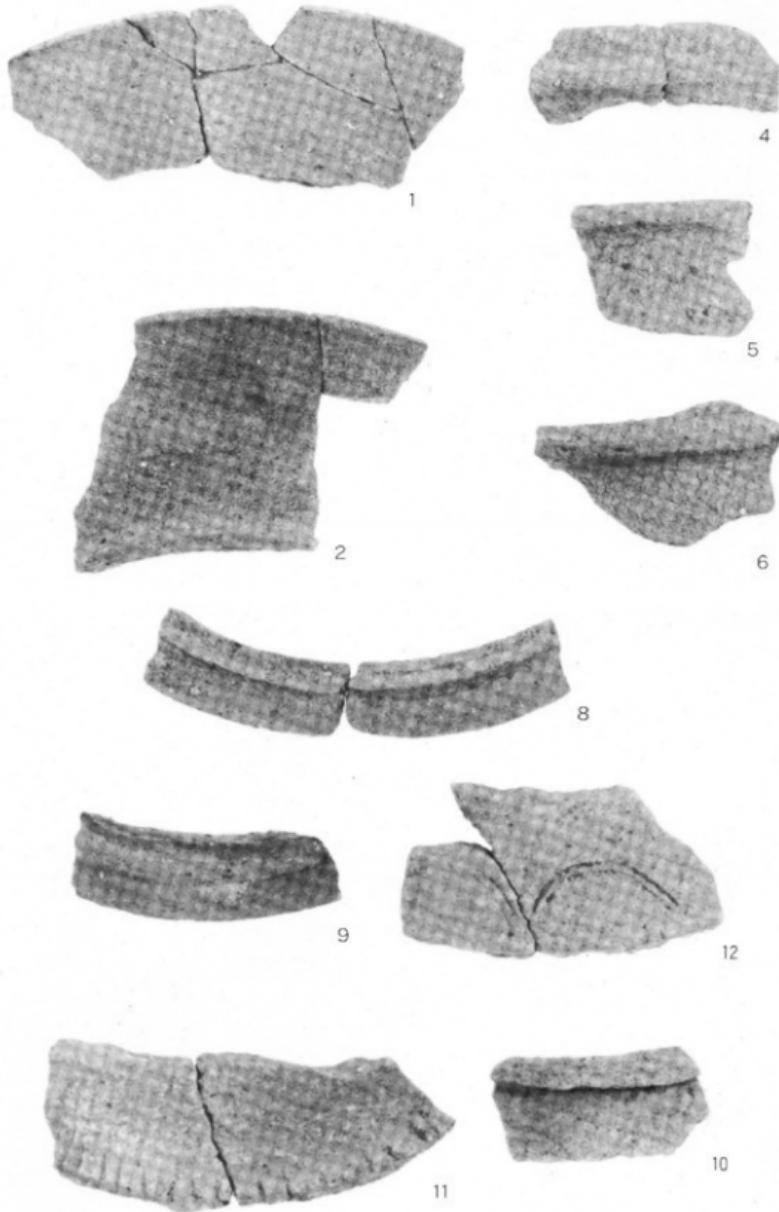


図-59 玉手山3号墳採集埴輪実測図



2. 玉手山出土の埴輪（玉手町 115—48）

ここに紹介する資料は、個人住宅建設に伴ない立会調査を行なった際に出土したものである。調査地は玉手山丘陵の北西斜面、玉手山1号墳前方部より北西に約80m離れた位置にあたり、標高約50mを前後する斜面地である。出土層序は、地山の花崗岩塊を含む緑灰色粘質土の上位1.5m、拳大の礫を多量に混入する黒灰色土中で、この土層は二次堆積土であると判断した。

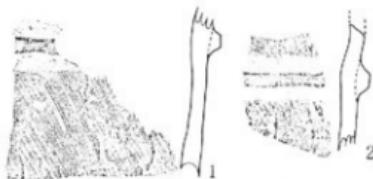


図-59 玉手山出土の埴輪実測図（1/6）

1は円筒埴輪の胴部破片で粘土紐の継ぎ目部分で割れている。外面を10本/cmのタテハケ調整した後、タガが付され、タガは突出度の上下を、胴部調整のものよりは荒い工具で横方向になでられたものである。タガは突出度の低い台形を呈し、内面は從位にナデ調整が施されている。色調は明褐色、胎土には長石が含まれ焼成は堅緻である。2も同様の資料であるが上部に円孔部を留めている。

時期は5世紀末～6世紀初頭に比定されようが、南東方向に仰望する前期古墳の玉手山1号墳とは年代を隔てるものである。
（桑野）

ま　と　め

柏原市内の遺跡を下記の5区に大別し、それぞれの区について、本年度の発掘調査を踏まえた、遺跡の性格や時期等についての調査担当者の討議の結果を以下のようにまとめました。

- 第1区 旧大和川の左岸にあたる、船橋廃寺を含む船橋遺跡及び、本郷遺跡の範囲。
- 第2区 旧大和川の右岸、生駒山地西麓にあたり、法善寺廃寺、三宅寺跡、大里寺跡、山下寺跡、家原寺跡を含む、山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、太平寺・安堂遺跡の範囲。
- 第3区 生駒山地南端部、東山地区と称する平尾山古墳群、烏坂寺跡、及び高井田横穴群の範囲。
- 第4区 玉手山丘陵を中心とする、玉手山古墳群、安福寺横穴群、玉手山東横穴群、及び片山庵寺、玉手庵寺、五十村庵寺を含む玉手山遺跡、原山庵寺を含む原山遺跡、誉田山古墳群、円明遺跡の範囲。
- 第5区 明神山地から田辺・国分市場までにあたる、田辺古墳群、田辺庵寺を含む田辺遺跡、松岳山古墳群、国分寺跡、国分尼寺跡の範囲。

第1区

第1区では、本郷遺跡で二度発掘調査が実施され、縄文時代の中期及び晩期の土器が各一片出土しました。中期の土器は、第1区では初見のものです。弥生時代では、中、後期の土器が出土し、引き続き庄内から布留式土器も出土しています。しかしそれ以後の土器は乏しく、6世紀前葉の円筒埴輪の出土が注目される程度です。調査範囲が狭小なうえ、湧水が激しく、遺跡の中心や変遷は依然として不明です。

船橋遺跡では、本年度もバトロール、遺物表採を実施しました。昨年度ほどの被害はなかったものの、依然として河床の流失は続いています。また、過去の表採遺物を寄贈して頂いたので、その一部を図化し紹介しました。表採遺物の中にも貴重なものが多く、今後とも注意していかなければならない遺跡であると言えます。

第2区

本地区は生駒山地西麓にあたります。山麓部は小さな開析谷が刻まれ、旧大和川の氾濫原との間に扇状地が広がり、遺跡の多くはこの扇状地上に営まれています。扇端部の包含層は、現地表下3m以上を測るように深く、扇奥部に形成された遺跡は開析谷からの流水のため扇端部に向って流失し、原位置を留めるのは困難です。本地区における調査は遺物の出土量が多い反

面、住居址や生産址などの集落に直接関わる遺構の検出が少ないという点も、こうした地形条件によっている場合が多いと言えます。また、ブドウ畠の造成によって大きく地形が改変されていることも、遺跡の位置を正確に把握しえない要因となっています。といっても、昨年度の調査成果からも指摘されるように、人類の足跡は旧石器時代から認められており、各時代を複合する大遺跡が多いことも特徴としてあげることができます。

本年度の調査では、まず、縄文晩期の資料が着実に集積されてきている点をあげることができます。大県遺跡では、晩期でも前半と後半とでは地点を異にして遺物が出土する状況を確認することができました。(大県83-1・3・6次調査)。今後、出土地点の分布をおさえ、地形的な条件と重ねあわせていくことによって、縄文集落の位置を捉えていくことも可能となります。

弥生時代のものとしては、大県83-2次調査の溝内出土石器、同83-5次調査の土壙内一括石器、同83-6次調査の溝内出土のV様式土器などが注目されます。前二者は、弥生集落における石器製作の場と石槍、石劍などの石製武器製作技術の一端を明らかにしうる貴重な資料です。後者は、壺、甕、器台等の良好な一括資料と思われます。こうした資料は、旧人和川をはさみ対岸に展開した船橋遺跡と比較して、大県における弥生集落の性格を解き明かしていくうえで重要なものとなりましょう。

古墳時代では、大県83-2次調査で、昨年度同様6世紀代の土器とともに相当量の鉄製品生産に関する遺物が出土しています。これまで鉄・鉄製品の生産については中国地方が文献にも登場し、また遺物からも裏づけられていることから、常に古代史上の生産に関わる論議の中に俎上されてきていましたが、最近の市の成果をみると生駒山地西麓部を中心とした河内の地域もまた鉄製品の製作と供給という問題意識の下に重視していかなければならないという状況にあります。いずれにしても鉄・鉄製品の生産に携わった大規模集団を想定せざるをえないという感を深めます。同時にこうした遺物とともに馬の骨などが多数出土していることも、交通の問題を含め、集団や集落の性格を検討する上で注視しなければなりません。

寺院址に関するものとしては、大県83-2次調査で多量の奈良時代の屋瓦が出上っています。河内六寺の一つ大里寺の資料と推察されます。瓦の出土量からみて伽藍地に近接するものと思われ、寺地の把握に一步前進したと言えます。さらに大県南83-5次調査ではブドウ畠の急斜面地から遺構、柱穴とともに山下寺址と同種の瓦が出土しており、伽藍地の後背丘陵地における寺域や付属施設の在り方に問題を投げることになりました。

また、大県83-2次調査では、旧国道170号線のコンクリート舗装道路の下から、6~8世紀代の遺物を含む整地層が認められたことから、平安時代に栄えた東高野街道との関係で興味がもたれます。

第3区

第3区は、日本随一の古墳の分布を数える平尾山古墳群が所在する地域で、大小約1500基の古墳が群集しています。本年度の当地区の発掘調査件数は3件で、昨年度に比べ減少しています。しかし、開発自体が従来の農地改良や個人住宅建設工事から、分譲住宅等建設のための宅地造成へと移行しているようです。

その内で、平尾山古墳群、太平寺支群内で新発見の古墳1基を発掘しました。古墳の墳丘は削平されており、横穴式石室の一部が残存していました。特に石室内から多量の木炭と共に鉄滓が出上り、その出土状況は類例の少ないものです。鳥坂寺跡の寺域内でも同時期の古墳1基の遺存が認められ、鉄滓が出上っています。当支群は安堂支群も含めて、大県、大泉南遺跡に居住した銀治集団の奥津城と推定されます。

鳥坂寺は、河内国大県郡に所在した河内六寺（三宅寺、大里寺、山下寺、智識寺、家原寺、鳥坂寺）の1つで、『続日本紀』天平勝宝八年の条（756年）に孝謙元皇が巡拝されたことが知られています。寺院の主要伽藍は、昭和36、37年に大阪府教育委員会によって発掘調査が実施されており、今回の調査は、その東側にあたる尾根上で実施し、掘立柱建物跡7棟、井戸3ヶ所、木炭窯1基、溝跡3条を検出しました。特に重大な発見は、「鳥坂寺」と墨書きされた上器が井戸内から出土したことです。このことにより当寺院が鳥坂寺であり、本調査地が寺域内に包括されることが明確となりました。また、調査地から多量の日常雑器の土器、製塙土器、瓦木器が出土しており、これらの建物群の性格が、僧房、大炊屋、食堂等であった可能性がきわめて高いと言えます。

第4区

玉手山83-1次調査において横穴墳が5基発見されました。府指定史跡である安福寺横穴墳群内に包括されると考えられるものです。安福寺横穴墳と比較して玄室の規模は小さくなっています。今回発見された横穴墳群と安福寺横穴墳群の間に幾分の距離があるので、この間にも横穴墳の遺存が予測されます。この調査における出土遺物に陶棺が何種類か認められます。安福寺横穴墳群からは遺物の出土が少なかったので、横穴墳群の時期や性格の検討に大いに役立つものです。また、古墳時代中期に属する埴輪が一括で出土しています。かつて埴輪円筒格が近接地で検出されており、同種のものと考えると、同様の埋葬施設の広がりを示す貴重な資料といえます。また、平安時代末から鎌倉時代にかけての寺院の存在を示す屋瓦が出土しています。

五十村廃寺83-1次調査では、同寺の主要伽藍の一部と認められる遺構が検出されました。これまで五十村廃寺の遺構についてはその遺存状況が知られなかったので、もはや宅地造成等により破壊しきれてしまい、幻とされていました。国分から太子町への五十村越えの古道をはさんで原山廃寺と対寺し疊をそびえさせていたことが想ばれます。

原山廃寺83—1次調査では、当初原山廃寺の瓦窯跡の比定地でしたが、同寺と時期を同じくする掘立柱建物跡が8棟検出されました。この遺構内からは原山廃寺に直接関係のある遺物として屋瓦片や埠が出土しており、寺院建立に際してなんらかのかかわりを持つ氏族の集落である可能性が強いものです。これまでには原山廃寺の寺域推定地のみを周知の遺跡としていましたが、今回検出した集落の広がりを考え、原山千軒という古名称をもって丘陵全域を新規の遺跡として設定することとしました。

仮称第2国分中学校建設予定地の事前発掘調査(玉手山83—3次調査)において、鎌倉時代の集落跡が検出されています。この地域においても遺跡範囲を一部広げる必要があります。

第5回

田辺遺跡では、昨年と比較すると調査件数は大幅に減少し、顕著な成果は見られませんでした。唯一、国道25号線北側の台地上で7～8世紀の掘立柱建物跡数棟を検出した調査が注目されます。これまでの調査では、田辺廃寺を中心とした地域で集落跡が確認されていたのみであり、今回発見された集落跡は北に約500m離れています。同一集落とみなすべきか、異なる集落とみなすべきかは、今後の課題です。

田辺遺跡以外では、国分尼寺跡の調査が注目されます。柏原市では、初めての調査であり、奈良時代の蓮華文軒丸瓦が出土しています。推定寺域の北辺近くにあたり、幻の国分尼寺も次第に明らかにされていくことでしょう。

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1983年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和59年3月31日

印 刷 東洋紙業高速印刷株式会社

